

527

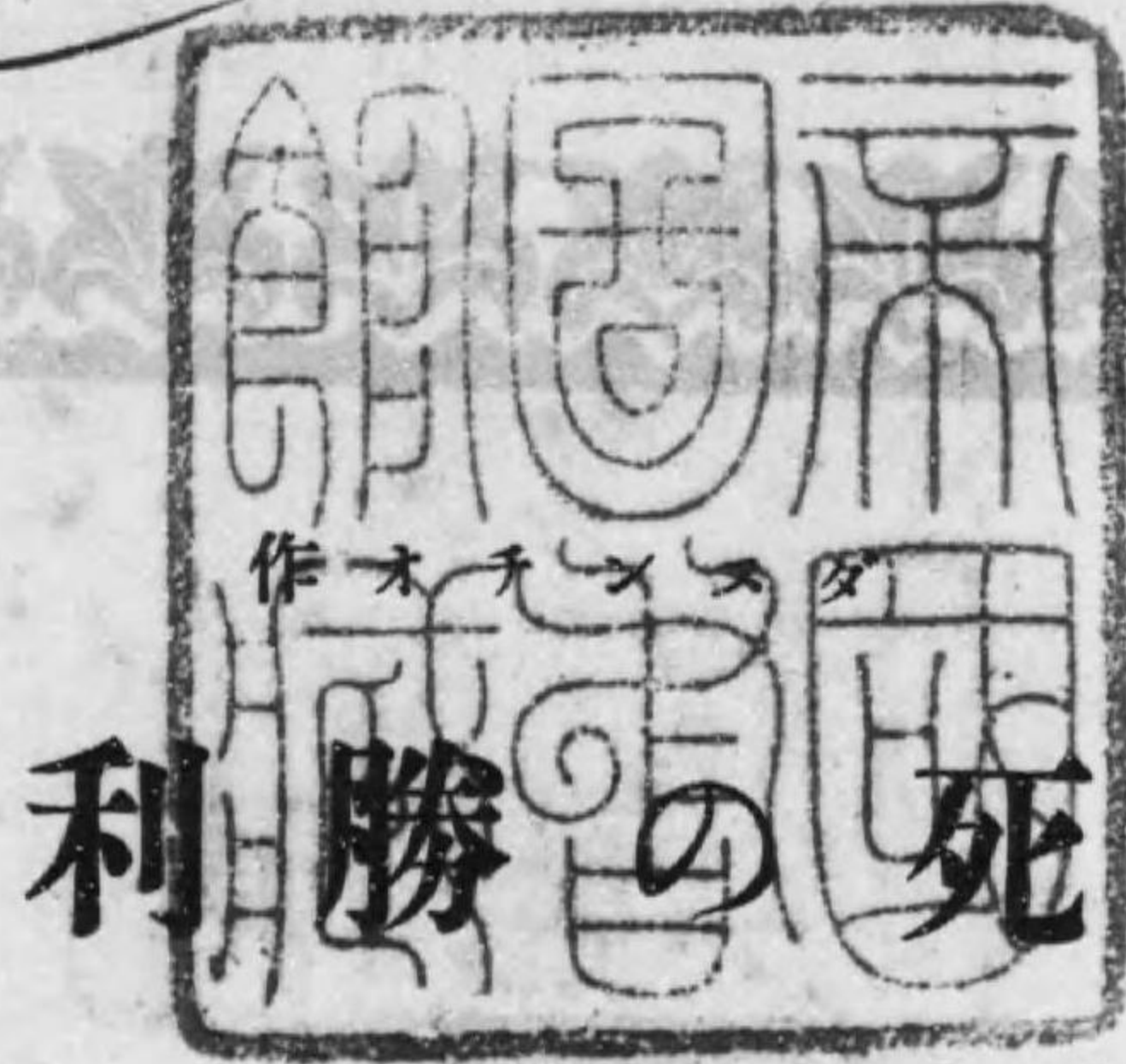
70<sub>1</sub>

6 7 8 9 50<sup>0</sup><sub>m</sub> 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6<sup>0</sup>

始



I 8 N 61



述譯郎太龍藤齋

書叢述譯堂陽春



京東

堂陽春

527-7012

527-1



來  
し  
方



澤山の人が胸壁にもたれ掛つて真下の往來を見下してゐるのであつた。

『何でせうか。』

さういつてイツボリタは、思はず引留める様に男の腕を取つた。ジョルジオは群集の様子を見廻してゐたが、

『誰か落つこちでもしたんだらう。』

といつてそれから『もう歸らうか。』と附加へた。けれども好奇と恐怖の念に驅られた女は

『一寸見て行きませうよ。』

といふので、二人は胸壁について道の外れ迄行つてみた。

三日の午後のピンチオ公園は何となく寂れてゐて、時折聞える物音も灰色をした重苦しい空氣の中へ消えて行つた。

『やつぱりさうだつた。自殺だ。』とジョルジオがいつた。

二人が群集に近寄つてみると殆ど労働者體の者許りで、誰一人可哀さうだといふ様な顔附きもせず唯慵うさうに真下の舗道の上を凝視してゐた。一人の若い男が息をはずませて飛んで來ると、

見物の一人が得意げな調子で聲をかけた。

『遅え遅え。もうサンタ・マリア・デル・ポポロへ擔がれて行つちまつたぜ。』

『死んぢやつたか。』

『死んぢやつたさ。』

すると瘠せこけた青い顔の男が、身體を半ば突出して覗き込みながら、口にしたパイプを抜取つて、銅鑼聲で怒鳴つた。

『何んだそいつあ、其處にあるのは。』

その時丁度一人の馬丁が下の往來で絶壁近く踳踳まうとしてゐたのであつた。皆黙つて馬丁の返事を待つた。

『血だ。』馬丁は舗道の上に滴れてゐる黒ずんだ血泥を、鞭の先で搔廻しながら答へた。

『外に何も無えのか。』とパイプの男が訊くと、馬丁は鞭の先に何かくつつけて引張りながら『髪の毛があらあ。』といつた。

『色は何だ。』

『ブロンドだ。』

そこで絶壁と絶壁との間に奇怪な喝采が起つた。

『もう行きませう、ねえ。』と眞青な顔をしてゐるイツボリタは、氣味の悪い光景に氣を取られてゐる戀人の腕を揺振つた。やがて二人は此の物凄しい場面を離れたが、互の胸では痛ましい死の事を考へてゐた。

『仕合せだよ死人は。』ふとジョルジオは口走つた。『迷ひが無いからね。』

『そりやさうね。』女は疲れた調子でさういつたが、更にもの悲しい氣持になつて、『戀つてみじめなものですわね。』といつた。

『どの戀の事だ、』

『お互ひのよ。』

『次第に醒めて來たつていふのか。』

『妾はさうぢやありませんけど。』

『俺が冷淡になつたといふんだらう。』

男のいらだたしげな鋭い言葉に女は頭を垂れた儘返事がなかつた。二人は相互の心を讀まうと無言の中に氣を揉んだ。

『こんな事から戀の苦しみが起るんだ。まだお前は知るまいが、お前の様子をよく見てゐるとある種の徴候が毎日俺の眼につく。』

『如何いふ徴候なの。』

『不快な徴候だ。戀はするがそれでも鋭敏な知覺を持つてゐる。思ひ出してもぞくぞくするよ。』

女はむつとした色を見せて顔を曇らせた。そして戀人同志の間には今迄にも度々あつた仇敵の様な想念が起つて來た。的を外れの邪推、それで心が痛み悩んでゐる事を互ひに感じた。イツボリタは額に八の字を寄せ、唇を堅く結んでしよけ返つてしまつた。ジョルジオは眼を女からはなさず氣味の悪い微笑を浮べながらいふ。

『やつぱりこんな事から戀の苦しみが起るんだ。胸の奥に不安の念が残つてゐるんだらう。何だかじりじりして我慢が出來ない、一緒に居ると俺がいやになる氣持を、お前には如何しようもないんだ。それで黙るより外は立方がない。むきつけに言つちまふには餘程力があるからだ。俺のいふ事をどれもこれも履き違へる。自分ぢや氣がつかないのだから、一寸した事でもきつとお前は變に拗ねてしまふ。』

女が話を遮らうとする様な素振も見せないで、男はそれを冷淡に思ひ何處迄もやり込めようとしていつた。

『いゝかい。俺は決して怒つちやあるない。お前の罪ぢやない位知つてゐるよ。感情といふものには誰にもきまつた量がある。時が來れば醒めるさ。これは仕方のない事だ。どんな大きな力で

も、戀心の移り行くのを妨げる事は出来まい。考へて見ればお前が俺を可愛がつて呉れてからもう二年にもなるんだぜ。この四月二日が第二回の記念日だ。お前そんな事を考へたことがあるかい。」

女は黙つて頷いた。シオルジオは又獨白する様に、「もう二年にもなるんだね。」といひながらベ

ンチを見附けて腰を下した。女は神經を切り裂かれた様に溜息をついて沈んで了つた。司教プリザイトを乗せた重たさうな黒塗の馬車が、下の街道の石ころを蹴飛ばして通つて行つた。喇叭の音が微かに

フラミニニア通の方から聞えて来る。その後は又もとの様に沈黙があたりの木立を包んだ。雨が少し許りばらりばらりと降つて來た。

『今度の記念日も嘸陰氣臭い事だらうな。』と男は無愛想に語り續けた『だがやつぱり何とか祝ひをしなければなるまいね。俺は苦い物が好きだよ。』

女は痛々しい微笑に悲しみを見せて、思ひもよらぬ優しい聲を出した。

『どうしてそんなあてつけ許りおつしやるの。』

そして男の眼の中を探る様な眼附でじつと見つめた。

『如何したの。』斯ういつた女の優しい調子に男は幾分まごついた。

『如何したの。』又斯ういつて男の手をとつた。

男はもう争ふ氣持もなく、驕鳴返しにいつた。

『如何したといふのか。俺はお前を愛してゐるんだよ。』彼は全身不可抗的な力に牽きずられて行く戀位はじめなものはないと思つた。

『そいぢや妾貴郎あかしを愛してゐないと思つてるの。』

『それや今ん所愛してくれてるだらうさ。けれども、明日あしたとなり一月となり一年となるうちに、本當に愛情が變らずにゐるかどんなものか分つたもんぢやない。今日だつて、かうしてる瞬間でもお前といふ者がすつかり俺のものだといふ證據が如何したら得られるんだ。お前のどれだけが俺のものだといふのだらう。』

『何も彼も皆よ。』

『さうぢやない。まるでさうぢやないよ。お前には世間の人間とおんなじに、俺の入る事の出来ないお前の世界がある。お前の事で俺の知つてる處はほんの僅かなものさ。言葉なんて不完全な記號にすぎないし、靈は交通が出来ない。どんなに有頂天な恍惚の時でも、二人はやつぱり二人なんだ。俺がお前の額にキツスをする。けれども一皮むけばその下には俺に關係のない、別な思想が宿つてゐるのではないか。かうしてお前と一緒に居る。甘つたるい幸福に酔つて、まるで己を忘れてゐる。』

處がある種の考へが浮ぶと、それが皆一時に忽ち冷たいものになつて了ふ。さうなれや一二年

の馴染も糞もあるものか。俺はもう甘えもせず口もきかず、自分だけの立場を守る。そこで長い沈黙が続く。沈黙の裏面は煩悶だ。「何を考へてるんだ。」

斯う俺がきけば、お前も「貴郎何考へてて。」ときよ返すだらう。俺にはお前の考へが分らず、お前には俺の考へが分るまい、だんだんとお互の距離が隔たつてしまひには深淵が出来る。」

『でも』。』とイッポリタは遮つた。『妾にはそんな事無いわ。だつて今迄よりか、もつともつと貴郎に身も心も献けてゐますもの。妾の方が強い戀をしてると思ふわ。貴郎は餘り考へ過ぎるのよ。御自分の考へを大事にし過ぎるわ。初めの頃は貴郎もそんなでなかつたわね。もつと自然でした。生の悩みなんて事には餘り頓着をなさらず、議論なんかついぞした事もなく、接吻許りして下さいました。貴郎おつしやつたでせう。』言葉なんて不完全な記號に過ぎない。』つて。それならさう思つていらつしやいな、貴郎のは餘り非道いと思ふわ。』

それから一寸黙つてゐたが、男に心の中を見せようと思つて、

『死ななければ解剖が出来ませんわね。』

といつてすぐはつとした。そして女らしくないあてつけの言葉を悔いる様な心持でいつた。

『ね、さうでせう。妾を亡すのは貴郎ぢやないの。』すると微かな微笑が男の顔に浮んで来た。

司教の馬車が又通つて行つた。黄昏の霧は薄青く周圍に迫り、バラチノやヴチカアノの頂に鉛

色の雲が垂れかゝつて来た。

『してみるとやつぱり俺を愛してゐるのかなあ。』ジョルジオは自ら自分に問うた。『女がすぐ急ぎ込んで来るのは俺の言ふ事を本當だと思ふからだらう。急ぎ込むのが一つの徴候だ。だがさういふ自分も始終いらいらしてゐるのは何故か。自分は嫉妬深いんだ。女の眼に見える凡ての物が妬ましいんだ。』

彼はふと女の方へ眼を注いだ。女の青みを持つた暗い顔の下から、ほんのりとバイオレットがかつた色がすいて見え、頸に捲いてゐる卵色のリボンの間から、蔦色の入れ黒子が二つ見える。

『今日は馬鹿に美しい顔をしてゐる。』と彼は思つた。『色も青く情熱的だ。調和のとれた額、眼、口が何となく氣高い。それに沈んだいぢらしい様子をして呉れるので俺は尙嬉しいんだ。楽しさうな笑ひ聲を聞くと何時も大抵いふにはれない敵意が起つてくる。』そして彼の女がミラノの姉に會ひに行つた時、何かの事で轉け廻つて笑つたといふ昨日の話を思ひ出した。『してみると彼女は俺と別れてゐてもいゝ氣になつて笑つてゐられるんだ。その癖よこす手紙は何れも此れもきつと悲哀と涙と絶望でいつばいだ。少々俺を馬鹿にしてゐる。彼女はミラノに居た間は毎日歡樂の出来る限りをし盡して居たんだらう。誰にでも微笑かけ、誰にでも握手をしてやつたに違ひない。仇し男から好きだといふ眼附をされた時の女の氣持はどんなだらう。イッポリタだつてまんざら

無關心では居られまい。一體俺が自分のものだとしてゐる證據が何處にあるのか。成程俺はイツボリタが戀しい。だが、一度ならず自分も通りすがりの女をちらつと見て發作的な愛情を感じた事がある。さうした外の女に就ての妄想は、イツボリタを抱きしめてゐる時ですら起つて來るんだ。それだもの彼女だつて道行く男を見て愛情を催さないといふ事はない筈だ。女の心は見る事が出來ない。然し瀆れて行く心は矢張瀆れて行くのだ。彼女は今近頃受けた心のしみでも思ひ出してゐるんだらう。』

彼は苦痛に堪へかねてがばつと立上つた。

『如何したの。何考へてたの。』

とイツボリタは柔らかに訊ねる。

『お前のことをだ。』

『善く、悪く？』

『悪くさ。』

女は溜息を吐いたが、一寸間を置いていふ。

『まだ行かない。』

『さう。行かう。』

二人はもと來た道へと引返して行つた。

『何て悲しい晩でせうねえ。』

イツボリタは感傷的な、調子でかういつて立止つた。日の暮れる迄にはもう間がなかつた。

四面を見廻せば、ピンチオ公園も全く荒れ果てて、深い沈黙の中にある。下の方の市街は一面に灰色に蔽はれてゐた。雨もばらばら降つてゐる。

『今夜何處へ行くの。これから如何するの。』

『如何しようか。俺も知らない。』

二人は途方に暮れて、びつたりと寄り添つた儘立つてゐた。

『貴郎さへお厭でないなら、今晚妾御一緒でもかまはないわ。』とおづおづと女が言ひ出したが、男は何故か邪慳につけつけと當り散らした。

『それにや及ばないよ。』

とさう言つてみたものの、心の中ではさうでもなかつた。今夜此の女と離れて居るといふ事は迎も出來るものではないと思ひながら、力強い、情熱に支配されてびりびりと身震ひを初めてゐるのだつた。

『貴郎』と突然おびえた様にイツボリタが叫んで男の腕にしがみついた。自殺騒ぎで先刻二人が



立止つた場所が眼に入ると、彼はぎよつとした。

『こはいのかい。』

『ええ。』

彼はまだはなさぬ腕を振りほどいて、胸壁の處へ行つて寄り掛つた。もう闇は街を包んでゐたけれども舗道の上の黒い斑點は今も尙眼に見える様な氣がした。そして深くなり行く黄昏の中に彼は血を浴びた若いブロードの男の滅茶々になつた姿を思ひ浮べた。父の弟で、やはり自殺して死んだデメトリオの哀れな死に顔も、電光に照らし出された様に思ひ出された。それから若しも自分が此處から身を投げたとしたら落ちて行く間に意識があるかないか、又石にぶつかつた時の工合はどんなだらうと想つてみて、ぞうつと慄へ上つた。へんにだらう様な感情も交つてゐた。そして近づく夜の享樂やその他の妄想が、非常な速さで次から次へと思ひ出された。

後を振り返ると、イツボリタの視線とが、つりぶつかつた。ぱつちりと見開いた眼がちつと此方に向いて居る。彼は何時もの様に惚々としたといふ様な身振で、イツボリタの腕に自分の腕を通した。それを女は自分の胸へ持つ行つて、ぎゆつと押さへつけた。互に抱きしめて一つに溶けて了ひたい。さうした願が急に我を忘れた二人の間に起つた。

『門が閉ります。門が閉ります。』

番人達のどなる聲が、沈黙を破つて、木立の奥で反響した。

『門が閉ります。』

姿を見せない人達の口から、かうどなられたので、二人は堪らぬ程癢にさはつた。そして足をつつ張つて歩いた。

『門が閉ります。』

『いまくしい事ね。』とイツボリタは毒づいてすたすたと急いだ。

トリニイタ・デ・モンチの大時計が、アヴェ・マリアを打ち初めた。羅馬が見えた。それが恰度地上に下りて來た大きな灰色の雲の様に見えた。既に近所の家々には燈火が點いて、窓から漏れる灯の光は、霧にほやけて大きく反映してゐた。まだ雨がばらばら降つて居た。

『今夜來て呉れるね。ええ。』

『ええええ。行きますとも。』

『ぢや早くね。』

『十一時頃。』

『來なかつたら死んぢやうよ。』

『きつと行つてよ。』

視線が出會つて甘い約束がかはされた。情に負けたジョルジオは  
『堪忍しておくれ。』

といつてもう一度甘える様な眼附で見交した。そして小聲で、

『待つてるからね。』といつた。

『さやうなら。十一時迄にはきつと。』

『さよなら。』

グレゴリアナの街外れで二人は別れた。カボシ・カアセ街を降りて行く女の後姿が見えなくな  
る迄、ジョルジオは見送つた。

『さて彼女も到頭行つて了つた。けれどどんな家へ行くか分らない。其處で何をやるやら分らな  
い。彼女が俗つほい世界へ頭をつつ込めば、其の時はもう別の女だ。俺には何も分らない。』

バイオレットの匂が、ぢき近くの植木屋から匂つて來た。彼の胸は妄想で攪き亂された。『現實  
と夢想といふものは何故かう一致する様に出來てないのだらう。我々は永久に自分自分の生活だ  
け送つて行けばよさうなものだが。』

## 二

朝の十時に、ジョルジオはまだだらしなく寝込んで居た。歡樂の夜の後で、若人達の食る眠り  
である。そこへ召使が起しに來た。

『誰が來たつて留守だといつとけ。もう決して起しに來るなよ。』と不機嫌さうにどなり附けたが  
隣の室で五月蠅い容の聲がする。

『ジョルジオ君、失敬。一寸話したい事があつて來たんだがね。』

それは同窓の友のアルフォンソ・エキジリの聲であつた。賭博と遊蕩に身を持崩した男で何  
時も山師の様な事をやつてゐるが、ジョルジオは一層彼に會ひたくなかつた。

彼は入つて來た。そして召使が退ると、始めて困つたといふ様子をして言ひ出した。

『ねえ君。又かと思ふだらうが、實は君の好意に浴したくて來たんだよ。ちつと許り賭博の借金  
が出來ちやつてね。助けて貰ひたいんだが。何少しなんだよ、——三百リラばかり。是非どうか  
一つね。』

『何だと賭博の借金だつて、驚いちやうね。』

エキジリは、にやりと笑つた。

『まあさういはないで。三百だけ貸して呉れ給へ。ねえ。きつと明日返すから。名譽にかけてだ。』  
『はゝゝゝゝ』とジョルジオは高く笑つた。そしてベルを鳴らして召使を呼んだ。男が入つて來た。

「その椅子の上の着物の中に鍵が入つてゐるから出して呉れ。それから一番目の抽斗を開けて大きい紙入を持つておいで、よろしい、もういつてもいゝよ。」

「四百といふわけには願へないかね。」エキジリはひきつる様な微笑を見せてかういつた。

「駄目だよ——さあ三百。もう是つ限りだぜ。さつさと歸つてくれ給へ。」

彼はにこ／＼金をかくしへ捻ぢ込むと、

「何つたつて君はすごいもんだよ。」といひながら部屋の隅々へ眼をやつて「氣持のいゝ寢室だな。」と椅子へ臀を据ゑて、酒を注ぎ貰を詰めかへた。

「此の頃情婦は誰だい。去年のとは違ふだらうね。」

「おい歸れよ。寝るんだから。」

「彼女は素敵な奴だつたぢやないか。何處かへ行つた様だね。ミラノの姉の處だらう。」と又酒を注いで一息にぐつと乾す。「亭主とは手を切つたつていふぢやないか。工面がわるさうな筈だが、如何してあゝいゝ物ばかり着てられるんだらう。何時だつたかバブキノの通で見かけたが、カムパニアの仲買ひをしてゐるモンチといふ野郎が彼女の臀へくつ着いて行つたぜ。野郎あれで金を持つてやがるからな。」さういつて又三杯目を呷つた。

「寢たのかい。ジオルジオ君。」

エキジリのいふ事はすつかり聞いてゐたが、寢たふりをして返事をしなかつた。

「ジオルジオ君。」

「何だ。まだ居るのか。何をぐづつてゐるんだ。」とびつくりしたといふ風にわざと起き返つた。

「いゝぢやないか、今行くからさ。」といつて寢臺へ近寄つたと思ふと、「おつと、鼈甲の簪が……。」といひながら絨氈の上に落ちて居た簪を拾つて捻つて見た。「盲くやつてらあ。そいぢやあさいなら。どうも有難う。」かういつて手を出したがジオルジオは引込めた儘出さなかつた。

「コニアツクはとてまだね。もう一つ御馳走になるよ。」と又呷つてそれから出かけた。ジオルジオは牀の中で苦い思ひをしてゐた。

### 三

第二回目の記念日は四月二日であつた。

「今度の祝賀は羅馬でない處でませう。戀の記念日なんですもの、何處でもいゝからたつた二人だけでお祝ひしなくちや。ねえ。」とイッボリタがいふと、ジオルジオがきく。

「去年第一回の記念祭の事を覚えてるかい。あれは日曜日だつたね、復活祭の。」

「妾朝の十時に貴郎の處へ行つたでせう。出て出るのも忘れちやつたのよ。」  
 「晝迄は何とか一緒に居られたけど、ひるからは到頭會はずじまひだつたね。情無い記念日もあればあつたもんだ。」

「まつたくね。けれど貴郎のお部屋は花の林の様だつたわ。」

「俺はあの朝、市場で花を買切つて了つたんだからね。」

「貴郎は薔薇の葉を幾つも摺んで妾にお撒きになつて、襟頭から袖ん中迄はふり込むんですもの。」

「やうさう。」

「宿へ歸ると貴郎、帽子や着物の襷にくつ着いてたのが見附かつちやつたのよ。」

「うん。その話は前に聞いたよ。」

「あの日はそれつきり出なかつたわ。出かけようとも思はなかつたわ。全く情無い記念日だつたのね。」女は一寸沈んでそれからいつた。

「かうして二回目の記念日が來るといふ事は、貴郎初めつから御存じ。」

「俺か、いや。」

「妾もよ。」

「免の知れてる戀が何だ。」とジョルジオは思つた。それからイッボリタの先夫の事を考へて見たが、それには嫉妬心は起らなかつた。「今は綺麗に離縁された女だ。それなのに如何してかうも不安が増すのだらう。」

「ねえ貴郎。そいぢや何處としませうか。明日は四月一日よ。妾ねお母さんにもう言つといたわ  
 「近い中に旅行をしますから」つて。でも心配しなくつていよの。立派に言譯があるのだから。」晴  
 れやかにさういつて明るい微笑を見せた。そこに或る偽り事をたくらむ時にすべての女が感ずる  
 本能的な満足が見られた。

「餘り遠い所はいやですわ。何處か奥へ入つた閑靜な所を貴郎知らなくつて。」

「「ベデカア」を見れやいよ。——其處のテーブルに載つてるよ。」

「貴郎も一緒に見て頂戴な。」

女は赤表紙の本を持つて來て、男の傍へくつ着いて腰をかけ、そして愛くるしいあどけない様  
 なしなをして頁をめくつた。

男は女から眼をそらさない。惚々する様な襟足の美しさ。其處からつやつやしい黒い捲毛が、  
 渦の様に捲つて頭の頂へ撫で上げられてゐる。ふと氣がつくと耳環が無い。「成程此の二三日例  
 のサファイヤの耳環を見かけなかつた。金に困つて如何かして了つたんだらう。その日その日の

生計に嘸かし人知れぬ苦勞をしてるに違ひない。だから若し女が俺に愛想をつかさ段になれば氣樂な暮らしを餌にして接近してくる男のものになつて了ふのだらう。その男はあのエキジリがいつた様に仲買だらうが何だらうが構はないのだ。唯男は肉慾の代價として女の不自由を救つてやるだけだ。それから、ある友人の情婦のアルベルチニ伯夫人といふのが夫から自由になる事はなつたが遂に高等淫賣に迄成り下つた事を思ひ出した。

『これはといふいゝ處がないわね』と女はがっかりした様になつた。『ほらこゝにオルネエトオの圖があつてよ。』そして節をつけて其處にある寺の名を讀み立てたが、やがて頓狂な笑ひ方をして首を仰向け、綺麗な額を戀人の唇の方へと持つて行つた。

『まあお寺が随分澤山あることね。きつと變つた處よ。貴郎オルネエトオはお嫌や。』

ジオルジオは不意に生々した氣持になつてイッポリタの額に接吻した。

『オルネエトオか。お前まだ行つた事がないんだね。』

それやしんとして一人居ないんぢやないかと様思ふな町だよ。窓なんか大抵閉め切つてあるし、路地といふ路地は草でばうばうだ。尖塔がにゆつと聳えてゐるかと思ふと不思議でもありさうな大きな會堂もある。』

『靜かでせう。』とイッポリタは淋しい廢都を思ひやりながら呟いた。

『俺が行つたのは二月だつたけ。丁度今日の様な天氣模様でね。たつた一日しか居なかつたんだけれど名残惜しかつたよ。あんまり靜かなんで、何だかホームシックに罹つた様な氣がしたね。』

其の時は勿論たつた一人だつたが、何時か一遍は信心深い、妹みたいな戀人と一緒に四月の月一ぱいもこんな處に住んでみたいものだと思つたよ。』

イッポリタは嬉しさうにつこりしてあどけない顔をして、

『妾これでも随分信心深くつてよ。ね。オルネエトオへ連れてつて頂戴な。』

さういつてぐつと男の足にしがみ着いて、自分の手で男の兩手を握つた。

『もつと話して下さらない。』

男は暫く女の額に接吻してゐるが、今度は長い間うつとりする様な風に女を眺めてゐた。

そして『あんまり額が綺麗なので……。』とふるへ勝に男はいつた。

『もつと話して頂戴よ。』と又女が呟いた。

やんはりした光線が露臺から入つて來た。時折吹き寄る微風に窓の扉はかた／＼と鳴つた。雨の雫がやつと聞える位の音を立てゝ落ちて來た。

既に想像の中で楽しめるだけ楽しんだのだし、その享樂を更に實現してみるといふのは愚な事だといふのでオルネエトオ行きは沙汰止めになつて、アルバノへといふ事になつた。ジョルジオはアルバノは無論の事アリツチアもネミの湖水もまだ知つてゐなかつた。イッポリタは子供の頃、もう此の世を去つた伯母の家がアルバノにあつた關係で、連れられて行つた事があつた。男にはまだ見ぬ處といふ興味があり、女には遠い昔の思ひ出になつた。

愈々四月二日の正午の汽車で行く事になつた。停車場へは時間通りに來て落合つた。群集の中で二人が顔を見交した時には、ぞくりぞくりと嬉しい氣持がした。二人きりで獨占する様な車室をと望んでゐたのに、生憎三人の客と乗合はせてがっかりして了つた。ジョルジオはその中の男一人と女一人に會釋をした。

『あれ、だあれ』とイッポリタはジョルジオの耳もとでかうきいた。  
『今に分るよ。』

その二人連の客をイッポリタは不思議さうに眺めた。男は長い髭を伸ばした、額の禿け上つた老人で、女は波斯シオールを肩にかけて、帽子の下からやつれた神經質らしい顔を見せてゐた。そして女の様子には何處となく英國流のブリユウ・ストッキングに見られる様な特徴があり、男のうるんだまなざしには不思議に生き生きした色があつた。イッポリタははつきりと思ひ出す事

は出来なかつたが唯、此の變つた男女が自分達の戀物語りの何處かの頁に縁がある様に思はれた。  
『ね、だあれ、ねえ。』

『マアトレットさんに奥さんだよ。縁起がいゝぜ。何處であつたのか覚えてるか。』

『如何しても思ひ出せないわ。遇つた事は遇つたのですけど。』

『ほれ、四月の二日にベルシアナ街の會堂で遇つたぢやないか。初めてお前と近づきになつたあの時にさ。』

『さうさう。覚えてるわ。』

彼女は此の不思議な邂逅に改めて二人を眺めて懐かしく思つた。

『縁起がいゝわね。』

彼女は甘い悲しみに捕はれながら、頭を後にもたせかけて、もう一度過ぎた日の事を思つてみた。そして追憶の嬉しさの餘り、びつたりと男へ寄りそつて忍び聲でいつた。『貴郎も昔の事を考へてらつしやるの。』

ジョルジオは人目を憚る様な眼附をして、外套の下から女の手をそつと握つた。同時に二人の心は戀の初めに感じた様に、總身にしみ渡る様な快感を覺えた。暖かなので、ほつと上氣して、今にも寢込みさうな氣がした。静かな汽車の震動に、何時迄もあやされてゐる様な氣分になつた。

窓からは霧に浮き出た緑がかつた景色が時折眼に映つた。空には雲がかゝり、雨も降つてゐた。マアトレットは隅の方でうとうととしてゐる。細君は『ライシウム』を読んでゐる。もう一人の客は目の上へ帽子を引つかぶつた儘高鼻をかいてゐる。ジョルジオがいゝ心持になつて記憶のまゝに、的どもなく我を忘れてゐると、イッポリタが小聲で囁いた。

『まあ、マアトレットさんのよく寝入つていらつしやるつてないわ。まるであかんほの様ね、』それから微笑みながら、『貴郎もお眠くつて。雨は止まないし、何だか變にだるくつて、眼瞼が重つたるいわね。』とさういつて、眼を半分閉ぢて、長い睫の間から男を見た。男はまだ物思ひに耽つてゐた。

『まだ中々かしら。』

けたましましい機關の響は、或る停車場の近い事を知らせた。

『あらアルバノを通り越しちやつたやうだわ。賭をしてもいゝわ。』

『なに、そんな事はないよ。』

『いゝわ。きいて御覽なさいな。』

『セニイ・バリアノオ。』かうブラットフォームでかすれた聲が叫んだ。ジョルジオは驚いて頭を差出してきた。『アルバノですか。』

『いゝえ。セニイ・バリアノオです。』驛夫がにやにやしながら答へた。『アルバノへいらつしやるんですか。そいぢやチェツキイナでお降りになるのです。』

イッポリタはきやつきやつと笑ひ轉けた。マアトレット夫婦はびつくりした顔をして彼女を眺めた。やがてジョルジオも引入れられて笑ひ出した。

『如何しませう。』

『何にしても降りよう』

男は靴を赤帽に渡した。イッポリタが降りて行く時に、驚いてゐたマアトレットは頭を下けて禮をした。

汽車は廣漠たる田舎道を又走り出した。

『チェツキイナ行きは汽車は四時三十分上つて参ります。』と驛員がいつた。

『丁度いゝわ。今二時半よ。是から妾が案内して上げるから、貴郎は黙つてついてらつしやい。さあいらつしやいな、坊ちゃん。妾にくつ着いて来るんですよ、迷子にしちやいやよ。』イッポリタははしやいで、子供にいふ様な事をいつた。

『セニイつて何處なんだらう。バリアノオつて何處なんだらう。』

その邊に村らしいものは見えなかつた。灰色の空の下には低い丘がそこら一面に緑の色を見せ

てゐた。路傍に、節のある一本の木立が、濕つた空氣の中に揺れてゐる。

雨が降つてゐるので、二人の旅人は停車場の一室で休んだ。暖爐には火の氣もなかつた。壁にほろほろの古い地圖が一枚と藥の廣告紙がかけてあるだけである。

『おや。』と『ベデカア』を讀んでゐたイッポリタがいつた。『セニイにはガエタニイノ旅館てのがあゝるんですつてさ。』此の案内が二人をふき出させた。

『煙草でものまうか。』とジョルジオはいつた。

『もう三時だ。丁度今頃だつたつけない、二年前にあの會堂へ入つたのは。』

二人は暫くの間黙つて煙草を喫した。耳を澄ますと、雨の音はだんだん強くなつた。曇つた窓硝子越しに、あのやにっこい立樹が風に揺られてゐるのが見えた。

『どつちが初めかといへば、俺の戀の方が餘程早かつた。あの日より前に、もう俺はお前を見染めてゐたんだぜ。』

あれは何時だつたか晩方、アリナリイの窓の前を、初めてお前が通つた時の姿が眼に見える様だ。それから二三度許りあつたが、何時でも不思議な程青白い顔をしてた。どんなに青白かつたかお前知るまいが、人間の色ではなかつたよ。家々から鋪道いしだみに降り注ぐ瑠璃るりの様な燈火の光の洪水を透してみると、お前はまるでえたいの知れない魔物としか見えなかつたね。誰だか一緒につ

いてた男があつた様だが、そんな事には氣附きもしなかつた。それだのにお前からは一目だつて見返へられはしなかつたからね。』

イッポリタはうら悲しさうな微笑を見せていつた。『然うでせう。本當に青かつたわね、三月も病氣をしてやつと床を揚げたばかりでしたもの。』

雨は激しく硝子窓に吹きつけて來た。例の立樹は根こぎにされるかの様に風に揉まれた。

暫くは二人共雨風の暴威を凝視みつてゐた。イッポリタの心は痛み重くなつた。取返す事の出來ない昔の日を嘆く様に彼等は物悲しい思ひに耽つた。二人の戀の後には、長い『過去』があつた。一杯死骸の入つた異體の知れない大きな網が、何年かその後引摺られて來たのである。

『如何したの』とイッポリタがいつた。

『如何した。お前は。』と男もぢつと凝視ながら問返した。そしてどちらも黙つた儘、また窓から外を眺めやつた。

『イッ・ボ・リ・タ・サン・チオ』かうジョルジオは、その響の魅力を味ふ様に女の姓名をゆつくりと言つてみた。『お前の名前が初めて分つた時は、どんなに胸がどきどきしたか分らない。イッポリタといふのは死んだ妹と同じ名前なまえで俺には懐かしい名前だ。俺はお前を直ぐにもものにしようとはしなかつた。何時かきつと俺を知つて愛してくれる様な時が來るだらうとさうきめてゐたん



だ。或る時偶然、ジオブニ・ズガムバアチの音楽會でお前を見掛けた。

といつても、お前がホールを出ようとする處を一寸見ただけだ。お前はちらりと俺の方を見たね。それから又別の時に俺を見返つた事もあつた。——覚えてるだらう。それはほら、バブキノの入口で、ピアラレ書店の前でさ。」

『覚えてよよ。』

『誰か女の子をつれてゐたらう。』

『ええ、チエチリアつて妾の姪よ。』

『俺がわきへよつたら、お前はすつと通つて行つた。』

その時自分と同じ背恰好だといふ事に気がついたよ。だが以前程青くはなかつたね。』

『覚えてるか。三月の末頃だよ。非常な情熱の起る日が近づいて来るやうな気がして、子供らしい甘い物思ひの中に暮らしてゐた。二度ともお前がバイオレットの花束を持つてるのを見たから、家中をバイオレットで埋めた事もあつた。あの初春が忘れられないね。』

イツボリタは笑つた。男には現在よりもその時分の方が楽しく思はれるのかしらと思ふと一寸不快な氣がした。それから尙もジョルジオは續けて、ベルシアナの會堂の話をした。そこへは佛

教學者や女醫やピアニストや植物學者や畫家など有名な人達が集つて來たが、皆高いレベルにある近代の科學者や、冷かな人生の傍觀者や、夢に憧れる情熱家ばかりであつた。此の學者達は、宗教に對する敬虔な心を以て、音楽に耳を側立てた。會堂の中の高い處に懸つてゐる十字架は、黄金の橄欖と唐草ですつかり飾つてあつた。抹香やバイオレットの花束の香りが入り交つて、それが老人達の心に、音楽によつて伴はれた夢の詩の様に思はれた。ジョルジオは樂しげに、此の詩的な光景を描き出して語つた。

『何てをかきな話ぢやないか。知識で錆びついた羅馬といふ都會の真中で、シヨオベンハウエルの哲學論の二冊も出した佛教學者の音樂家が、自分の享樂に聖堂を借りて、セバスタアン・バハの祈禱樂を演奏して喜んで居るといふんだからね。聴衆の學者達も皆音樂狂で、自分の娘達に合唱させて居るのだ。』

まるでホフマンの書物にでもありさうだ。のどかな春の日の午後など、かうした老學者達が皆人生の祕密に掘り當てる氣で、苦しい勞作を續けて居た研究室からふらりと出て來て、こんな人里離れた禮拜堂へ集つて來て、お互同志の心を結び附けて、現實の肉體を離れた憧れの生活に酔はうとして居るのだ。

すると、此の人達の前で、佛教學者の従妹と、佛教學者の友人との間に、微妙な牧歌が展開さ

れて行く——氣取つていふとね。それから祈禱樂もすむと、その佛敎學者先生、何も御存じなしで、神聖なるイッポリタ・サンチオといふ者に未來の戀人を渡さうと言ふんだ。」

彼は快く笑ひながら立上つて、『これで豫定の記念演説終り。』といった。イッポリタは暫くうつとりとして居たが、やがて、『それは復活前主日の前の土曜日でしたわね。』といった。そして立上りさま、ジオルジオの傍へ寄つて頬に接吻した。

『出掛けませう。もう雨も止んだわ。』

外へ出て濕つほい舗道の上を逍遙すると、冷たい風にぶるつと震へ上つた。眼前に波打つ様な連山が、青い色に包まれて、幾つもく皺になつた處だけ光つてゐた。綿雲の隙間から、濃藍色の空が、そここの水溜りに影を映した。例の小さい立樹は、ほたほた雫のこぼれる度に、きらきらりと光つた。

鈴の音が列車の近づいた事を知らせた。四時十五分だ。驛員が切符を切りに來た。

『アルバノへは何時頃着きませうか。』とジオルジオがきいた。

『七時頃です。』

『夜になるわね。』とイッポリタが口を入れた。

薄ら寒くなつて男の腕をとつた。かうした冷々する晩方に見知らぬ宿屋へ入る。そして眞赤に

燃える燵の傍で、差向ひに料理を喰べる。さう思つて彼の女は、ぞくぞくと嬉しかつた。

女の顔へてゐるのを見てジオルジオはいつた。『室内へ入らうか。』

『いゝえ、いゝの。ほら太陽が出て來てよ。今に暖くなるわ。』

もつとしつほり親しみたいといふ氣持が、急に激しく彼の女に起つて來た。男の傍へひしと、寄添つて甘えかゝると、聲も顔も身振も何もかも皆誘惑的になつて來た。『だけど此の男は過ぎ去つた享樂を心惜しく歎いて居るのではないかしら。』と彼女は思つた。『此の男の話を聞いてから、變に氣が沈んで了つたわ。如何して妾達の戀には、こんな重苦しい「過去」が引つ懸つてるのかしら。もう妾が嫌やになつたのかしら。いゝえ、さう迄思はないのだけど、唯今の妾から仕合せになる事が出來ないだけだわ。妾だつて然うよ。一緒に居て心から嬉しいと思つた事は滅多にないわ。それでも妾此の男が戀しい。此の戀がなければ妾の生活もおしまひよ。二人共戀し合つて、それでこんなに苦しいといふ理由が分らないわ。』彼の女は戀人の腕に重たく取縮つて、その顔を見つめた。物を思へる彼の女の眼には深い優しみがあつた。『二年前の丁度今頃、あの會堂を二人で一緒に出て來たのだつたわ。その時は別段戀に縁のない様なお話をなすつた。だけどあのお聲は、接吻をされた様に心に打たれてどきりとしたわ。本當に不思議な機會だつたわね。今日は二回目の記念日——そして戀はやつぱり續いてゐる。妾達の前には、楽しい夜が待つてゐるの

に、過ぎた日を惜み悲しむなんて何でせう。此の二年の間に妾も随分感化を受けてすっかり變つて了つたわ。すつかり妾は彼の方のものになつたのよ。何時迄も。」  
「貴郎嬉しくはなくつて。」

女は情をこめて、ぐつと自分の身體を男に押附けながら、かういつたので、男は心から幸福さうに身震ひして、「嬉しくないことはないさ。」と答へた。

汽笛が聞えた時、二つの心臓は同じ様にどきどきした。あつらへ向きに乗合の一人もない車室へ入つた。二人して窓を一つ一つ閉切つて了つた。そして互に腕を組み合せた。

窓の外には、單調な田舎の景色が現れたと思ふと、やがてバイオレット色の霧の中へと消えて行つた。

「妾の膝へ頭をのせて横にでもおんなさいな。」

彼が言ふ儘になると女は、「風で、こら、こんなにお髭が滅茶々々よ。」といつて、指さきで男の口にかぶさつた髭を搔分けた。その指さきを男はちゆと吸つた。女は手を男の頭髮にやつて、「貴郎の睫毛も随分長いわ。」と睫毛を賞翫する爲に男の兩眼を閉ぢた。それから額や額顫もいちぢくつた。もう一度、指を一本々々吸はせた、男は、女の唇がじりじりと開いて行つて、そこから雪の様に白い齒の現れて来るのを下から見上げてゐた。

「二人連の旅行はこれが初めてでせう。それに二人きりの車室といふのもこれが初めてね。」と嬉しさうに女はいつた。

「今頃の事ですから、アルバノもお客がゐませんわ。みんな新婚だと思ひますよ。」

といひながら閑靜な宿屋の古めかしい部屋や白い蚊帳の中の大きな寢臺を思ひ出した。急にぞつと寒氣がしたので、外套を引被ると男の肩へもたれ掛つた。

「寒いわねえ。着いたらどんだん火を焚いて熱いお茶をのみたいわ。」

ジョルジオが又何か妄想に耽つてゐるので、  
「何考へてよ。」と不安さうにイッポリタはきいた。

「お前の事をさ。」

彼は女の新婚旅行の事を思出して、「丁度今俺とかうして居る様に、自分の亭主と二人きりで居た事もあつたんだな。」と考へて居た。

「何だか恐しくなつた。」といひながら彼ががばつと立上つたので、さうした苦しい發作を見慣れてゐるイッポリタは男の手をとつてきいた。「苦しいの。」

男は頷いた。女は問詰める元氣もなく、男のやるせない思ひ出を忘れさす積りで、何時もの様に長い長い接吻をその額にしてやつた。

『さあ貴郎チェツキイナよ。』停車を知らせる汽笛を聴くと彼の女は気軽に叫んだ。『早くさ、貴郎降りるのよ。』女は窓の戸を開けて外を見てゐた。『寒いけどいゝ晩ね。さあ貴郎。記念日ぢやないの幸福でなくちや駄目だわ。』

さういつた女の強い然し優しい聲の響で、彼は元氣を取かへした。すがすがしい空氣の中に降りて見ると、すつとしたいゝ氣分になつた。ダイヤモンドの様に澄渡つた大空は、雨でしめつた曠野の上に擴がつてゐた。透きとほつた空氣の中には、まだ黄昏の残照が閃いてゐた。一つ、やがて又一つと星の出で来る様子は、まるで目に見えぬ燭臺の枝の上でちらちらしてゐる焰の様であつた。

『幸福でなくちや駄目だわ。』さういつたイッポリタの言葉を胸の中で繰返してみたジョルジオにとつて、清淨で莊嚴な此の夜の幸福を増す物としては、靜かな部屋と暖い煖爐と白い紗の中の寢臺とは、釣合はぬ程粗末な材料としか思へなかつた。

『記念日ぢやないの。幸福でなくちや駄目だわ。』

## 五

ルド井コ・トオニは古い旅館であつた。擬造大理石の様に塗り立てた、長い玄關側の漆喰壁。

由緒のありさうな石で飾つた、綠色のドアのある踊場。それらは不斷の平和を思はせた。家具調度は皆今の世には見受けられぬ古い形の物ばかりであつた。金箔の剥けた竿から白い質素なカーテンが垂れてゐるし、ロココ式の姿見がさうした古代を思はせる様な物の形をほんやり映してゐるし、すべてが陰氣で、非現實的な氣分で満ちてゐた。

『妾此處へ来て嬉しくつて堪らないの。』と靜かな場所がすつかり氣に入つて、イッポリタがかう叫んだ。『何時までもかうして居たいわね。』

それから彼女は、死んだ伯母のジョブナナの事や、自分の子供の時の事を思出した。そして煖爐の火を凝視ながらそろそろと話し出した。

『伯母さんが居ればいゝんだけれど。丁度此處みたいな家で、有る物は百年でも其の儘じつと置いてあるといふ風だつたのよ。その家の中に、窓のある草置場があつて、其處に鳩が飼つてあつたの。毎日の様に妾鳩に餌を持つてつてやつたものですから、それを嗅ぎつけて皆ドアの處へたかつて来るぢやないの。皆白鳩よ。で、ちつと餌を拾ふのを眺めてゐると何處かの家で笛の音がするの、何時も同じ節で同じ時刻だつたわ。それは快い氣持になつて、妾窓の處へ首を出して、ほかに口を開いて聽いてたわ。しまひには妾その節を覚えちやつてね。此の鳥小屋で子供の時に覺えたのが初めて、到頭音楽が大好きになつちやつたの。』

かうして彼女は、一種の哀愁を帯びた快さを味ひながら、昔のアルバノの笛の節を心の中で繰返してみた。ちよつと沈黙が続いた。静かな家の廊下で鈴の音がした。

『ある時一羽の鵞を引いてる班鳩が部屋の中へびよんびよん入つて来た事があつたの。それは伯母さんの一番好きな鵞でしたわ。その時伯母さんは風邪を引いて寝てゐました。』

妾近所のクラリイチエといふ娘と遊んでゐますとね、その鵞がひよいと窓へ来て、罪の無い顔をしてこつちを見てゐたと思つたら、隅っこへ行つて日向ほっこをしてゐるのよ。クラリイチエがそれを見ると、いきなり飛んで行つて掴まへようとしたの。すると鵞はすつと摺抜けて、びよこびよこ跛をひいて行く恰好つたらないんですもの。可笑しくつて可笑しくつてひつくり返つて笑つちやつたわ。處がクラリイチエは酷い娘なのよ、到頭つかまへて羽を一本引っこ抜いたの。それから……妾思ひ出してもぞつとするわ。妾の眼の前でだんだん引揚つて、到頭眞裸體にしちやつたんですものね。妾もつい釣込まれてきやつきやつと面白がつたけれど、その娘はもう夢中だつたんだわ。鵞は可哀さうにやつとの事で逃げて行つたわ。それを又二人が追つかけようとする、恰度ちりんちりん鈴が鳴つて伯母さんが呼んでゐるんですから、さあクラリイチエは梯子段から逃げるし、妾は妾でカアテンの蔭へ隠れちやつたわ。鵞はその晩死んぢやつてよ。そいで結局は妾が殺したといふ事になつて、羅馬へ追ひやられたのよ。もうそれから伯母さんには二度と

遇へなかつたわ。妾どんなに泣いたかしのやしないわ。でも此の後悔は何時迄も消えないでせう。』  
女の腫れほつたい眼はちつと火の方に向いてゐた。街の方からは舗道を敲く石屋の規則正しい傭い響が聞えてゐた。

## 六

或る時二人はネミの湖水から疲れて歸つて来た。彼等は火の様に眞紅な盛りの椿の花に蔽はれたチエザリニの別荘で食事をして来たのであつた。

二人は何時もの様に茶をいれさせた。袍を開けて搜物をしてゐたイツボリタが、ふと男の方を振返つて、紐でくくつた紙束を出してみせた。

『これ皆貴郎から頂いたお手紙よ。何處へでも持つて行くの。』

ジョルジオは満足さうに叫んだ。『みんな。みんな持つてるのか。』

『さうなの。みんなだわ。葉書から電報迄もあつてよ。たつた一枚だけ家で見つかりさうだつたので、焼いた葉書が惜しいと思ふんだけど、焼屑は拾つといたわ。でも文字は幾らか分るの。』  
『どれお見せ。』

女はわざと焦らす様に手紙の束を隠した。ジョルジオが笑ひながらその方へ寄つて行くと、あ

「そんなにたんとでもないわ。二百と九十四通しきやないんですもの。考へて御覽なさいな、二年といへば日敷にしても七百三十日ぢやなくつて。」

二人は笑み交してテーブルの前に並んで讀出した。かう書いた手紙が出た。

「その夜といふもの、貴女の爲に私はどんなに咽び泣いた事でせう。悶えに悶えて、殆ど一睡もしてませんでした。」

私は今の處、唯た一つの事しか考へて居りません。それは若しかしたら、貴女が私から離れて遠くへ行つて了ひはせぬかといふ心配です。けれども私は確信してゐます。貴女が無ければ私は生きては居られません。『イッポリタが出發した後書いた手紙がある。』私はやつとの事で此のペンを取ります。元氣も意氣地もなくなつてしまひました。毎日の生活は息苦しい程、重い鉛の様に感ぜられます。時間の經つのがもどかしい程緩く、その一秒一秒に不幸が増して行きます。此の苦痛は果して肉體的か精神的か、私には分りません。唯無抵抗なしびれ切つた生活を意味もなく續けてゐるといふ許りです。『又こんなのがある。』今日四時に、丁度私が疲れきつてゐる時に、貴女からの御返事を受取りました。幾度讀返したか分りません。文字の中から、貴女が口に出さない、心霊の祕密を見出さうと、繰返し繰返し幾度讀み耽つたか知れませんが、その紙の表面に、貴女の手や呼吸や視線の跡を捜してみました。貴女の長い間接吻した花を送つて下さ

わて、隣の室へ逃げ込んだ。

「いけないのよ。いけないつてば、見ちやいや。見せるものですか。」

「ねえ。見せたつていゝだらう。二年前の手紙つてどんな事を書いたかな。見たいもんだね。」

「とても猛烈よ。」

「お見せよ。」

到頭男の甘える様な言葉に笑ひながら頷いた。

「だけどお茶の來る迄待つて頂戴な。それから一緒に讀むことにして。暖爐に火を焚きませうか。」

「いゝよ。大分今日は暖かだ。」

雲のない晴れた日のことで、銀色の光はだらけた空氣に流れ込んでゐた。チエザリニの別荘で摘んで來たバイオレットの高い香りは室中に充ち満ちてゐた。

やがてバンククラチオといふ忠實な僕が、何時もの様にここにこした顔を見せて、茶をなみなみと持つて來た。茶は香りがなかつたけれど、その代りに砂糖壺に茶碗は今迄見た事のない型の物であつた。イッポリタは茶を注いで、それから紙束をほどいた。

「随分たんとあるぢやないか。」とジョルジオは驚く様にいつた。

い。さもなくば、紙面の上へ唇を押附けて、その處へ輪を置いて置いて下さい。接吻もせず抱きもしない内に、貴女は何處迄行つたらう。そして何年経つたのだらう。私は物思ひに疲れ果てて時を過してゐます。此の室の陰氣な事は、まるで墓穴の様です。折々棺の中に入つた自分の姿が目に見えます。』

『妾その時始めて羅馬を出たんでせう。』とイッポリタがいつた。『而もたつた十五日間よ。』

ジョルジオは以前狂ほしい迄に彼女の愛に溺れた事を思出したが、その時の心持は再び味はふ事は出来なかつた。してみると、以前の熱情が醒めて來たのだらうかと思つた。さうではない、此間も女がゐなくなると、かなり辛い思ひをした位だから、とも思つた。けれども、久しい前の自分と今日の自分との間の距離は、逆も一緒にして了解に行かなかつた。甘い言葉に適當な材料がないので、誇張した言葉を使つて矢鱈に調子を高めて書いたこれらの艶文は、今になつてみると、讒言の様に貧弱な空虚なものだつた。そこで徒に饒舌の部分はどンドン飛ばして、思ひ出に残つたエピソードらしい處だけを搜した。

一通にはかう書いてある。『六時頃に、何時も晩方に貴女と落合つたモルテアの園へふらりと入つて行きました。貴女の出發前の三十五分間の辛さは到底堪へられませんでした。貴女は出發しました。貴女に別れを告げ、顔中に接吻を浴せかけてから、もう一度「私を忘れてはいけません

よ。』と繰返す間もなく、貴女は行つて了ひました。十一時頃になると、思はず私は振返つてみました。貴女の良人は友人と、何時もの連れの一人の婦人と一緒にやつて來ました。きつとその人達は貴女を見送つて歸つて來たのでせう。その時私はあまりの苦しさに直ぐ立つて外へ出ました。その三人が、許してやれぬ貴女の出發に關係のない様な顔をして、毎晩の様に笑つて話してゐるのを見ると、私は腹が立つてたまらなかつたのです。彼は、夏の夜毎にイッポリタが、野暮臭い三人の間に挟まつて面白くもない話に耳を傾けてゐた様を思出してみた。又一通にかうあつた。『僕は貴女を疑つてゐます。僕は貴女の事を思ふと何だか腹立たしくなる。いやみを言つても初まらないから、もう書くのは止めますが、一體貴女は僕を愛してゐるのですか、それともいゝ加減に戀のおしやべりをしてゐるのですか。あゝ惱ましい。僕は疑つてゐます。何だか氣が變になりました。』

『それは妾がリミニに居た時分よ。八九月の酷い暴風に貴郎到頭ドン・ファン丸でいらしたわね。』とイッポリタがいつた。

『ベネチアから發信したのがある。』とジョルジオがいつた。それを二人で讀んだ時には同じ様に動悸がした。

『九月からはベネチアに居ります。何故か悲しみが次第に襲つて來ます。ベネチアは僕を麻酔さ

せるのだ。僕は憂鬱の爲にもう死にさうです。何故貴女は此地へ来ないのです。あゝ来て下さい。一時間位は如何にでもなりませうに。』又別の手紙に、『僕は絶えず妙な事を思つて居る。それは若しかすると貴女が、ひよつくらやつて来て僕のものになるかも知れないといふ事です。』又『ベネチアの美は貴女の美を隈取る事でせう。青白い琥珀色か、鈍い黄金色の、ふくよかな貴女の顔色しほみゆくばらの匂のする顔色は、此のベネチアの空氣と確かに調和します。僕はチプロの女王カテリナ・コルナロがどんな顔をして居たかは知らないが、何となく貴女に似てゐた様に思はれてならない。』此處にはバオロ・ペロネエゼの名譽ある作品がすべて集まつてゐる。その一つを観た時に、直ぐ二人でリミニのサン・ジウリアノの寺へ參詣した事を思ひ出しました。此處でもし不意に貴女がヴィニオラから此のベネチアへ来て呉れたら……』

『それは貴郎。』とイッポリタがいつた。『如何する事も出来ない程ひどい誘惑でしたわ。妾貴郎が思つてらつしやるよりは、もつと苦しい思ひをしてよ。毎晩寝ないで、如何したら皆に分らないやうに抜出せるかとそればかり考へてゐたのよ。それで到頭恐ろしい智慧を出しました。それから何をしたか覚えがないわ。唯九月のある明け方に貴郎と二人ゴンドラに乗つて、カナル・グランデにゐると知つた時は本當だといふ氣がしなかつたの。』

『だが俺もお前を待たせ。どんな事をして、お前は出て来るに違ひないと思つたから。』

『だけど、それが輕率の起りだつたと思ふわ。』

『それやさうだね。』

『だけど、それだけいゝ事をしたんぢやなくつて。妾が全く貴郎のものなら、妾の方には何も後悔する事はないわ。』

ジオルジオは女の顚顛へ接吻した。これは多くの追憶の中で、一番楽しく一番大きな事件であつた。二人がダニエリ旅館に忍んで滞在した二日間は全く前後を忘れた二日間であつた。さうしてゐる中にイッポリタの破滅が始まつて來た。此の後の數通の手紙には女の初めの頃の苦勞が書いてある。『お前の苦痛とお前の家庭上の紛糾が皆僕から出てゐると思ふと、言ひ知れぬ悔恨に身を引き裂かれる様だ。僕が元である禍の罪を許してくれ。その代り僕の熱情の深さを底の底迄見ぬいておくれ。』

熱情は一頁一頁と高まつてゐた。すると四月から七月迄の手紙が抜けて、その間が不明になつてゐる。大悲劇の起つたのは此の四ヶ月の間であつた。彼の女の良人は氣が弱いので、イッポリタの反逆に勝つ事も出來ず何處かへ行方を暗ましてしまつた。その後には財産の大半を失つた様な面倒な事件があつた。イッポリタは母親や妹と一緒に田舎家に隠れてゐたが、子供の時患つた事のある癩癩性の神經病にとつつかれた。八月の日附の手紙の中に、『僕がどんな恐怖に襲はれて



ゐるか、逆もお前には分らないだらう。お前の身悶えして苦む様が目に見える。まるでお前の傍に居る様に、お前の恐しい病氣がすっかり手に取る様だ。何だかお前が僕を呼んでる様な氣がしてしやうがない。』それから三日後には、『もう此のたよりの書くのも疲れた。可哀さうな戀人よ。僕は唯じつと部屋の隅でお前やお前の病氣の事を考へてゐる。驚くぢやないか。ふと僕の眼の前でお前の青い手が痙攣してゐる。指の間には掻き捲つた髪の毛が捲き附いてゐるんだ。』少し先には、『お前の手紙に、『もし此の病氣が貴郎のお手に抱かれてゐる時起つたのだつたら……。いゝえいゝえ、もう妾お目には掛りますまい。』とあつたが、まさか正氣で書いたのではあるまいね。早く次の手紙でお前の全快を知らせてほしい。どうしても回復してくれなければいけない。いゝかいイッポリタ。』

『お前が絶望する道理はないよ。昨日一日かかつて神経病に關する論文を讀んでみた。大丈夫お前は癒る。もう是れから發作も起るまい。病後も無事で健康を恢復する事は大丈夫だ。』病後の頃の手紙には優しい心が籠つてゐた『砂濱で採つた花をお前に送る、野百合の一種で、生えてゐる處は目が覺める様に美しい。香りも非常に高い。海岸一帯はかういふ情熱的な百合の花で一面だ。焼けつく様な太陽下、煮えくり返る様な砂の上で、此の花が見る間に開いて二三時間も保つ。何て可愛らしい花だらう。』

『まだ寢床の中で書いてゐる。熱はなくなつたが左の眼の上に神経痛が残つてゐて痛い。僕は病床でお前の事ばかり考へてゐる。姉のクリスチーナが、それはそれは物優しく傍にゐる額の汗を拭いてくれなどする。僕は眼を伏せて、その手がお前の手である様に想像した。と同時に言ふに言はれぬ慰めを感じ、胸の中でお前の名を呼んでみた。そして嬉しさうに笑つて姉を見つめたが、その時の僕の想像の中に起つた、お前と姉との愛情の混交程、純に精神的に思はれた事はなかつた。これは逆も言葉で言ひ現せないが、お前には理解出来るだらう。』

十一月の初旬迄は、手紙が毎日の様に續いてゐる。けれども幾らかづついやみがふえ、疑ひや苦情が入つて來た。『随分遠く迄離れて行つたものだね。僕の苦しめられるのは唯單に肉體が引分けられたといふばかりではないんだ。何となくお前の精神迄が、僕を見限つて了つた様な氣がする。手紙をくれ。お前が全く僕のものか是非聞かせてくれ。』次には、『考へて考へて、その考に針を打たれてゐる。時々その針を抜取らうとして狂氣の様になるが、それは槍よりも強くて堅い。何といふ運命……。それが戀なのか。さうではない。これは僕の身に限つて根を張る一種の奇怪な病氣なのだ。』その次に、『決して決して完全な平和と完全な安慰とは僕には來まい、何故ならば、僕はお前の全心身を吸収しなければ承知しないのだから。僕は哀むべき一個の病人だよ。』

『昨日十一時から一時迄の間、僕は自分の最後に就いて眞剣に考へて見た。僕のあの哀れな叔父

のデメトリオの靈が、一三日僕の心を動搖させてゐた。ふと變な心持になつて、「解放」といふ空想が浮んだが、間もなくその危険も去つた。その時は全くつきつめて「死」の事を考へたのだ。』

イッポリタの歸りを待つ爲に、ジョルジオは十一月上旬羅馬へ歸つてゐた。そしてその頃の手紙にはあまり面白からぬいやな話がつてゐた。『お前の手紙によると、「心變りをすまいと思つてどんなに氣を揉んだか知れませんか。」とあつたが、之は如何いふ意味なのか。驚かされたといふその恐しい事件とは何だ。

お前も變つた様だ。何となくお前に裏切された様な氣がするが、俺は苦しい、多分何かの豫感か前兆だと思ふよ。』

讀んで行く中にジョルジオは、疵口の裂けた様な苦惱を表はした。イッポリタは讀續けさせたくなかつた。彼の女はその晩の事を覚えてゐた。それは先夫が突然カロンノの隠れ家へ暴れ込んできて、狂人らしい眼附で、彼女を連れて行くといふのであつた。殘虐にも力づくで、いきなり掴み掛つたのだ。『あれえ』と叫んだ事を思出した。

『澤山澤山。』と女はジョルジオの首を自分の方へ引寄せていつた。『澤山ですつてば、もう讀むのはよませう。』

それでも男は讀み續けた。『その男の出て來たといふ譯が分らない。腹が立つが、今自分の考を

# 欠

欠

破いてある

誰

だ

俺

は

二體

に

七

わ

る

た

ら

ん

ふ

る

さ

ん

四月の下旬にイッポリタはミラノへ出發した。  
 姉の義母が危篤だといふのであつた。ジオルジオも直に旅行の支度をしてつた。これは何處か變つた、餘り人の行かない所を捜す積りであつたし、それに二人は五月の半ば頃再び落合ふ約束だつたからである。

その時丁度ジオルジオは、母から意外な便りを受取つた。母はある不仕合せな目に會つて、殆ど絶望してゐる様だつた。それを知つた彼は、子の義務として直ぐにも親の家へ歸らなければならなかつた。その爲に、惱ましい胸を裂かれる様な別れを、女に告げなければならなかつた。それは今迄にない残酷な別れだつた。イッポリタが彼に『さよなら』を告げた時に彼はいつた。

『又會へると思ふかい。』

女が扉から出る時に、彼は最後の接吻をした。そして接吻された上へ、彼女が黒い面帕を下すのを見てゐる中に、彼の心は深く痛んで、何か不吉な前兆でも見る様に思はれた。

ジオルジオの生地はグアルチアグレレであつた。彼が故郷の親の家へ歸つて来て、母親に抱きついた時は、思はず涙ぐんで了つた。それ程氣が減入つてゐたのである。彼は又、自分の家で

ありながら、何故か他人の家へ訪ねて來た者の様な氣がした。晝餐や夕餐の間なども、フォークの音の外、すべてがしんとしてゐて、あさましい位不愉快であつた。不和と暗闘の空氣が、重く此の家中を包んでゐて、彼の胸迄も壓迫したのである。

到着したその晩、母はそつと彼を呼んで、自分の苦勞や心配を話しかけた。それは夫の不行跡であつた。

『お前のお父様は恥知らずだよ。』

さういつた母の聲は怒りで震へ、眼は涙ぐんでゐた。兩頬の瘠せも目に立つた。

『恥知らずの碌でなし。』

さうした母の聲は、二階の寢室へ落着いた後も彼の耳に附いてゐた。心は遠く離れた戀人の方へ行つてゐる彼は、さうした母の泣き言を聞き度くはなかつた。戀以外の事に惱まされるのは何といつても嫌でたまらなかつた。自分の室に入ると彼は扉を閉め切つた。五月の月が露臺の窓を照らしてゐるので、窓といふ窓を開け放し、欄干にもたれて冷い夜の空氣を胸一ぱいに吸つた。眼下に見える平和な谿谷、まだ雪で眞日なマエルラの山、サンタ・マリア・マツジォオレを取巻いた羊群の様なグアルチアグレレの町、眞向ひの一軒家から流れてゐる黄色な灯、かうした夜の美は彼の苦惱を忘れさせた。間もなく、誰か彼の室の扉を軽く叩く音がした様であつた。怪みな

がら開けてみると、それは伯母のジョコンダであつた。

『妾を忘れたのかね。』と彼の女は彼に接吻しながら言つた。考へてみると着いてからまだ伯母には會はなかつたので、その詫びをしながら、手を取つて坐らせて懐かしさうに話し掛けた。

伯母のジョコンダは、彼の父の姉で、もう六十になる跛者びつこであつた。信心一方にこり固まつて此の家の一番上の部屋で、自分一人の世を送つてゐた。貪食が持前で、無暗に甘いものが好きであつた。ジョルジオは歸省する度に、必と砂糖漬やロツソリの箱を土産に持つて來るので、彼の女は一層彼を可愛がつた。

『まあ。よく歸つて來たね。よくまあ。』

何も話といつてないので、唯おどおどしながら、何かを待つてゐるといふ風をした。

『あゝしまつた、伯母さん。』とジョルジオは氣がついて申譯なささうにかう言つた。『菓子を持つて來るのを忘れちやつた。』

老女の顔附は變つて痙攣ひきつける様になつた。『なに、そんな事は如何でもいゝけれどね。』

『待つて下さい。明日何か取り寄せますから。手紙でもつて。』

『それやお前、オルソリネの店へ行けば、……あるさ。』と老女は元氣附いていつた。

『可愛い兒だね。ジョルジオが居てくれなかつたら如何しよう。家の今度の紛料ごたごたは、全く神様の

お罰だよ。まあ露臺へ出て、盆栽を見ておくれな。水でも灌かんけてやらうといふのは妾ばかりさ。

妾は始終ジョルジオの事を忘れはしないよ。先にはデメトリオといふものが居たが、今ぢやお前ばかりだ。』さういつて彼女は、甥を露臺へ連れ出して、花の咲いた盆栽を幾つも見せた。それから跛足を曳きながら何處かへ行つたと思つたら、直ぐ持ちきれない程水を満した如露をさけて來た。

『おや、如何してそんな事迄なさるんです。御自分で水迄やらなくつたつていゝぢやありませんか。』

『妾が氣をつけてやらなければ、誰がお前……。』

老女は鉢に水を注いだ。高齢を思はせる彼女の喘あへぎを聞く事は若い男にとつて苦痛であつた。

二人は露臺にじつとしてゐたが、やがてジョルジオがきいた。

『何でせう。あの燈火の點いた窓は。』

『あゝ。あれはドン・デフエンデテンテ・シオリの家さ。主人が死にかゝつてゐるんだよ。』

二人は四角な黄色い燈明あかりの中に動く人影を見まもつた。老女はそろそろ冷たい夜氣に震へ出し  
てゐた。

『さあ伯母さん。もうお就寝やすみなさい。』

一階上の伯母の部屋の闕の處迄來た。病み腐つた様な臭氣が部屋の中からぶんと匂つた。  
『お入りよ。』

『いゝえもう。お就寝なさい。』

老女は急いで中へ入つたと思ふと、直ぐ又扉まで歸つて來た。そしてジョルジオの眼の前で、持つて來た紙包を倒さまに振つて、掌の上へ砂糖の粉をふるひ落した。

『ね。是つきりしか残つてないのだよ。』

『えゝ、明日きつと。お就寝なさい伯母さん。』

さういつて伯母を後にして、また露臺に出てみた。満月は天心に懸つてゐた。

『イツボリタよ。イツボリタ。』悶々の情に堪へられず、彼の全心は戀しい女の方へと飛んで救ひを求めた。

その途端、向ふの窓から沈黙を破つて女の泣聲が聞えた。續いて多くの人々の泣く聲も聞えた。その後は一しきりすゝりなきが、高く低く傳はつて來た。臨終なのである。此の透み渡つた夜の中へ、靈魂が一つ溶け込んで行つたのであつた。

二

母はかう言つた。

『是非お前に助けて貰はなければならぬんだよ。よくお父さんに分る様に、お前からきつて話してみておくれな。何といつたつて總領なのだからね。ねえジョルジオ、さうだらう。』

父はもと家で召使つてゐたふしだらな、然し金に目のない下婢を妾にして圍つて置いた。父は此の女とその私生兒の爲に、外の者の事は何にもかまはず、財産をすつかり失つて了つた。時は夫の不行跡から、家の人々が喰ふにすら困る事があつた。一番末の妹が、約婚してから久しくなるのに、持參金を出す事も嫌がつた。

『お前は遠くに居たんだから、私達がどんなに苦勞したか分るまいが、兎に角總領の事だし、お前でなければ話して貰ふ人がないんだよ。ねえジョルジオ。頼むからね。』

ジョルジオは下を向いて黙つてゐた。そして、こんな野卑な物言ひをするこれが自分の母の口だらうか、悲しみと怒りがかうも彼女を變らせたのかと思つた。昔、母は優しい女だつた。彼が子供の頃は、スピナ家出の此のシルヴェリア夫人は、背のすらりとした、華奢な體附きの、青白いデリケートな顔貌をしてゐて、すべてが由緒ある家柄を思はせた。それに此の變化とは如何した事だらう。ごつごつしたふるまひ、刺々しい言葉、怨めしさうな凄い顔、それらはどれも彼の心を苦しめた。

「分つたかいジョルジオ。お前餘程しつかりやつてくれなくては困るよ。何時話してくれるつもりなの。はつきりしておくれ。」

彼は、外の事ならどんな無理でも聞くけれども、これだけは許してくれない、此の話をきめるに要ると同じ勇氣の要る自分の事件をさへ、片附けかねてゐるのだからと思つたが、沈んだ聲でかう答へた。

『承知致しました。お父様に話してみませう。いゝ折がありませうから。』

然し『いゝ折なんて有らう筈はない』と心の中で思つたので、さうした嘘を詫びる様に、母の腕をとつて頬に接吻をした。

『あれ、ドン・デフェンデンテ・シオリの死骸を擔ぎ出すらしい。』母はさういつて窓の扉を開けた。二人は寄り添つて露臺に寄り掛つた。

グアルヂアグレエレの石造の市街は、静かな五月の太陽に照らされて、きらきらと輝いた。すがすがしい微風は、樋嘴の草をさわさわさせた。サンタ・マリア・マツジオオレの古めかしい大寺は、大理石と花とに包まれて、紺青の空に聳え立つてゐた。

ジョルジオは物思ひに耽つた。『イツボリタにはもう遇へないだらう。何だか色々な暗い前兆がある様な気がする。五六日する中には、二人の隠れ家を探しに行く筈なのだが、何もかも駄目にな

りさうだ。イツボリタからは便りもない。こつちへ来てから、バルランツアとベルラジオとから僅か二通簡単な電報を受け取つたきりだ。大方今頃は外の男が、彼女の機嫌を取つて居るのだらう。戀は女の胸から、皆一ぺん消え失せるものだらうか。さうでないともいへまい。俺はかなり買ひかぶつてゐるから。然しあの受難日エネルチサントの夕方、羅馬の停車場で彼女をのせた馬車が霧の中へ消えて行つた時に、これがもう永久の別れだといふ氣がしたし、何事も最後だと、深い覺悟もしたんぢやないか。けれども、けれども、彼女が無ければ俺は如何して生きて行けよう。』

此の間に母は會堂の女關の方を眺めてゐた。『行列がお寺から出てくるよ。』

頭巾を被つた四人の男が棺桶を擔いで歩いて行つた。同じ頭巾の男の列が二列になつて、火を點けた蠟燭をさけて後から隨いて行つた。頭巾の男の側には一人づつ跣足の子供がついて、両手の窪の中へ熔けた蠟を拾つて入れた。葬式の行列がすつかり街に廣がつた時、紅い衣に白い面覆を着けた樂人達は、一齊に送葬曲を吹奏し出した。

『氣の毒な事だ。たとへ死者の光榮の爲とは言ひながら滑稽なわけさ。』さう彼は思つた。

『まあ、ドン・デフェンデンテもお氣の毒に……。』

葬列が遠くの方に見えなくなる迄見送つて、母はかういつた。

『何が氣の毒なのですか。あの男はあれで満足な體ですが、私達こそ哀れなものですよ。』

ジョルジオは母を見た。二人の眼が出會つたが、彼女は一寸淋しい微笑を見せただけであつた。それは單に笑ひの心持を見せたばかりで、悲哀に満ち満ちた顔の筋肉を、一筋でも動かしたのではなかつた。かうして微笑は、却て母の顔に、癒し得ぬ大きな苦惱の痕跡を際立たせたに過ぎなかつた。是迄幾度となく、並ならぬ慈愛を以て、彼を慰めようと摺り寄せて來た此の顔は、最早これだけにしか笑ふ事が出来なくなつたのか。有りの儘で現れた母の悲哀を見せつけられて、彼の利己心は消え去つて、だらけた神経はショックを受けた。

『あゝお母さん。』彼は涙にむせんで、吃りながらいつた。そして母の手を取つて、室へ引張り込んだ。

『如何したのかい、ジョルジオ。えゝ。如何したのだえ。』母は驚いて、涙のあふれた息子の顔を眺めた。『如何したのさ。譯が分らないぢやないかね。』

思ひ掛けなく今や彼は再びあの懐かしい聲を聞く事が出來た。

『あゝ、お母さん、お母さん。』

彼は兩腕で母を抱きしめ、啜り泣きながら、發狂した様に、頬であらうが、眼であらうが、額であらうが所かまはず接吻した。

『あゝ可哀さうなお母さん。』

母は口を挫<sup>ひきつ</sup>らせて、無理に涙をこらへて喉をつまらせながら、

『妾が餘り心配させたものだからね。』といひながら息子の涙を拭いてやり、頭髮を撫でてやつた。

『そんな筈ぢやなかつたんだよ、ジョルジオ。お前に心配を掛ける積りぢやなかつたんだよ。一生の間お前には、一寸も心配させまいと思つてゐたのにね、如何して今度ばかりは辛抱出來なかつたんだらう。お前の耳に入る筈ぢやなかつたのだ。堪忍しておくれ、ジョルジオや。そしてもう泣かないでね、後生だから、お前に泣かれると妾はたまらない。』

『えゝ。もう泣いちやゝりません。』とジョルジオは母の膝に頭をもたせながらいつた。激情の後の彼の心は言ひ知れぬ動搖を來してゐた。けれど、イッポリタの面影がふと眼に浮んで來ると尋常ならぬ胸騒ぎがして思はず溜息を吐いた。

母は彼の顔を覗き込んで、

『まあ、何といふ溜息だえ。』と呟いた。

眼<sup>まぶた</sup>もあけずに、につこり彼は笑つたが、けだるい様な疲勞が全身を襲つて、今の先の感情はもう何も残つてゐなかつた。そして母は又も自分には他人だと思はれて來た。『母の爲にといつて何が出來よう。禍は禍だ。それに母子の思想も、生活も餘りに違ひ過ぎてゐる。自分を理解したり、慰めたり、正したりする事は、とても彼女には出來まい。彼女に出來る事は、唯自分の苦し



む様子を子供に見せるだけだ。』

やがて立ち上つて、母を抱いて、それから自分の室へ登つて行つた。露臺に寄り掛つてゐたが五月蠅い程燕が鳴くので、寢臺の處へ行つてごろりとなつた。そして仰向けに寢轉んだ儘、色々な事を考へた。『まあ、斯うして生きては居る、が、此のライフの核心には何がある。己は己だが己のものではない。俺は永久に悶えてゐる。恰度遊動板の上に眞直立つてゐる人の様に、何者かに追掛けられる逃亡者の悲哀のやうだし、又何時迄も追附く事の出来ない追跡者の悲哀のやうだ。一體、何が俺に物足りないのだらう。俺には、眞に生きたいといふ非常に強い欲情がある。けれども事實はその反対で、日に日に己自身を破壊して行く許りだ。遂にはライフが破滅して了ふだらう。俺の物足りないと思ふのは何だらう。俺の身體には意識出来ない部分がある。』

かうした生命の一部分は恐らくもう死んでしまつてるのかも知れない。そんなら此の部分を復さすには死ぬより外に方便がないではないか。確かにさうだ。兎にも角にも死は俺を誘惑してゐる。』

サンタ・マリア・マツジョレの鐘は夕の祈りを知らせた。彼はもう一度葬式の行列を思ひ浮べた。棺桶や、頭巾の男や、襤褸を着た子供達。あの子供達は深い印象を彼に與へた。後になつて戀人に出した彼の手紙の中にこんな事が書いてあつた。

# 欠

# 欠

す、らりとした、褐色の頭髮を持った美しい娘であつた。胸に二輪の薔薇を挿してゐた。  
『やつぱり彼女も姿貌すがたかたちの外に、俺に似た所があるのだらう。彼女の胸もきつとそれ相應な煩悶と憂鬱とで満ちてゐる。』

その途端に母が立ち上つたので、皆それについて立つて行つた。後には父とドン・ボルトロメオ・チェライアが残つて、話し續けた。シオルジオは兩腕を、母と姉の腰にかけて、一緒に次の室へと入つて行つた。カミルラの弾き始めた小夜樂が二三小節ばかり行つた頃、彼はクリスチーナにいつた。

『姉さん庭へ出て見ない。』

母は許嫁の夫婦の傍に残つた。クリスチーナとシオルジオは暫らく黙つて寄添つて、歩いた。何時もイツボリタにする様に、シオルジオは姉の腕を取つた。

『何てひどい庭になつたのだらう。子供の時分に一緒に遊んだこと覚えてゝ。』彼女は立止つていつた。それから自分の子供のルカの方を見た。

『ルカ。ちつと競走かけっこでもして遊ばないの。』

けれども子供は母の傍を離れようとしないので、彼の女は溜息をついた。

『何時だつてかうなの。ちつとも遊ばないで妾めかけに付きつきりよ。』

戀人の事を考へてゐたジオルジオは姉の言つた事を聞いてゐなかつた。やがて庭の中央にある、どす黒い水の溜つた圓池へ出た。

『ねえ覚えてるだらう。』とクリスチイナがいつた。『お前が此の池へ落つこちて、デメトリオの叔父さんに曳上げて貰つた時の事を。あの時皆どんなにびつくりしたでせう。』

デメトリオの名前を聞いて、ジオルジオははつとした。それは懐かしい、名前であつた。彼にとつては唯一人の掛替のない親の様であつた。そして柔しくて思慮深い、男性的な憂鬱を顔に現した叔父の面影を思ひ出した。

『こんな事もあつたわね。』とクリスチイナは又いつた。『或る晩、お前が何處かへ匿れちやつて、朝迄姿を見せなかつた事があつたでせう。あの時だつて私達がどんなに驚いたと思つて。それや捜したわ。そしてどんなに泣いたでせう。』

ジオルジオは淋しく笑つた。思ひ出せば、あゝして身を匿したのは酔興とはいへ、實は一種の残酷な好奇心から來た事であつた。がやがやと家の方から聞えてくる物音を、一つ一つ聞き洩さぬ様に、彼は耳を側立ててゐたのだつた。匿れてゐる場所の近くを捜して廻る人達の姿を、欲喜と恐怖に氣息を殺しながら窺つてゐた。到頭頑固を押し通したが、朝になつてみると悔恨の情に責められた。

『あの匂何だか分つて。』とクリスチイナがいつた。『花束でも拵へませうね。』

空氣は暖かくじんめりとして、その中を色々な草花の香氣が互に糾れあつて流れてゐた。

『何故そんなに沈み込んでゐるの。』とだしぬけに、クリスチイナが尋ねた。それから微笑を洩らして躊躇ひながら、附加へた。

『思つてるのね、あの女のこと……。』

『えゝ。さういはれゝばまあさうです。』姉のゆつたりした視線に會つて、彼は颯と顔を赧らめてさういつた。それは去年の秋の九月、海岸のトルレット・ヂ・サルサの姉の家に滞在してゐた時、クリスチイナにイツボリタの事を話したことがあつたのである。クリスチイナはまだ微笑ながら躊躇ふ様に又かうきいた。

『あの……あれから今も變りはなくつて。』

『相變らず。』

その外の言葉もなく、二人はオレンジやレモンの樹のある方へと歩いて行つた。クリスチイナは足早に二三歩先へ行つたが、あちこちを見廻しながらいつた。

『まあ佳いこと。こんなに花が……。』

そして花を取らうと、手を舉げて小枝を折りかけた。頭髮の上、肩の上、胸の上へとらはらはら

花が散つた。見廻すと周囲は、落ちた花瓣で一面の雪の様であつた。卵なりの顔に、すつきりと白い頸筋をした此の時の彼女の姿ほど魅力に満ちたものはなかつた。力の入つた顔が美しく輝いた。と思ふと急に両腕がぶらりとなつて颯と青ざめた。そして眩暈を起してふらふらとなつた。ジオルジオはびつくりして助けに行つた。『如何したんです。姉さん、氣持が悪いんですか。』彼女は弟に助けられてよろめきながら二三歩歩いた。ルカはそれをおびえた様な眼附で見てるた。

『驚かないで下さいね、ジオルジオさん。何でもないのでよ。妊娠だもんだから……香氣が強すぎて氣が變に……もう快いの。もうすつかり快くなりました。』

『歸りますか。』

『いゝえ。此處にゐた方がいゝわ。まあ掛けませうよ。』

葡萄の下の古い石のベンチに腰を掛けた。

『ルカ。』ジオルジオは子供のほんやりした顔を見て、氣を引立たせる様に呼んでみたが、子供は重い頭を母の膝にもたせた。

クリスチイナは子供をあやしてゐるが、やがて彼女の頬を涙が流れた。

『あゝ。姉さん。』

弟のしみじみした調子に、又しても涙がほろほろと落ちた。

『ねえジオルジオさん。妾どんな物でも欲しいと思つた事なぞありはしない。何だつてはいはいと書いてるわ。始終どんな事でも諦めます。然うでせう、ジオルジオさん。でも此の子の事ばかりは……。まあ、ジオルジオさん、見て下さい。あんなですもの。物もいはず、笑ひも、遊びもしないんです。外の子供達のする様な事はちつともしない。一度だつて妾の傍を離れたことがないのよ。此のお腹の兒が生れれば、美しい兒に、とはいひません。唯丈夫でさへあれば……。』  
彼女は黙つて耳を澄ました。丁度腹の中に宿つた新しい生命の微動に、前兆を占ふやうに。  
ジオルジオはその手をそつと執つた。

#### 四

『あの皆が無理矢理に俺に押附けようとする事件は何時だらう。とても避けられさうもない。一度はあの野獸の様な人と面と向はなければならぬのだ。』とジオルジオは思つた。

『一日一日と日は経つて行く。母も妹も、その他の犠牲となつた人達も、すべて總領の俺の力で動きのとれる様に、談判なり保護なりをして貰はなければならぬと望んでゐる。實際何の爲に俺は呼ばれたのか。何をしに來たのか。かうなつてはもうするだけの事を片附けて了はなければ』

ば、發つて行く事も出来ないやうになつて居る。けれど一體自分の力で何が出来よう。自分が間へ入つたからといつてどれだけの災難が救はれるだらう。第一會つて話した處でどんな結果になるのかそれは分つてゐる。父の氣質や話の様子から考へても、結局暴れ出すか、煙に捲くかだ。悪行が人間の腸にしみついて了ふと、抜かうたつて抜けない。父はもうその抜けない齡になつてゐる。何年かといふものは、あの女やあの子供等と結び附いて來た。然うした係累をすべて切り離して了はなければならぬといふ事は、如何して出来よう。昨日俺は女を見た。父の死ぬ迄決して離れるやうな女でない事は、一目見ただけでも分る。おまけに子供が幾人もあり、子供等の権利がある。それに色々の事のあつた後で、もう一度父と母が和解するといふ事が望まれる事だらうか。如何して如何して、俺が幾ら骨を折つた處で、無駄な事だ。それから物質上の損害、財物の浪費といふ問題が残つてゐる。けれどこれはヂエゴオと二人で整理しよう、俺は遠く家を離れてゐるのだから不斷の監督が必要だ。中でも差當りの問題はカミルラの持參金の事だ、アルベルトオの野郎この事許り言つてやがる。』

彼は妹の爲に、持參金の事を骨折つてやらうと思つた。ジオルジオは叔父デメトリオの遺産そつくり相續したから、金は十分あつた。自分の金を犠牲にする積りならば、その外の義務も、どんな嫌な事件も、綺麗に片付けて了へると思つた。

母の部屋の方へ近寄つて行つた。父は今朝から別莊の方へ歸つて了つたさうであつた。

『おや、ジオルジオ。いゝ處へ來てくれた。』彼の姿を見て母は飛びつくやうに言つた。驚いて母を眺めると、その顔は怒りに燃えて別人の様であつた。ヂエゴオとカミルラが黙つて傍に立つてゐる。

『如何したんだ。』とジオルジオはかう吃りながらいつて、弟の顔を見つめた。今迄に見た事のない様な陰險な色が、ヂエゴオの顔に出て居るのが眼についた。

『銀器の入つた箱が、もとの處に見當らないんです。それを皆で僕が如何かしたんだと言ふんです。』

『さうだとも、お前ぢやないか。お父さんとしめし合はせて……お前はお父さんの手先だ。何といふ恥知らずだ。そして又こんな大それた……大それた事を。此の乳で育てゝやつた子供が母親に仇するなんて。だけでも、お父さんに似てゐる子供はお前だけだ。』

ジオルジオは身動きもせず立つてゐた。母は顎をびく／＼と慄はせながら彼の方を見た。

『毎日私達がどんな事をしてゐるのだから、是でお分りだらう。毎日此の情ない家から、何か持出さうとするので何時も喧嘩ばかりしてゐるんだよ。お前さんは是ですつかり分つてお呉れだらうね。お父さんは、全く私達を戶外へ投げ出したり、私達の口からパンを取上げる事なんか平氣な人な』

んだよ。』

彼女はさう言ひながらむせび泣いた。

彼女の夫にはもうわきまへもなく、恥もなかつた。金の爲には、物も人も眼中になかつた。不動産といふ不動産は、森林も家畜も賣飛ばして了つた。儲ては子供等の生家へ手を出して、アウリスバ家の重寶である銀器を、ヂエゴオとぐるになつて盗み出して了つたのである。

『お前は恥知らずだね。よく恥かしいとも思はず、お父さんと一緒になつて、妾を陥れる事が出来たものだ。妾がお前の事できてやらなかつた事があるのかい。何だつてお前のいふ通りしてやつたぢやないか、それはお前がしつてゐる筈だ。銀が何處へ如何したか皆知つてゐる癖にまあ、恥かしくないのだね。何もいはないのかい。返事もしないんだね。ほれ、兄さんが此處にゐるんだよ。さあ箱を如何したのだい、それが知れる迄はその儘で置かないからね。』

『ですから知らないといつてるぢやありませんか。箱は見やしません。見ないのである筈がないぢやありませんか。』ヂエゴオは堪へ切れなくなり、野獸の本性を見せて叫んだ。『お分りませうね。』

死人の様に青ざめた母はジョルジオの方を見た。

『ヂエゴオ。出ろ。』と兄は弟にいつた。

『出る時には何時でも出ませうよ。』かう憎々しげに答へて肩を揺つたが、さすがに兄の顔は見てゐなかつた。

ジョルジオは急にむつととして來た。そして挑戦的な氣持が動いた。ヂエゴオの外見、づんぐりした身體附、猪頸の上に載つかつた蒼色の頭、此の筋肉逞ましい男の明かな體力の優越、長上たる兄の權威に對する侮辱、——皆ジョルジオをそよのかさないものはなかつた。

『出ろ。出ないか直ぐ。』と彼は聲高に嚇す様にいつた。『出たくなければ此處でお母さんに詫びをいへ。』

彼はつつとヂエゴオの方へ歩みよつた。腕を取らうとして手を擴げた。

『僕は誰からも命令を受ける譯はありません。』とヂエゴオはどなつた。此の時は面と向つて兄の顔を見てゐた。

『氣をつけろ、ヂエゴオ。』

『恐しかありませんよ。』

『何だと、こら。』

『おきよします貴兄は何です。貴兄は何をしに此處へ來たんです。貴兄は他人ぢやありませんか。貴兄は今迄に一體どんな役目をして呉れたんです。他人の爲に何一つした事もないぢやあり

ませんか。何時も自分だけの都合ばかり考へてゐる。女にうつゝを抜かすか、好き嫌ひをいふか惚れ込むか、それだけが貴兄の仕事だ。今になつて何を如何しようつていふんです、さつさと羅馬へ歸つて、叔父譲りの身代を、好きな様にお撒きなさい。關係もない事に口を入れない様にしてください。』かういつて彼は兄へ日頃の憤と、嫉妬と、羨望とを漏らした。

『黙まらないか。お黙り。』

かういつて我を忘れた母が、兄弟の間へ割り入つて、ヂエゴオの顔をぴちやんと打つた。

『出てお行き。何も言はずに、出てお行き。お父さんの處へ行くがよい。もう何も聞きたくない。二度とお前に會ひたくもない。』

ヂエゴオは躊躇した。そして今にも兄が自分に飛びかゝるかと、そればかりかを待受けてゐた。『出て行き。』かう繰返した母の聲には、最後の力が籠つた。母はその儘氣が遠くなつて、倒れかかつた。カミルラは両手で以て、母を抱きとめた。

その時ヂエゴオは鉛色の激した顔附をして、出て行つた。

## 五

しとしとと雨の降る晩であつた。寢臺に踏反り返つたジオルジオは、身も心も滅茶々に引裂

かれた様な、悲しさとやるせなさに、何思ふ事なく横はつてゐた。これといふ確かな原因もないのだが、苦悶が一時に込み上げて来て、丁度悪夢に襲はれた様であつた。『俺に残された物はもう死の外に何もないのかしら。』と彼は孤獨の中に思つた。やがて寢臺から跳降りて、室の中をあちこちと歩いてみたが、苦悶を抑へる事は出来なかつた。歩く聲音が頭腦に響いた。『誰だ其處にゐるのは。誰だか俺を呼んでるやうだ。』耳をちつと澄ましたが、何も聞えなかつた。扉を開けて廊下に出たが、しんとしてゐる。唯伯母の室の扉が開いて灯影が見える。ひよつとすると伯母は死んでゐるんぢやないか。彼は突立つたきり身動きもしなかつた。その時彼の頭には鐵の鉢巻でも締めてる様な氣がした。それは或る冷い、彈力のある物質で、動脈の搏動につれて弛んだり緊つたりした。突然老女が咳をしたので、彼は思はずぎよつとし、それからそつと爪尖で靜かに引返した。『如何したといふんだらう。今夜は、逆もかうして一人ではゐられない。降りて見よう……それともいつそ外へ出て行つて、姉さんの處へ行つて見よう。』と彼は思つた。

雨のしとしとと降る晩、街中はもう大方靜まつて、所々の瓦斯燈が鈍い光を放つてゐた。ぢき近くの麵麩焼場から職人の聲と共に麵麩の匂がして來た。一軒の小料理屋からは、ギターの響と流行唄が聞えてゐた。街路の向う側の蔭を通つて行く者がある。それはヂエゴオの様な氣がした彼はふと弟の言葉を思ひ出した。『誰が聞いたつて、彼奴の言つた事が本當ではあるまいか。他人

の爲に何一つした事のない俺だ。俺は何時も自分一人の爲めにのみ生きた。此處へ來ても、俺は全く他人だ。お母さんもかういつた。——『毎日私達がどんな事をしてゐるのだから、是でお分りだらう。如何だえ。お分りだらうね。』つて。お母さんの涙の盡きるのを見てゐても、やつぱり救つて上げる力は、俺にない様だ。』

彼はチエライア家の門迄來た。ずつと入つて立關を抜け、中庭を通つて行つた。廊下の處に、開放した扉があつたが、室内には誰もなかつた。彼は梯子段を登つて行つた。と、突然騒ぎが聞えて來た。一匹の瘦せこけた穢らしい雜種の犬が、階上から駆け降りて來て、ジョルジオの身體をかすつて逃げて行つた。その後から一人の召使がけたまはしく追掛けて來て舞踏場へ現れた。

『如何したんだ。』ジョルジオは驚いてきいた。

『おや、若旦那ですか。いゝえ大した事ぢやないんですが。犬をね、いやに穢い奴です。毎晩の様に何處から來やがるんだか。幽霊みたいな奴で。』

『ルカは無事かね。』

『有難う御座います。お蔭さまで。』

『寢たかい。』

『いゝえ。まだお寢みにはなりません。』

召使に案内されて幾つか広い部屋を通つた。大抵はがらんとして、古い意匠の道具などがきちんと並んでゐた。ジョルジオが思ひ掛けなく訪ねて來た事に姉は嬉しがつた。彼女は一人で子供を寢かさうとしてゐた。

『まあ。よく來てくれたのね。』と心から嬉しさうにいつて、兩腕で彼を抱き、頬に接吻した。『ほら、ルカ、ほら、ジョルジオの叔父ちゃんですよ。何とかお言ひなさいな。さあ、叔父ちゃんに接吻なさい。』

弱々しい微笑が、子供の青ざめた口元に浮んだ。ジョルジオは兩手で子を抱いた。

『鳥の羽の様に軽いんだね。』と彼は言つた。そして腰を下して子供を膝に乗せ、頭をさすつてかうきいてみた。

『ルカちゃん、叔父ちゃんが好きかい。』

彼の胸は常になく優しさに満ちてゐた。ふと見ると一本の指に繻帶がしてあつた。

『是は如何したの。』

『此間怪我しましてね。擦り傷なんだけど、それが中々癒らないの。』

『どれお見せ、ルカちゃん。』と笑ひを見せて、

『叔父ちゃんが息を吹つかけて癒してあげよう。』といつた。子供はおぢけた様な顔をして、黙つ



て繃帯をとらせた。繃帯の端が疵にくつついてゐた。彼はそれ迄引き放す氣にはなれなかつた。その端に乳の様な、白い汁がついてゐた。

『何もないぢやないか。』

彼は強ひて笑顔を作つて、疵口へ息を吹掛けて、おまじなひをしてやつた。そして注意して指を捲いてやつた。それから又色々な事を考へ込んだ。それが如何にも放心の體なので、クリスチイナがきいた。

『何考へてるの。』

『別に何も。』それから何氣なくいつた。『あのね、今梯子段の處で犬にぶつかつたらね……。』すると子供はぱつちりと眼を見開いた。

『毎晩來る犬だとさ……。』

『さうよ。ジオヴンニがさういつでたわ。』とクリスチイナが答へた。けれど、子供がおびえた様に眼を見張つて、今にもわつと泣きさうなので言葉を切つた。

『もういゝの、もういゝのよ、ルカちゃん。もういゝ、もういゝ、今のお話は本當ぢやありません。』さういひながらジオルジオの膝から子供を抱上げて、自分の胸へぴたりと押つけた。

『さうぢやないの。嘘ですよ。あれは叔父ちゃんの冗談なのよ。』

『嘘だ。嘘だ。』とジオルジオも繰返していつた。此の兒は外の子供の泣き方とは違つて、引搔かれでもする様に泣いた。

『いらつちやい、いらつちやい。ルカちゃんはもう寝んねをするんでせう。ね。』と泣く子をあやしながら次の間へ入つて行つた。

『ジオルジオさん、いらして頂戴。』

子供に着替へをしてやる間、ジオルジオは姉を見まもつてゐた。そつといたはるやうに着せ替へてゐる處は、壊れ物でも扱つてゐる様であつた。此のか弱い生命が、次第に疲れ果て、死の中へと消えて行くのを、如何する事も出来ないと思はれる程、瘦せ細つてゐた。

『接吻してやつてよ。』姉はジオルジオにいつた。そして子供を弟に差し出した。それから夜着の中へそつと入れた。その後で子供の兩手を執つて、繃帯した指のある方の手を、顔から胸へ持つて行き、その次に左の肩から右の肩へ持つて行つて、それで十字架のしるしを書いた。そしておしまひに二つ一緒に組合せて「亞孟」といつた。

『もうねんねませう。さあねんねおし。お母ちゃんも叔父ちゃんも此處について居ますからね。』

弟と姉は、此處でも同じ悲しみに結ばれて、寢臺の兩側に一人づつ腰掛けた。寢臺の傍のテイ

ブルに積み上げた薬の香が室中に匂つてゐた。

『よく寝るやうだ。』とジョルジオは低く言つた。

それからどの位時間が過ぎたか分らないが、だしぬげに子供は恐い聲で叫んだ。ばつちりと眼を見はつて、枕の上へ起きなほつた。何か恐い幻にでも脅かされた様子らしかつた。

『母ちゃん。母ちゃん。』

『如何したの。如何したの。ルカちゃんや。』

『母ちゃん。』

『如何したの。ルカちゃん。母ちゃんは此處にゐますよ。』

『追つ拂つてよ。追拂つてよ。』

## 六

『晚餐の席でカミルラは、「眼のあたり見なければ心から苦にはならない。」といつたが、これは體よく自分にあてこすつたのではなかつたか。それに母迄が不平らしい事を幾度かいつたではないか。』と思つてジョルジオは苦々しい氣になつた。『此處の人達は誰でも皆俺をさう見てゐるんだらう。つまり誰の目にも、長男の權利をわざと棄てた事と、叔父のデメトリオの遺産を相續した事

# 欠

# 欠

に遠い幼年時代の思ひ出が、今更の様に浮んで来た。その王等の土で出来た胸には草木が根を差込んで生えてゐた。その中で彼が一番好きだと思つてゐた一つの女王の像は、ふさふさとした長い頭髮がすつかり茂り易い蔓草で出来上つてゐて、春が来る度毎に數知れぬ可愛い黄金の花を開いた。彼はその女王を物珍しさうに眺め入た。すると昔幼な心にほんやりと描いてみた、情熱に燃ゆる女王の一代記が、それからそれへと思ひ出された。暫らく彼の全心は、返らぬ過去の思ひ出に渡打つてゐた。それには甘い情も伴はない事はなかつた。けれどもふと、欄干の方で人聲がしたので、彼は我に歸つた。一つの窓が開いてゐて、カナリアの籠が白いカーテンの間から見えた。

彼は思はずも、又心の動搖を感じた。『突然に來たけれど、あの女が一緒にゐるのだらうか。』と彼は思つた。子供等が欄干の傍の砂の上で遊んでゐた。これは妾の腹から出た私生の兄弟だなど彼は思つた。寄つてゆくと、二人の男の兒はびつくりした様に、きよろきよろ眺めた。丈夫に肥つて、元氣で、赤い頬をしてゐる様子は、確かに出が違ふ證據であつた。

『おや、若旦那ですか。』

迎ひに出て來た召使がかう呼び掛けると、直ぐに父が窓から大きな聲を出した。

『ジョルジオか。珍らしいぢやないか。』

彼は出来るだけの勇氣を出して、無理に笑顔を作つた。そしてひとへに平氣な風をした。

「入つて来ないか。」

父はなほ窓からいつた。

「ええ。参ります。」

表から階段を上つて廣い臺地の方へ廻つて行かうとすると、父が迎ひに出て来た。父子は抱き合つた。けれどもすべての動作には、わざと愛情を装ふといふ風が見えた。

「やつと出て来たのだね。」

「散歩する積りで家を出たんですが、到頭此處迄来ちまひました。此處へは随分久しぶりです。やはりちつとも變りませんね。」それから續く苦しい沈黙を避け様として、「お父さんは大抵何時でもこちらにおいでなのですね。」といつた

「然うだ。此頃は始終こつちへ来てゐる。」さう答へた父の聲には、何處か悲しさうな所があつた。

「空氣がいゝのでね……如何も心臟が不快なんだよ。」

「心臟が不快なんですか。と初めて意外な話を聞いた彼は氣の毒さうにいつた。「如何したのです。何時からなんです。ちつともそれは知りませんでしたよ。誰も私にいつてくれないものですから……。」それからちつと父の顔を眺めた。

「何時からなんです。」と心配を露はに見せて又繰返した。

「何時からなんて誰が知つてるものか。」と父が答へた。それには何か魂膽がある様であつた。

「病氣が何時から起つたなんていふ者はないさ。こんな病氣は長い間潜伏してゐて、急に悪くなるんだから皆狼狽するんだよ。その時はもう手遅れで、唯身を投出して刻一刻と死を待つばかりの話さ……。」

こんな調子で聲迄變へて話し出した。何となく本來の頑固な處や、残忍な様子がなくなつて、幾層倍も齡を取つて衰弱が目に見える様に思はれたが、何處かつくり事の様な、仰山に芝居を打つといつた様子のある事は明かであつた。

確かに父は、彼の時ならぬ訪れの動機を見抜いてゐた。そしてうまく話をつける爲に、連りに病氣の事を話した。そればかりではなく或る目的を達してやらうと考へてゐるらしい。

「お入りよ。」と父が勧めた。

「邪魔ではありませんか。」

「邪魔どころか。まあお入り。是非ともお前に見て貰ひたい書類があるのだ。」

父は先に立つて室の方へ歩いて行つた。よく見ると父は歩き振りまで變へて疲れてゐる様に見せた。「見て貰ひたい書類といふのは何だらう。何を俺から求めようとするのだらう。金にきまつてゐる。此の機會を利用して……。」そして母から口汚い言葉で教へられた、嘘の様な細かい話ま

で思ひ出された。

籠の中のカナリアが色々調子をかへて、透き通る様な力のある聲で唄つた。白いカーテンが二枚の帆の様に膨らむと、その隙間から遠くの青空が見渡された。微風が吹いてテーブルに投げ出してある書類を吹散らした。そして文鎮の代りに乗せてあつた硝子盆の淫猥な繪が、ジョルジオの眼にうつつた。

『何て今日はいやな日だらうな。』と父が呟いた。心臓が苦しいといふ恰好をして、椅へどつかりと倒れ込んで、半ば眼瞼を閉ぢながら、ごほんごほん咳きをした。

『苦しいんですか。』

『苦しい……、だが直ぐ癒るよ。少し心配すると、これだからね。そつと休んでりやいゝんだけれどな。ところが……。』

かうした訴へる様な調子は、ジョコンダが菓子をねだつた時の調子に何處か似てゐた。すべてが虚偽だといふ事は分りきつてゐる。唯彼はさうした男の身を可哀さうに思つた。

『ところが……。』とジョルジオは鸚鵡返しに話を急ぎ立てた。

『ところがだ、先だつてから萬事が悪い方へ悪い方へと向いて、續けさまに失敗をやつてな、ひどい損をした。まづ此の三年間といふものは、葡萄も駄目、家畜も駄目で、おまけに地代が半減

といふ上に、税金は後から後からと溜つて了つて、……まあ御覽。是だ、是非ともこの書類をお前に見て貰はなければね……。』

といひながらテーブルから束にした書附を取つて、息子の前に展げてみせた。それから幾月分も嵩んだ地租についてのいりくんだ理由をぐどぐどと説明した。何れにしても早速きまりを附けなければ、思はぬ損害が掛つて来る所であつた。動産は既に差押へられて、近い中に公賣廣告が出るやうな事になるであらう。金額は少しではないといふのである。

ジョルジオは黙つてゐた。そして、父が手にした書附をぢつと見詰めた。父は怪物の様なふくれ上つた手でそれをひろけた。時々言葉の響が聞えなくなつた。けれど耳にはやはりその單調な聲が、カナリアの鋭い囀りと、時折聞えてくる表の物音と一緒に響いてゐた。彼は痲痺したやうになつて、市長からの令狀を眺めてゐた。

『お前よく聞いてくれて居るのか。』と息子の様子をみて父はいつた。

『えゝ。聞いてますとも。』

『ボルトロメオが金を出してくれゝば、それでも俺は助かるが……。』

とおづく／＼いつた顔の上には、いふにいはれぬ表情が出てゐた。

『あの男に此の手形の金は何とかして貰へるとしても……お前に記名してくれといふに違ひない。』

遂に保跡が投げられた。

「へえ。私の名前をですか……。』ジョルジオは困り切つてどもつた。さうした依頼のためではなく、此の嫌な姉婚の名を聞いたからであつた。父は断られはしまいかと、泣附く様になつて来た。もし強制執行を逃がれる事が出来なければ、債権者達は皆飛び掛つて来るに相違ない。子として父の破産を見殺しにするつもりか。又今此の事件に關係すれば、即彼自身の利益となるばかりでなく、聽ては彼自身や弟のものとなる遺産を保護するといふ事になる。何しろ危急の折だ。ぐづぐづしては居られない。などと色々な事をいつた。かうした嫌な光景に疲れ切つたジョルジオが、なほ我慢しなければならなかつたのは、彼を此の家迄押しつけて、歸つて行けば詰めかけて返事を聴かうとしてゐる人々が、彼の背後に控へてゐることである。ジョルジオはどもりながらいつた。『然し今おつしやる様な事に金を使ふつて、それは全くですか。』

「そんな事を。お前迄がやつぱりそんな事をいふ。』と父が叫んだ。『其處いらで喋つて居る陰口をお前も聞いたのだね。俺が鬼だとか、悪事といふ悪事をし盡したとか、どんな醜態でも平氣でやる奴だとか、それをお前が又本當にしてゐる。何故だ、何故あそこの者等はそんなに俺が憎いだ。如何して俺を死ねがしにするのだ。逆もお前にや分らない。お母さんがどんなに俺を憎んで居ると思ふかね。今家へ歸つて行つて、俺が危篤だとても話して見ろ。お母さんはお前にかぢり

附いて、きつと「天主を讚美せんことを」なんて喜ぶに極つてゐる。逆もお前にや分らないよ……。』

その調子の毒々しさには、抑へても抑へ切れない此の男の本性を露出してゐた。で、ジョルジオは新たに心からの憎悪を本能的に感じた。

『然うですとも、何も分りません。さあ私は如何すればいゝんですか。何處へ名前を書くのですか。』

父は苛々して頻りに抽斗の中を搔廻してゐたが、やがてテーブルの上へ、まだ記入のしてない一枚の約束手形を出した。

『これだ。名前を此處へ書いてくれ。それだけでいゝから……。』

ジョルジオは腰も掛けず、自分が何をしてゐるかも意識せず、ペンを取るなりさつさと書いて了つた。父は手形を取り上げて、署名を調べて、一摺みの砂を振りかけて字を乾かして、又もとの様に抽斗へしまつて錠を下ろした。その一つ一つの動作には、不正なたくらみを旨くやり遂げた人のさもしい喜びが、無理に押隠さうとする下から見え透いてゐた。彼はうまうまべてんに掛けられて了つたといふ感じがした。『いかにも本當だ。母の言つた事はすべて本當だつた。此の人間は恥といふものを知つてゐない。自尊心がまるでない。事と人とを問はず、金儲けの爲には人も

物も全く見界がないと見える。』と彼は思つた。そしてあの貪慾な、飽く事を知らない妾が、確かに隣の室あたりで立ち聞きしてゐるに相違ないと思つた。

『きつと此の金は……きつと此の金は外の事には……使はないんですね。』と彼は身顛ひを匿す事も出来ないで、いつた。

『何故さ。さうだとも、それに極つて居るぢやないか。』斯う答へた父はもうすつかり顔色を變へてゐた。

『覺えて下さい。私は分ります。』とジオルジオは憤慨を抑へかねて、色を青くしていつた。『覺えて下さい。私はお父さんとぐるになつて、お母さんを苦しめる事は出来ないんですから……』

父はかういふ疑に傷つけられたといふ風に、突然調子を上げて息子を嚇かさうとした。

『それは何の爲のあてこすりだ。あの蛇の様なお母が、何時になつたら毒氣を吐かなくなることだ。何時やめるのだ。二度と口を開かない様にしろといふんだな。よし。それぢや今に然うしてやる。ちえつ、あの阿魔め。十五年の間、俺に毒を注射しやがつた。微火で俺を焙り殺しにしが。俺が破滅すれば彼奴のお蔭だ。いゝか。彼奴のお蔭だぞ。』

『静かになさい。』ジオルジオは氣を取亂して死人の様に青さめ、がたがたと身體中を顛はせてい

つた。『静かになさい。お母さん、お母さんと言はないで下さい。貴下は母の足に接吻さへ出来ない、人間ぢやありません。私は母の話で來たんです。うまうま貴下の狂言に乗せられて了ひました。知つてゐながら係蹄に懸つて了ひました。御希望のものはあの阿婆摺への鼻樂でせう。へん、忌々しい、それでゐてあべこべに母に恥を搔かせるつもりなんだ。ぢや失禮しますよ。出て行きます、したい放題をなさるがいゝ。私はもう貴下の子ぢやありません。二度と會ひたくはありません。お母さんだけ何處か遠くへ連れて行きませう。是がお別れだ。』

ふらふらと彼は出て行つた。室から室を抜けて、臺地の方へ來ようとする、はたくとスカートの捌ける音がした。扉の音もした。その背後へ誰かと慌てゝ引込んだらしい。欄干を離れて戸外へ來ると、急に聲をあけて泣きたくなつた。日も黄昏れる頃で、物狂しさは一倍ひどかつた。『何處へ行かう。今夜あそこへ歸らうか如何しよう。』と思つた。けれども其の家ははても知れない遠くの方へ、轉がつて行つたかと思はれた。その長い長い道は逆も歩き盡せないやうに思はれた。

## 八

慌たどしい一夜を送つたその翌朝、眼を開いた時は、前日のすべての出來事が、一塊の混亂し

た記憶の様にしか思へなかつた。

先づ、あの静かな野の黄昏に、物悲しく鳴響いたアズ・マリアの鐘の音が思ひ出された。家裏近になればなる程、心の悩みはだんだん増して来た。母や妹が詰寄つて来た時に、彼は父との間の烈しい罵詈雑言と恐ろしい口争いを仰山に話したが、話してゐる彼自身は狂氣の様に興奮してゐた。それから俄かに鹽酸の嘔吐が出て、顛頭が痛み、嘔吐を催した。身を刺す様な悪寒は、寝てゐる彼を凍えさす様であつた。恐ろしい夢は、幾度か彼の衰へ切つた神経を襲つた。すべてかういつた記憶が、ごつちやになつて浮んで来た。いつその事、全く無感覺無神経な死體になりたかつた。死にたいといふ要求はやはり相變らず、彼の心を支配してゐた。併し愈々死を實行するといふ事は、考へてもたまらない事であつた。情性を裏切らなければならなかつたからである。暫らくは、自殺の場所や方法を考へてゐた。銃器、毒藥、麻酔劑などが思ひ出された。さては、彼が既に死んだと假定して、その後の事を想像してみた。悲歎に暮れる家族や友人の事、遙か遠くに離れて居て、今では他人の様になつたあのイツボリタの事迄も……。

『ジョルジオ。』母が扉を叩いた。

『お母さんですか。お入りなさい。』

彼女は入つて来ると、心配さうに寢臺の傍へ立寄り、彼の額に手をやつてみた。

『気分は如何だい。ちつとは快いかえ。』

『少しはよござんす。けれどやつぱり頭がふらふらしてゐて……口が苦く粘つていきけません。何か飲みたいんですが。』

『カミルラが今に牛乳を持って来るだらう。窓をもつと開けてあげようか。』

『どつちでもようござんす。』

彼はこんな事を思つた。『今窓を開けてゐる母が、もし自分の死んだ事を発見したら、どんなだらう。たとへば、母が一寸驚いて燈火の方を振り返る、尚ジョルジオの名を呼びながら寢臺の傍へ寄つてみる、顔へ手を當てよみる、搖ぶる、けれども息子は生氣を失つて、冷く硬くなつてゐる、彼の女は氣を失つて、彼の死體の上へ、ばつたりと倒れる。』そんな事を考へてゐる中に、彼の兩眼には自然と涙が光つた。

『如何したのだい。』と母が訊ねた。

『何でもありませんけど……何だか氣が立つて。』

『どうも快くないやうだね。』と頭を振つていつた。『何處が不快なの。』

『何處も何ともありません。少し氣が顛倒してゐるんでせう。』

けれども、その不自然な、痙攣する様な顔の工合は、母の眼を偽る事が出来なかつた。



『あんな家へやつて濟まなかつたねえ。本當に悪い事をしたね、あそこへやりさへしなければよかつたものを。』

『然うぢやないんですよ。お母さん。そんな事があるもんですか。一度は如何しても行かなければならなかつたんですもの。』

すると俄かに又、あの恐しい争ひが眼に浮んで来た。何となく、あゝいふ事をしたり、言つたりした自分が、他の人の様な氣がした。それでゐて、後悔の念が漫然と心の奥底に残つてゐた。何故もつと徹底的に、あの恥知らずを、憐れむ様な大きな心を持ってなかつたか。然し昨日の事は、さう何も後悔する程のものでもない。あゝはしまいと思つたつて如何とも仕様のない事だつたのだから、と彼は思つた。そして

『結局當然だつたんだ。』と今更の様に呟いた。

## 九

母と妹が、彼を後に残して出て行つてからも、何もしたくないので、尙暫くは寢床の上で獨りじつとしてゐた。その時に又も麻醉藥の事を思ひ出した。『眼をふさいで——眠りを待受ける。何と幸福な事だらう。』

處女の様な五月の朝の光、それが窓硝子に反射して映る碧瑠璃の色、床の上に流れ込む光線の波、街から聞えて来る物音、かうした生命ある物の證據は、露臺を越えて、彼の傍迄やつて来て彼を苦しめてゐるやうに思はれた。ふと先刻窓を開ける時の母の身振が眼の前に浮んで来た。ミルラも寢臺の側にゐるらしい。二人は誰か同じ男の事ばかり話しあつてゐる。母が何か苦い汁を口からだくだく滴らしながら、喚いてゐる。それと一緒に父の姿も幻になつて浮んで来た。その姿には不治の病の徴候が見える。すると母は、カミルラと彼の前で、我慢しきれないものやうにいふ。『もしそれが本當でさへあつたらね。あゝ本當であつてくれるといふ。』

彼は寢臺から飛び上つた。その時には、もう自殺を決心してゐた。『日が暮れない間にやつつけよう。さて場所は何處だ。デメトリオの室で。』と思つてみた。けれどまだ方法については、しつかりとは考へてゐなかつた。そして化粧を初めた。死刑囚や自殺者によくある最後のみえを張りたいといふ考へは彼も持つてゐた。けれども遺憾でならないのは、かうした荒れ果てた地方の一隅で、小さな、人も知らない町で、澤山の知人から離れて死んで行かなければならぬといふ事であつた。これが若し羅馬の都であつたら、人に知られた自分を、友達などがどんなに悼み悲しむ事だらう。きつと皆して、此の悲壯な祕密に、詩的な色彩を施すに違ひない。又しても彼は死後に起るべき光景を描いてみた。戀人の室の寢臺に横はつた自分の死顔。それを眺めてゐる青年達

や同胞達の眞心から涌き出る感慨無量の様子。通夜の灯影の下に交されるしめやかな物語。やがて花飾で蔽はれた棺。それを無言で見送る若人の群。すると詩人ステファノ・ゴンヂが、『彼が此の世を去つたのは、生と夢との合致を果せなかつたからであります。』と告別の辭を述べる。これに續いてイツボリタの悲哀、絶望、發狂……。

イツボリタよ。何處に彼女は居るか。何を考へ、何をして居るのだらう。『いけない。やつぱり俺の思つた通りだ。』かう思ふと又、あの最後の接吻の後で、黒いズエルを下した時の、戀人の素振が眼に見えて來た。そして心の中で、『最後』といふ言葉を繰返してみた。それでもまだ分らない事が一つあつた。それは此の間迄あれ程に夢に見たり、讚美してゐた女と離れてゐても、平氣になつて諦めて居たといふ事である。戀の初めに、あんなに物狂ほしく悶えたのが、その後、次第に希望を失ふ様になつたとは、如何した事だらう。イツボリタよ。彼女は何處に居るだらうか。何を思ひ、何をしてゐるのだらう。何か變つた事でもあるのかしら。二週間といふ間、これといふ取留のある消息を寄越さなかつた。寄越したのは、唯、そそつかしい電報が四五通きり。それも發信地がどれもこれも違つてゐた。

『もう大方、他の男の好きな様にさせる積りなんだな。よく、義兄が、義兄がと口癖の様に話してゐた男がゐるたづけが……。』

彼は今、深い神祕の淵に身を投じようとしてゐる。叔父のデメトリオが、晩年を送つた、物寂びた室を見る氣になつたのは、その爲であつた。遺産は残らず甥に、といふ遺言と共に叔父は此の室迄甥にやることを欲した。それで、ジョルジオは此の室を大事に閉切つて置いたのであつた。室は階上で、南向きに園を見下した。

鍵を持つて昇つて行くにも、蹙音に注意して、誰にも見られない様にと思つたが、廊下を通る時には、如何しても伯母のジョコンダの室の前を行かなければならなかつた。見附からなければいゝがと、拔足差足で息を殺して通つて行つた。ゴホンと老婆は咳をした。二足三足大股に急いだ。咳の音で、蹙音が聞えまいと思つてゐると、

『誰だい。』と中から嚙嗚聲が聞えた。

『私ですよ、伯母さん。』

『おゝ、お前かい。ジョルジオなのかい。さあお入りよ、お入りてばさ。』

老婆は扉口まで出て來た。まづ第一に甥の兩手を流し両に見て、それから初めて顔を見た。手の中に土産があるかないか、先づそれを見届けたのであつた。

『次の部屋へ行かうと思ひまして……。伯母さん失禮します。少し風を通しませんとね。』  
 彼が廊下へ出て、も一つの扉口で鍵を扭つてゐると、後の方から老婆が、ごつとんごつとん  
 やつて来た。ジオルジオはがっかりして了つた。迎も此の老女に邪魔されぬでは済むまい。彼  
 は黙つた儘、後も振返らずに、扉を開けてずつと入つて行つた。

最初の室は眞闇だつた。舊い圖書室特有の一種の臭氣が漂つて、息が空る様であつた。隙間洩  
 る微光で、やつと窓が分つた。ジオルジオは暗闇で、ごほんごほん咳き始めた。かけがねを外し  
 て、扉を押しやると、蝶番がぎいといつて開いた。日光の大波がどつと一度に流れ込んだ。彼は  
 尙、伯母に一言も聲を掛けず、次の室、それから第三の室迄行つて、窓を開けた。光線は隅々迄  
 擴がつて、色の褪めたカーテンがばたばたと揺れた。

けれども、もう其の先へは進まなかつた。次の鍵の手になつた室は寢室であつた。其處へ自分  
 だけで入らうと考へてゐると、後から老婆がごつとんごつとん來る音がしたので、椅子にもたれ  
 た儘、暫く黙つてた。老婆は、ジオルジオが黙つてゐるので、當惑した様であつたが、窓から流  
 れ込む涼しい風に、加答兒を刺戟されて、又ごほんごほん咳き始めた。聽て暫く咳込んだ後  
 で、かくしから汚ない紙袋を取り出して、香錠を一つ撮んで口に入れた。それをちゆうちゆう吸  
 つて、氣の抜けた様に、ジオルジオを眺めてゐた。その視線は、ジオルジオの顔から、四番目の

閉切つた室の方へと移つて行つた。そして十字を切つてそれから兩手を胸に當て、目を伏せて、  
 臨終の祈禱を口ずさんだ。

『弟の爲に、罪びとの靈の爲に祈禱を献けてゐるんだな。』とジオルジオは思つた。そして此の女  
 がデメトリオの實の姉に當るといふのが不思議でならなかつた。優れた知識の過勞に、多少腐れ  
 かけた脳髓を破つて迸り出たあの血と、此の氣むづかしい、忌むべき老女の血管をやつとで通つ  
 て居る血とが、同じ源から來たといふ事は、如何にも不思議でならなかつた。

忽ち又伯母は咳き込んだ。

『伯母さん、出た方がいゝでせう。此處にゐるとあなたにはよかありません、もう辛抱しきれな  
 くなつて、ジオルジオはさう勧めてみた。』此の空氣が咳きに悪いんです。出た方がいゝでせう。  
 送つてあげませう。』

伯母が行つて了ふのを見て、ジオルジオは扉を閉め切つて、鍵を廻した。かうして唯一人自由  
 になつて、目に見えぬ友と對坐した。暫らくの間磁石で牽き付けられでもした様に、身動きもし  
 ないでゐると、ふと又叔父の姿が現れて出た。

『俺から見れば、叔父は生きてゐるのだ。肉體の死んだその日から、どの瞬間にも彼と顔を合し  
 てゐるやうな氣がする。死んでから程、叔父と自分との血が同じだといふ事を感じた事はなかつ

た。死んでから程、叔父の生命の充實を感じた事はなかつた。彼の生活は實に他の人々のそれとは違ふ特殊なものであつた。叔父は俺一人の外は、誰の爲にも生きては居ない。彼は現に生きてゐるんだ。以前よりもより純粹に、より熱烈に生きてゐるのだ。』と彼は思つた。二三歩ゆつくり歩いてみた。重々しい沈黙が、殆ど聞えるか聞えない位の軽い神祕な物音に時々亂された。見る物毎に思ひ出が涌いて來た。種々の道具や微臭い書物からは、軽い呻く様な合唱が起つて彼を包んだ。四方から『過去』が涌き出して來たのだ。是等の物に授胎した一つの精靈が其處此處からある種の匂を放つのだといつても過言ではなかつた。嚴かで、質素な第三番の室に於ける追憶は、音樂に關した事である。長い紫檀のピアノが一臺、その上にはバイオリンが箱の中に入つて乗つてゐる。見臺の上の樂譜はメンデルスゾンの經文歌であつた。少し先のテーブルには、バイオリンとピアノの曲が澤山積み重ねてあつた。彼は箱を開けて檢べてみた。華奢な樂器は、オリーブ色の天鵝絨の上に眠つてゐて、四本の絃はいまだにそっくりしてあつた。ふと好奇心に驅られて、絃の眠りを醒さうとした。一の絃を弾いてみた。泣き悲しむ様な響が胴に傳はつた。アンドレアス・グアルホリウス作として、千六百八十年の銘が入つてゐた。

デメトリオが眼の前へ現れて來た。背のすらりと高い、少し前屈みな、長い白い頸をして、頭髮は後へ梳附けて、額の真中に白い捲毛を一條かゝらせて居る。バイオリンを手にした。何時も

の癖の様に片手でもつて耳と擦れ擦れに鬢の毛を一度さつと撫で上げた。絃の調子を合せて、弓に松脂をひいて、それからソナタを弾き出した。時とすると、しつかり顎でバイオリンを挟んで首を傾けて、眼を半分閉ぢて、内心の悅樂をしみじみと味つた。時には意氣軒昂といふ様子で、眼は眞正面に据わつて輝いた。思ひ出した様な微笑も洩れた。

ジョルジオは曾て彼と共に過した生活の斷片を思ひ出した。それはデメトリオと彼が二人きり、何の物音も訪れぬ、暖かな空の中で、自分達の好きな大作曲家の曲を演奏した時であつた。自分達の奏でる樂の音に引込まれて、眼前の生活を忘れ果て、午後の半日を俘虜となつて送つた事は、幾度であつたらう。あのメンデルスゾンの無言歌を復習した事も幾度であつたか。此の曲は彼等の胸の奥底に、癒し難い失望の氣分を默示するものであつた。ベエトオヴエンのソナタも同様であつた。二人の靈魂を掴み出し、目も眩む様な速さで、極みない大空を横に運び去つて、ひらひら深淵の上を飛び舞ふかの様に思はれた。ジョルジオは又彼が即興樂を弾き出さうとしてゐる所を思ひ出した。即興樂を演奏する時のデメトリオは、何時も詩から靈感を受けた。ある十月の日に彼がアルフレッド・テニソンの抒情詩『ザ・プリンセス』を作曲した妙なる即興樂を思ひ出した。ジョルジオは叔父に分るやうに、此の詩を翻譯して、それを題材にと叔父に薦めたのである。『あの紙は何處へ行つたかしら。』と思つた。そしてやつとそれを澤山の樂譜の中から捜し出し

た。一枚の紙へ藍色のインクで書いてあつた。文字は繕せて、黄ばんだ紙はしわくちゃになつて居た。それには永久に歸らない僕かしい人の手の、久しい前に残した悲しみの跡があつた。「これを書いたのは自分だ。自分の手に違ひない。」とジョルジオは、たどたどしいまるで女か學校生徒でも書いた様な文字を見て、獨り言をいつた。まだ日の浅い青年の若い心持が其處に見出された。「是を見ても随分變れば變るものだ。」と言ひながら、彼は譯詩を読み返してみた。

デメトリオが、ピアノの傍で即興的の演奏をする時は、初めは青ざめた顔をして、屈んでゐるが、靈感の起るに連れて、次第に身を反らして行く。そして眼はじつと窓の方に注がれてゐる。窓からは、額縁に嵌まつた様な、あかあかと霧に掩はれた秋の野の景色が見えた。空模様に移り行くに従つて、變り易い外光は、時折彼の身を漂はし、濡んだ眼を輝かし、透き通るやうな顔をびかびかと光らした。その時のバイオリンの歌は、「戀しきものみなを乗せて、地平線下に沈みゆく舟の、その真帆に赤き残照のごと寂しく、さばかり寂しく、あさやかに、今は見ぬいへしへ。」として尙嘖り泣き歌ふ。「あゝ、「生」の中の「死」か、今は見ぬいにしへ。」

やがてジョルジオは、デメトリオの聲が傳つて高い調子の歌を唄つたそのバイオリンを、又天鵞絨の箱に眠らせた。そして死骸を掩ふやうに蓋をした。周圍は物悲しげに沈黙してゐる。然し彼の胸の奥では、尙餘韻の盡きぬ覆唱の様に、「あゝ、「生」の中の「死」か、今は見ぬいにしへ。」

を繰返してゐた。

數分間ばかり彼は、次の悲劇を包む室の扉の前に立ち盡してゐたが、いきなりいら立たしく我を忘れて、把手を捻ると中へ入つて行つた。周圍を見廻しもせず、戸口から流れ込む光線を辿つて、一方の露臺の方へ真直に進んで行つた。二枚の扉を開けた。續いてもう一方の露臺も開けた。かうしたあわただしい動作には、何物かを恐れるある衝動があつた。

何よりも先に、彼の眼に入つたものは、前に横はる寢臺である。綠色の夜着がかけてあつた。暫らくは此の寢臺の外の何物も眼に入らなかつた。あの恐しかつた日に、闕を跨ぎかけた儘、身體を見てぎくりと立ちすくんだ時の有様が、丁度こんな風だつた。

沈黙は室に漲つてゐた。そして彼の心にも漲つた。唯、その中で、茶柱蟲のきちきちといふ音ばかりが、はつきりと聞えた。

あの恐しかつた日の顛末が、残らず彼の思ひ出に歸つて來た。急報がトルレット・ヂ・サルサへ着いたのは、その日の午後三時頃で、息を切らした飛脚が口をもごもごさせながら唯泣いてゐた。ジョルジオは土用の炎天の下を馬に打跨つて來たのであるが、焼けつく様な岡から岡を駈けて行く途中、氣が顛倒して、鞍の上から幾度か落ちさうになつた。歸つてみると、家中は嗚咽で満ちてゐる。強い風でそこら中の扉はばたんばたん鳴つてゐた。彼の血管もどきりどきりと音

を立てた。そして最後にいきなり此の室に入った。死體が横はつてゐた。カアテンはひゆうひゆういつて膨れてゐた。

其の事件の起つたのは五年前の八月四日の朝であつた。それには疑はしいやうな準備といふものは少しもなかつた。自殺者は一通の手紙を書き遺してゐなかつた。甥にすら遺さなかつた。彼が唯一人の遺産受取人として、遺言狀にジョルジオを指定したのは、すつと以前の事であつた。デメトリオが注意深く自殺の原因を隠さうとした事は明かである。様々な噂の種になりさうなものも、盡くなくして了つた。それにどの室もどの室も、きちんとして如何にも整頓し過ぎてゐる様であつた。紙一枚散らかつてゐなかつた。書棚の書物迄、一冊として足りないものはなかつた。寢臺の傍の小机に、ピストルの箱が開いた儘乗つてゐただけである。

『何故自殺をしたのだらう。人知れぬ深い祕密があつたのか。それとも靈智の鋭敏な餘り、此の人生が堪へられなくなつたのか。彼の運命は彼だけに握られてゐる。丁度自分と同じことだ。』とジョルジオは思つた。ふと見ると小さい銀の水盤が、昔の儘枕もとの壁からぶら下つてゐた。母が有難がつて大事にする宗教上の記念物である。グアルチアグレエレの町で、アンドレア・ガールツチといふ有名な鍛冶屋の老人が、手際を見せた見事な作で、それが一種の家寶になつてゐた。

『叔父さんの好きだつたのは、こんな宗教上の徽章や、聖樂や、香の匂や、十字架像や、羅馬教會

の讚美歌だ。彼は神祕家で隠者だつた。熱烈極まる内的生活の觀照家であつた。けれども神は信じてゐなかつた。』

彼はかうしてピストルの箱を眺めてゐたが、ふと頭腦の一番奥底に潛み隠れてゐた考へが、電光の様に閃いた。『俺も此の拳銃で、同じ寢臺の上で自殺しよう。』けれどもそれは、何となく前々からの計畫で、少しづらつて躊躇してゐたのが、愈々決心して最後の手段を取る時が来たともいつた様な、そんな感じがした。蓋を開けてピストルをあれこれと調べてみた。何れも上等な品であつた。決闘に使ふ旋條銃で、舊い英國製のものである。銃床はしつくりと手にはまる、皆萌黄色の天鵞絨の中に入つてゐる。縁のちつと破けた區切りの中には、装填に必要な物がすつかり入つてゐた。銃の口の直徑が大きいから従つて弾も大きい。非常な効力を持つてゐさうであつた。

ジョルジオはその一つを取つて、掌で重みを測つてみた。『五分經たない内に、俺は死ぬ。叔父さんは、俺の寝る處にと思つて、寢臺に凹みを残してくれたのだ。』と思つてゐる中に、ふと氣が遠くなつて、誰かゝ牀の上にふんぞりかへつてゐるなと思ふと、それは自分自身であつた。しつゝこい茶柱蟲の咬む音が、寢臺の處から聞えて來た。彼は臨終の間際に、身體の下で茶柱蟲の音を聽く人の悲哀を思ひやつた。銃の引金を引いたらどんなだらうと思つてみた時には、總身の

神経が痙攣するやうな苦しさを感じた。やがて遂に、何も今自分に自殺を迫つてゐるものはないんだと思つて、もう少し待たうといふことになつて見ると、此度は生命のどん底に痛切なる安樂を思ふ心持が、擴がつたやうな氣がした。幾つとも知れない、目に見えぬ係累が、やはり彼を生活の方へ結び附けてゐるのであつた。

「イツボリタよ。」

彼は露臺に出て、明るい方へ頓狂に進んで行つた。山の端に黄金色を流しながら、靜かに落ちて行く太陽は、男を持つ女の寢所へと向つて行くやうであつた。嚴<sup>いひ</sup>めしい、白色のマエルラ山は全身に此の黄金色の光を浴びて空高く雄々しい姿を見せてゐた。

## 隠れ家

五月十日附のイッポリタからの手紙には、斯う書いてあつた。  
 『やつと長い手紙を書く暇が出来るとなりましたわ。義兄は病苦の身體を引摺つて、ホテルからホテルへと湖水の周圍をもう十日も巡つて居りますの。私達二人はそのお伴で、もうがつかりしてしまひましたわ。逆も貴郎には此の巡禮のつらさが分りはしないでせうよ。早く此の人達と別れられるといふと、そればかり待ちかねて居りますの、もう隠れ家は見附かつて。』それから又かう書いてあつた。『どのお手紙を拜見しても、私の苦痛は増すばかりですわ。私貴郎の御病氣の事はよく存じて居ります。私自分の血を半分捨てても構ひません、是非貴郎に、私といふものが貴郎のもので、誰にも手出しをさせない、死ぬまで決して變らない女だといふ事を、しつかり分つて頂きたいと思ひますわ。私貴郎の事ばかり思つてゐますの。貴郎と離れてゐては、一寸の間も落着いて幸福だと思ふやうな事ありませんのよ。あゝ本當に何時になれば、貴郎と一緒になつて、貴郎の生活を分前出来るやうになれるのでせうね。見でゐて下さいな、私もう以前のやうな女ではありませんわ。私可愛い優しい温和おとやかしい女になつてよ。思つてゐる事は何もかも打明けでお話しますから、貴郎もお考へを包まず話して下さいな。もし貴郎が、いくら頼りになれ

る女だと思つて下されば、私だつて御相談のお相手位出来るやうにきつと勉強してみせますわ。一番私氣になる事は、如何したら貴郎を楽しくおさせ申す事が出来るだらうといふ事で、決して御危介になぞなるまいと思つてますの。私随分そゝつかしい女ですけどね、貴郎、どうか私を助けて適ちのないやうに導いて下さいな。そして私を完全な人間にして下さいな。さうすれば貴郎もお鼻が高く、みんなあれは俺の力で仕上げてあゝ成つたのだと、然うお思ひになるでせう。然うなれば否應なしに、私は貴郎のものといふ事になりはしますまいか。そしてもつと深く私を愛して下さいな事が出来ると思ひますわ。』そしてその後にはかう書いてあつた。『イソラ・マアドレ(ボルロメオ湖中の島)の遊園地で摘んで躑躅をお送りしますわ。昨日、御存じの鼠色の晴着の衣兜かぶとから、記念の爲にと貴郎にお願いしたアルバノの大旅館の書附けが出て参りました。四月九日の日附のです。薪の籠が幾つも附いてゐてよ。二人の戀が盛に燃え上つた事を貴郎覚えてらつしやるでせう。しつかりしてね、元氣を出して頂戴。幸福を新たにする時は近づきました。一週間内、遅くも十日の内には、何處でもお好きな處へ私参りますわ。貴郎となら何處だつて構ふものですか。』



そこでジョルジオは、内心覺束ない氣がしたが、急に盲目的な發作に襲はれて、思ひ切つた試みを企てた。彼はガルチアグレエを後にして、海沿ひの土地へ隠れ家を捜しに出かけた。初め四五日の間は、死と相對した際どい所から逃れ出た後の、生の甘快さと深さを味ふ事が出来た。

『イツボリタがうまく俺を全快させてくれよばいよが、俺の病は健全な強い戀の力でなくては癒らない。世の中に永續する歡喜は唯一つある。一人の女を絶対に、確實に所有することがそれだ。俺の求めてゐるのはそれなんだ。』そして彼は自分を投げ出して迄、受身の戀に苦むかはりに、飽く迄も進んでそれを歡樂の形に變へて味ひたかつた。

彼の見出した隠れ家は、サン・ヴァイトといつて、金雀兒カシラで有名なアドリアの海沿ひの地であつた。位置は斷崖の中腹にある高臺で、オレンジと橄欖の林に包まれ、左右に岬の突き出してゐる入江を眼の前に見下してゐる。

ごく粗末な家の造作であつた。表の梯子段を登ると、涼廊ロッヂへ出る。其處には四つの部屋へ通ふ扉が四つ開いてゐる。各部屋の扉と向ひ合つて反對の壁に、橄欖の林を見下す窓が一つあつた。階下にも涼廊があるが、室は一つを除けばその他は殆ど人の住めない所であつた。家の片方は廢墟と續いてゐて、其處には持主の農夫達が住んでゐた。見上げる様な二本の櫛の樹は、根氣強い

北風に吹き曲けられて、岡の方へと傾いてゐた。その木蔭は庭を蔽うて、夏など戸外で食事する時は、石のテーブルを涼しく包んだ。この中庭の周圍には、石造の胸壁がめぐらされてゐる。その壁越しに、香りの高い、花盛りのアカシアの樹の群が、海を背景にして美しい葉をくつきりと浮立たせてゐた。此家は海水浴の季節になると、間借りの客に貸す事になつてゐた。左右の岬の突端には、どちらも隧道トンネルが掘つてあつて、その兩方の入口が此の家から見られた。鐵道は一方の口から他の方へ眞直に海岸に沿つて走つてゐる。その距離は約五六百メートルもあらう。右手の突端に、岩角へ向けて、梁と板で造られた大きな蜘蛛の巢の恰好をしたトラボッコオといふ不思議な漁具が懸つてゐた。

時節外れの借手は、思ひもよらぬ福の神の様にちやほやと歡待された。母家の老爺は、『家は旦那の自由に使つて下さい。』と挨拶して、家賃はいくらとも切出さなかつた。『お氣に召したら、えゝ丈頂きますから。何時でも宜しうござんす。』

かういふ卑下した言葉を使ひながらも、注意深く客の様子を見てとつた。老爺は獨眼で、頭の頂が禿けてゐた。野良仕事の爲に曲つた兩脚でやつと支へ、及び腰に身體を運んでゐた。ジョルジオはたづねた。

『静かだらうね。人は來ないだらうし、騒々しいやうな事もあるまい。』

老人は海の方を指さして、にっこりした。「それ、あの外にや何も聞えやしません。たまに機はたの音ぐれえするけど、今ちやカンチアも機を織るこたあ滅多にないんです。」といひながら笑ひかけて闕の方を指さす。そこには俾びの嫁のカンチアが顔を赧かくして立つて居た。

彼女は姪まへ娠ごんしてゐる腰の周圍がもう餘程膨れてゐた。ブロンドの、肉色の明るい、そして顔に雀斑そばかすのある女であつた。闕際に此の女と並んで十位の小娘がゐた。

「私わたしん家は此の三人と、外にアルバドオラが居るだけです。」といつて老爺は、橄欖オリーブの林の方を振り返つて、大聲で呼んだ。

「アルバドオ。アルバドオ。」それから、「エレナや、呼びに行つて来い。」と孫娘にいつた。エレナは去つた。すると老爺は又聲高に話しかけた。「ねえ、旦那、アルバドオラが二十二人も餓鬼を生みつけました。野郎六人と阿魔アモつちよが十六人。その中俾二人と娘七人は死にましたが。俾一人は亞米利加へ行き、二番目はトッコオの石油坑カで稼いでゐます、末の子の、此のカンチアの亭主に當る奴は、鐵道の方へ出て、二週間置きにしか歸つて来てくれませんが、私等なんかうつちやらかしですよ。ねえ旦那、親爺一人で餓鬼百人は育てるけれど、餓鬼が百人居たつて、親爺一人養へねえつて、本當のこととござんすなあ。」

七十歳にも餘るその巫女みこが來た。前掛には大きな蝸牛が一ぱい入つてゐた。背の高い女だけ

ど、ひん曲つてやつれてゐた。

「此の旦那が今日から此家を貸せとおひひなのだ。」と老爺がいふと彼女は應じた。

「願はくば天主の恵み氣身にあらむことを。」

と氣抜けでもしたやうにいつて、それでも深切らしくジョルジオの方へ寄つて、横目でじろりと眺めた。それから

「イエス復活よみがへり給ふ。願はくば天主の恵み御身にあらん事を。麵めん麴もくと酒のあらむ限り世に住み給はん事を。太陽の如く榮え給はん事を。」

といひながら軽い足取りをして家の中へ入つて行つた。老爺はジョルジオにいつた。

「私の名前はコラ・ヂ・チンチオといひますが、私の親爺はシムバニアと綽名されて居つたものですから、誰も彼も私の事をコラ・ヂ・シムバニアと呼ぶんですよ。旦那、庭を見に行きませう。」

ジョルジオはその後に従つた。老爺は先に立つて、「今年や豊年ですよ。」と作物を褒めながらいつた。畑は生き生きと育つてゐた。オレンジの樹は、高い匂を立てるので、大氣は丁度強い酒のやうな甘い香りを漂はしてゐた。その他の果樹は、もう花の盛りが過ぎたけれど、澤山の果實は養分に富んだ枝から、生なり下つて、そことも知れぬ微風そよかぜに揺られてゐた。ジョルジオは「是がい

はゆる超絶した生活といふものかも知れない。」と考へながら歩いて行つた。  
 老爺は自然の中に生き長らへた人の習慣として、色々と豫言の様な事をいつた。  
 『肥料が納屋に一杯あれば、お寺は坊様が一杯おいでになるより、もつと不思議な驗が現れますよ。』それから畑の外れにある、花盛りの豆の田を指さししていつた。『豆といふ奴は、作物の間諜ですな。』

田は眼に入らぬ程のうねりを見せた、どの豆の花も、皆半分開いた人の口のやうに見えた。そして瞳の様な黒い二つの斑點が着いてゐた。かうした唇や眼の着いた花の顔へて居るところは、不思議に動物に近かつた。

『何といつてイッポリタが喜ぶ事だらう。彼女は謙遜な自然の美に對して、微妙な熱烈な興味を持つてゐる。』と彼は思つた。そして凛々しく、すつきりと水際立つた姿で、青葉隠れに見える彼の女を心に描いてみた。すると一種の惱ましい氣持が轟々と逼つて來た。『彼女を呼寄せ、すつかり彼女を征服する。しつほりと彼女の愛を受けなければならぬ。その時々に変つた樂みを彼女の爲に拵へてやらなければならぬ。』

聽て梯子段を上つて涼廊に來た彼は、酔つたやうな眼附で景色を眺めた。そして、恰も太陽に胸の底迄照りつけられた様な、じりじりした不安な氣がした。海は一樣に、連續した脈を搏

つて、幸多き空の姿を映してゐた。水晶の様な空氣を透して、あちこちの遠景がはつきりと見えた。白いオルトナの市街が紺青の空に、平行に思ひきつて聳えてゐた。突端と入江が半月形に繋がつてゐた。金雀兒の黄金色の夜は、海岸一帯にひろけられてゐた。甘い空氣はエリジイレを舐める様であつた。

## 三

初め暫らくの間は、全く家居に氣をとられてゐた。新しい生活を、此の靜かな所で始める覺悟であつた。支度の手傳ひには何にでも抜目のないコラといふ者がゐた。ジョシルオは塗立ての漆喰壁に、ふと思ひ出した古い句を、棒切の端で書き附けた。『卑賤の家に大なる安靜あり。』月柱樹の葉が三片、風に吹き落とされて高い窓の間から飛込で來たのすら、縁喜よく思はれた。

けれども又何も彼もが整頓して附元氣がなくなると、深い心の底には、不安と、不満と、懊惱のこびりついてゐる事が知れた。それが何に原因してゐるのか、彼には分らなかつた。唯何となく、別の家の、別な人の口から、自分を呼返して吐りつけてる様な聲が聞えてくる様に思つた。すると、あの膈を裂く様な別れが胸に浮んで來た。涙をこぼさぬだけ、それだけ無情な別れ際に彼は嘘を吐いた。それは欺かれた母の眼の中に、さも悲しげに、『誰に見換へてお前は私を棄て、』

行くのだえ。』と訴へる色を讀んで堪らなくなつたからであつた。どうすれば此の耳につく聲を黙らせる事が出来るだらうかと彼は思つた。

暗い憂愁はありながらも、こちらへ來かゝつてゐる彼らの約束をやはり信じてゐたかつた。やはり此の戀に高い道德的な意識をつけたいと彼は欲した。けれども、彼女の姿を思ひ出す時には何時も、官能の欲情ばかりが跋扈した。心の中では此の戀を純潔なものにしたいと憧れてゐながらも、如何してか肉以外に何ものをも認める事が出来なかつた。來るべき日を、唯今迄の様な感覺的享樂の連続として考へる外、如何する事も出来なかつた。すると又、悩みやつれた母の顔と涙に赤く爛れた腫れほつたい眼。クリスチナの胸にしみいるやうな美しい微笑。死にかゝつた弱い子供が、うな垂れた大きな頭。慘めな貪食家の死人のやうな顔が浮んできた。そして母の弱り果てた眼が訴へる。『誰に見換へてお前は私を棄て、行くのだえ。』

## 四

午後であつた。ジョルジオは磯傳ひに、ヴァスト岬の方へ續いた。歩きづらい道を辿つて行つた。岡が海岸線に沿つて横はつてゐた。一條の流れが、樹の幹を剗つて枯木で支へた筧から落ちて、小さい谷間をちよろちよろと流れてゐた。土樋を通ふ溝が、田圃の方まで續いて、靜かに音

を立て、行くその附近には、美しいバイオレットの花が、愛くるしいしなを作つて撓んでゐた。傾斜を走る溢れる様な水は、小さい橋の下を漕いで、砂濱へと注いでゐた。アアチの蔭に隠れて女が幾人も洗濯をして居た。一人の男が跣足で靴を手にさけて、鐵道線路に沿つて歩いて行つた。又、重い布を背負つた二人の小姑娘が、きやつきやつ騒ぎながら、互に負けまいと駈けて行つた。一人の老婆が、青い総糸を竿に懸けてゐた。

もつと向ふを見ると、大きな百姓家の瓦屋根に、瀬戸物で造つた花がくつゝいてゐた。表の梯子段の上で、二人の女が糸を繰つてゐた。日に照らされた糸巻は金色に輝いた。かたかたと機織の音が聞えてくる。機織女の姿が窓から見えて、梭をやる度に、身體を動かす有様が手に取るやうであつた。近くの田圃には、馬鹿に大きな灰色の牡牛が寝そべつて、のんびりと耳や尾を振り廻して、五月蠅くたかる蠅の群を追ひ拂つてゐた。その周圍を雛雞が歩いてゐた。

ずつと先の或る家では、周圍にかこひをした靜かな庭一杯に、月桂樹が植わつてゐた。華奢なすらりとした幹が、突つ立つた儘動かない。その下の地面は漸く打返したばかりの様であつた。片隅にある黒い十字架は、墓場の様な諦めの悲しさを、しんとした構内に漂はした。小路の突當りに梯子段が見えた。その一番下の段に、老人が一人坐つた儘寝込んでゐた。上の半ば開いた扉からは搖籃の動く音と、單調な子守歌とが洩れて來た。かうしたすべての謙遜な事物にも、深い生

が潜んでゐた。

## 五

イッポリタからの通知には、愈々約束通り、五月二十日の火曜日に、午後一時頃の直行列車でサン・ヴァイトに着くと書いてあつた。その日迄には後二日しかなかつた。ジョルジオは手紙を出した。

「早く来てくれ。待つてゐる。こんなにじらされた事は初めてだ。準備はすつかり出来上つた。といつたつて何も準備といふ準備は出来ないが、唯俺の註文だけは準備されてゐる。来るに就ては是非とも忍耐と寛容とを十分用意して来てくれ。かういふ荒れ果てた、手の付け様もない場所で不自由な事はとても甚しい。まあ考へてみる。サン・ヴァイトの停車場から此の隠れ家迄四十五分はかゝるだらう。此の間を来るには、てくてく歩くより外はない。是非丈夫な靴と屋根ぐらゐもあるバラソルで出掛けて来なければ駄目だ。着物は、朝の散歩に着て出る、ぱつとした丈夫な物が二三枚あれば結構だ。浴衣だけは忘れない様に持つておいで。此の手紙は圖書室で書いてゐる。此の室に書物が山程あるが、我々の読む様なものは一つもない。あゝ早く一緒になりたいものだ。此處へ来てからこれが二晩目だ。たつた一人であるより外ない。お前が此の寢床を見たら

如何思ふ事だらう。敷蒲團には牧場中の毛が集めて入れてある。藁蒲團は畑中の王蜀黍とうもろこしの殻が詰め込んである。かういふ清淨な寢床が、お前の肌を觸れられやうとは、まさか思ひもよらなかつたらう。それではこれでさやうなら。お前の唇が眼の前まへにちらついても今夜は眠られさうもない。」

## 六

此頃は歡樂の幻が、しつきりなしにちらついた。欲情は非常な烈しさで、彼の肉體をびくつかせた。思想と感情の人である彼も、肉の中には、なほ父の野獸の様な遺傳があつた。けれど彼に於ては、本能はやがて熱情と變り、肉感にくかんは病的なものに進んで行つた。彼はこれを恥かしい病氣だと思つたが、それだけ一層苦しんだ。然うした野獸性の發作に襲はれた時には、何時も或る別な人間が自分の位置を横領でもしたやうにしか思はれなかつた。見も知らぬ何人か、彼の内心に押しつて、彼が持つすべての本質を盡く奪ひ去つた。此の暴虐な掠奪者に對しては、どんなに抵抗しても結局無駄であつた。

觀照的な聰明な彼の靈は、餘程前から自己の生を探究しかけてゐた。そしてどんな外からの迷はしも、彼自身の精神の奥底から涌出す迷はしに比べれば、取るに足りないものだといふ結論を

得た。彼が交際してゐる偏僻ある藝術家や哲學者達と同じ様に、彼も亦内的の世界を組立て、現則正しく生活し、外界の騷擾から没交渉でゐたかつた。併し、祖先の残した様々な因業深き遺傳が、彼の身體の一番深い處に場所を占めて、如何に彼の理知が懂れてゐるやうとも、理想に近づき邪魔をした。

ジョルジオの身體組織に於て、感受性が異常に發達してゐた事は驚く程である。神經が非常な興奮性を持つてゐる爲に、一般に快感であるものも、彼には苦痛である事は珍しくなかつた。そればかりではなく、過度な神經興奮による苦痛の續いた後は、全身に一種の楽しい感じが残つた。それも一つジョルジオの身體で著しい現象は腦充血が頻りに起る事であつた。極端に神經質な彼は、觀念や幻影の跋扈に意志の力を壓倒されて、一時性偏執狂の意識状態になる事があつた。彼の複雑な靈智の特徴ともいへばいへるものは、觀念や幻影の限りなく豊富で、それ等を互に電光の如く速かに聯想する事である。思想は熱情となつて、精神の調子を亂した。空想の感情は實際の感情と同じ確かさを持つてゐた。奇異な紛料した聯想は、長い異常な陶醉を想像力の上に齎した。

かういふ組織の下に、唯一の途を進んで、唯一の平衡を見出す事はジョルジオには出来なかつた。自己の本能、自己の感情、自己の思想を支配する事は、彼の柄ではなかつた。彼の生活は「颶風の中で有るだけの帆を張切つた一艘の船」とも譬へられるやうなものであつた。

それでも時には、現象界以外に迄も出来る丈聰明な眼を向けて、殆ど正しい人生觀を造り上げる事もあつた。何よりも先づ彼は孤獨と利那といふ事を深く身に感じた。此の二つの感じが、びつたり溶け合つて、以前から彼の考へてゐた近代思想の一方を形成する事もあつたのである。

その代り彼の靈は、其の孤獨の爲に絶望する程苦しんだ。そして永久に解放されぬ囚人の様に、殆ど盲目的にもがき狂つた。それからやつと靜かに落着いたと思ふと、又不安の念が起つて調子を亂した。目的は始終ぐらついて、幸福は常に遠くにあつた。

遺傳の影響を自ら知つてゐる程智的な男でありながら、ロウマンチックな幸福の夢を捨てる事も出来なかつた。一切は利那的のものだと確信する程聰明な男でありながら、尙彼は一人の女を得て幸福を追求する望みを棄てる事は出来なかつた。戀の悲哀、女の弱さは十分に知つてゐた。それにも關らず、彼は久遠の戀に憧れ、女の忠實を信じたかつた。冷厳な思想と熾烈な感情、薄弱な意志と強固な本能、現實と空想といつたそれ等の間にある不可思議な對照は、彼をして苦痛しい混亂に陥れた。空想の感情と實際の感情がごつちやになつて、彼の頭腦あたまの中は、複雑不規則な状態を生じた。すべての彼の能力は病氣の方へ吸取られて了つて、どんな仕事も出来ない身體になつて了つた。デメトリオの遺産を相續すると共に物質上の獨立を得た彼は、衣食の勞なを知る事が出来なかつた。様々な技能を持つてゐながら、彼は何時迄も無用の人、遊情の人となつ

てゐる外はなかつた。そして己自身を疑ふのが始まりで、遂には一切を疑ふやうになつた。感情生活の激しい興奮の後で、精神上に一種の痲痺を起す事がある。その徴候は、すべての物に對する無關心であつた。それが幾日も續く。又時によると唯一つの考へに捕はれる事もある。それは死といふ事であつた。さういふ時には、有らゆる刺戟も燒石に水で効果がなかつた。死の考へこそは彼の好きな、然し恐しい強迫觀念であつた。優しい自殺者たるデメトリオが、何時も自分の追隨者と呼んでゐるやうな氣がした。けれども大概の場合、自己を憐む情が起つて、いはゞ『同情の快感』とも名づくべき不思議な悲哀が、彼の全身を浸した。

かうして非常な努力で安全に此の最後の危機——死の誘惑から逃れ出た後は、彼はまだ多少曇つてゐる眼附きをして生を眺めた。『世の中に永續する歡樂は唯一つある。それは一人の女を絶對的に確實に所有する事である。俺はその歡樂を求めてゐるのだ。』と彼は思つた。彼は底の底迄懷疑に浸りながら、自分の性質と正反對なものを手に入れようとしてゐたのであつた。『確實』がそれであつた。而も戀愛の『確實』をであつた。けれども彼は今迄に幾度かしつこく、自己を解剖した爲に、その『確實』がほろほろと碎けて行くのを見たではないか。長い二年の間も空しくそれを追求したのではなかつたか。それでも彼は追求を續けなければならなかつたのである。

## 七

その日が來た。その日の曉方、まじりとも眠られなかつた彼は眼を覺まして思つた。『愈々今日だ。今日こそ彼女を眼の前に見る事が出来る。此の兩腕でしつかと抱く事も出来る。何だか初めて抱擁の様だが、その儘俺は死んで行きはしまいか。』今や良心は全く不可抗的な欲情の脚下に踏みつけられて了つた。そしてあの戀人を妹と呼びたがる様な純潔な彼とは思はれなかつた。曉て彼は、烈しいシオツクにいらいらして、寢床を飛下りた。

曉の窓際に、橄欖の枝が青白く見え、控え目な雀の囀りは、單調な海の音に混つて聞えた。小屋の羊は臆病さうな聲を立てた。

涼廊へ出て見た。朝湯の所爲で元氣が引立つてゐた處へ、強い香料の様な朝の空氣を深く吸込んだ。青春といふ感じに彼の胸は轟いた。眼の前に太陽は、純眞に、一點の曇りもなく、祕密もなく生れ出た。コラは忙しい庭掃除をしながら高聲に聲をかけた。

『今日はお目でたい日ですぞ。奥様あいらつしやるし、昇天祭も來ねえ中に、麥の穂が出るんですからな。』

ジョルジオは笑みを洩した。

「金雀兒を摘んで貰ふ筈の女の方は心配してくれたらうね。道筋の隅から隅迄、それを撒いてやらうと思ふんだよ。」

「五人も呼びに遣りました。」

そして老人は此の五人の娘の名と住所を教へた。「シムミエ(猿)の娘に、スグアステ(人喰ひの女)の娘に、ファエツタに、スブレンドオレ(華美)に、ヤルビイネ(南西の風)の娘と。」

かういふ名前は、ジョルジオをふき出させた。これらの少女達は何かある仙女の物語の中からでも抜け出して来て、かの美しい羅馬女の通る道筋へ、花を撒きに來たかの様であつた。彼は降りて行つてきいた。

「何處で花を摘んでるんだね。」

「向うの山です。」と小高い岡を指でさして、「向うのクエルチェツテの山で。皆唄を歌つとりますから知れます。」

いかにも女の唄聲が、時折聞える。ジョルジオは坂を登つて唄の主を尋ねて行つた。曲りくねつた細路がぐるぐると櫛の林の中を通つてゐるが、或る處まで來ると、それが何本かの細路に分れてその先が何處へ如何行くのか分らない。けれどもジョルジオは唄と句に導かれて、道を間違ふ事もなかつた。遂に金雀兒の野を捜し當てた。

其處は一段高くなつた岡で、一面に咲く金雀兒は眞盛りの花を見せてゐた。五人の田舎娘が、聲を限り歌ひながら、花の着いた枝を籠へ摘んでゐた。見知らぬ男の影を見つけた彼女等は、唄をやめるとくすくす笑つた。ジョルジオは訊ねて見た。

「ファエツタさんてのはどの娘さんだい。」

一人の少女はびつくりした様な風を見せて返辭をした。

「妾です。」

「お前だらう、サン・ヴァイト中で一番唄の上手な娘といふのは。」

「いゝえ、そんな事は知りません。」

「ほんとですよ、ほんとですよ。」と他の娘達がいつた。「旦那様此の人に歌はせてごらんさいませ。」

ファエツタは眞赤な顔に笑を見せて頭を振つた。仲間の者達が強ひる間も、彼女は前掛をいぢくつてゐた。小作りではあつたが、なかなかいゝ姿恰好をしてゐた。幾度も拗ねてゐたが到頭我を折つた。仲間の娘達は彼女を中心にして手を繋ぎ圓く取圍んだ。ファエツタは歌ひ初めた。初めは臆病さうであつたが、次第に聲が落着いて來た。朗かな聲は、透き通つた春の泉の流れる様であつた。彼女が對聯を歌ふと、他の娘達は一緒に覆唱を歌つた。



戀に對する五月の歡び、——まだ戀も知らない、恐らく死ぬまで本當の戀の悲しみを知るまいと思はれるそれらの胸から迸る聲が、ジオルジオの耳に響いた時は、楽しい辻占の様に思はれた。歌ひ女達は、もう一杯になつた花籠を指さして見せた。それはしつとりと露を置いた花の山であつた。ファゼッタはいつた。

「もうよござんしよ。」

「どうしてどうして、それつばかのぢや足りやしない。もつと摘んでくれ、もつとトラボッコオから家んとこ迄、すつと一面に撒かなくちやならない。梯子段から涼廊から何處もすつかり……」

「そんなに摘んぢやつては昇天祭の時に困ります。耶穌様に獻ける花が皆なくなるぢやありませんか。」

## 八

彼女は着いた。花の上を歩いた時は、奇蹟を見せる聖母の様であつた。彼女は花の毛氈を踏んで愈々家の闕を跨いだ。

かうして疲れきつた、幸福な彼女は、涙にぬれた顔をして、言葉もなく、男の腕に身を委せた

彼女の愛する男の接吻を浴びて、泣いたり笑つたりした。すべての苦しみも悲しみも忘れ果て、夢中になつてゐる有様は、今迄にない事であつた。

「あゝ、イツポリタ、イツポリタ。俺の靈。どんなにお前の事を思つてゐたか分らないよ。よく來てくれた。是からは何時迄も一緒にゐてくれるだらうな。俺をうつちやらかして行くやうな事をすれば俺を殺すと同じだよ。」

かういつて口も、頬も、頸も眼も、飽く事なく彼は接吻して、涙に出會ふ度には何時も激しい身顛ひを感じた。その疲れて見える顔の上には、涙と微笑と嬉しさうな色があつた。自分にすべてを投出して、遠い所をわざわざ會ひに來て、かうして自分の接吻の下で泣いてゐると思ふと、彼の心は淨められた様な氣がした。帽子と面帕を止めた長いピンを抜いてやつた。

「随分疲れたらう、氣の毒だつたね。顔も青いよ、本當に青い。」

面帕を額へ引揚げてやつた。旅行着の外套と手袋はまだ脱いでゐなかつた。男は何時もの様な恰好をして、ズエルと帽子をとつてやつた。美しい頭髮と水際立つた襟足が惚々と見渡された。ジオルジオは又接吻で彼女を蔽うた。頸の上、左の耳の下に二つの黒子を捜し當てた。外套の下に見える灰色の晴着は、何時かアルバノの時に着てゐた物であつた。身の廻りから微かなバイオットの懐かしい香りがした。ジオルジオの唇は一層熱を帯びて來た。けれども彼は自らを制し

た。外套を脱がしてやり、手袋まで手傳つて抜き取らせた。その手を額頭に押當て、狂氣の様に身悶えした。と、イッポリッタは、その儘その手で額頭を抱いて、自分の方へ引附けた。それから男の顔中へ憧れる様な暖かい口をくつゝけて、執拗く舐めずり廻した。

「お前に殺されちまう。」かう呟いた彼は、張りぎつた絃の様に顫へた。額窩にひつ搔く様な冷たさを感じて、それが背髓を通つて骨髄迄傳はつた。そして身内に何處となく、或る他の場合にも経験した様な、本能的な恐れの動いてゐる事に氣がついた。

イッポリッタは男から離れた。

「さあ、もういゝわ。何處妾の室。ねえジオルジオさん、かうして居れたらどんなに楽しみでせうね。」彼女はにっこりして周囲を見廻はした。二歩三步扉口へ寄つて、屈んで金雀兒を一掴み握つて、その匂を嗅ぎ込んだ時は、よそ眼にも官能の歡びがありありと見受けられた。自分は夢でも見てゐるのではないかと思ふと、彼女の胸は又激して來て、急に新しい涙が眼に滲み出た。

「何といつてお禮ませう。妾嬉しいわ。」と兩腕をジオルジオの頸に投げかけて、いつた。かうした詩的な思ひに、彼女自身の卑賤な生活から全く離された様な氣がした。

「妾貴郎のものだといふ事を矜りたいわ。貴郎は妾の矜りですわ。一分でもお側に居ますと、もう妾全く別な妾になつた様な氣がしますの。妾もうイッポリッタぢやなくつてよ、昨日のイッポリ

タではないわ。何とか名前を變へて頂戴な。」

彼は斯う女に命名した。「アニマ(靈)。」

二人は互ひの腕に激しく抱かれ合つた。互の唇の上に花咲いた接吻を根こそぎ引つこ抜くといつた風であつた。やうやくイッポリッタがそれを振り解いていつた。

「さあもういゝわ、妾の室何處。教へて。」

ジオルジオは片腕を女の腰に通して、寐室の方へ案内して行つた。彼女は驚きの呼び聲をあけた。それは馬鹿に廣い黄緞子の夜着のかゝつた婚禮用の寢臺が眼についたからであつた。

その遺物の周圍を廻つて、女は笑つた。

「これで此の中へ入るのにはなかく骨が折れるでせうね。」

「片足を俺の膝に乗つけて上ればいゝ。此處らの百姓は、昔から皆さうする習慣になつてゐるのだ。」

「聖者達が澤山ゐるのね。」かういつて彼女は枕もとの壁に懸つてゐる、神々しい尊像を眺めた。

「何かでもつて包んで置かなくちや。」

「それやさうね。」

間もなく梯子段の扉を叩く音がした。ジオルジオが出てみると、エレナが晝飯を知らせに來た

のであつた。彼はイッポリタの方を振返つて、『あの……。お前は如何する積りだ。』とどきまぎし  
ていつた。

『本當に妾ちつとも喰べたくないの。お夕飯ゆふはんに頂きますから……。』  
二人は同じ事を考へてゐたのであつた。

『お前の室へ行かう。風呂の支度がすつかり出来てるよ。』

ジョルジオは苦しきうな聲でさういつて、彼の女を別の室へ連れて行つた。

『ほら靴も箱も皆此處に来てゐる。ぢや後で又。早くだよ、いゝか待つてゐるんだから。』

彼女を残して出て来た。暫くするとびちやびちやと水の音が聞えた。そしてあのしなやかな女  
の身體が、冷い氣持のよい水を浴びて、びくびくしてゐるのだらうと想像してみた。彼は夢中に  
なつて叫び立てた。『イッポリタ、イッポリタ。』

## 九

一層疲勞が出て絶入るばかりになつたイッポリタは、次第に眠りに落ちて行つた。唇の迹には  
だん／＼本性がなくなつて消えて了つた。唇が一寸蓋をしたと思つたら、聽て又少しづゝ開いて  
行つた。ジョルジオは片臂ついてそれを見まもつた。『美しい。如何にも美しい。そして如何にも青

白い。それは他の女に見られない、一種違つた死の様な青白さだ。』とジョルジオは思つた。『この  
女の美は、病に疲れてゐる時に見ると實に神々しい。何時か二月の晩に、俺の前を通つたあの見  
知らぬ女であつたイッポリタが思ひ出される。その女は身體に一滴の血もない様に見えた。いつ  
そのこと女が死んで了つたら、此の上もない完全な美しさが見られるやうな氣がする。以前に  
も俺は、イッポリタの美を、平和な死の裡に置いて想像して見た事があつた。それは二人の戀の  
初めの事で、何でも大きな白い薔薇の束が、花瓶の中に投げ込んであつた。彼女は褥倚の上で、  
身動きもせず、息もせず、うつら／＼してゐた。その時俺は不意に妙な氣になつて、彼女に  
目を覺まさせない様に、薔薇の花で身體中を飾つてやらうと考へついた。二つ三つ頭髮に挿して  
見たけれど、さうして花で飾つた女が、靈のない、死體の様にしか俺には見えなかつた。ぞつと  
したので、急に彼女を揺ぶつて眼を醒まさせようと思つたが、女は失神の體ていでじつとしてゐた。  
その時分彼女は病氣で、痲痺させられてゐたのである。どんなに恐い思ひで五官の恢復を待つ  
た事だらう。そして同時に、死の影を反映した、たとしへもなく莊嚴で端麗なその顔を眺めて、  
どんなに熱狂しただらう。』

彼は上體を屈めて、眠つた女の額に口をつけたが、女は知らなかつた。やつとの事で、彼は自  
分を制して、一層強く女を抱く事を思ひ止つた。或は女が彼の愛着に氣が附いて、それに應ずる

気があつたかも知れなかつた。けれども自分と同じやうに夢中になる者がなければ、逆も獨りで夢中になんかなれないといふ事を感じた。そしてこんな事を考へた。「俺が彼女から楽しみを受けたい時に、彼女もきまつて俺から楽しみを受け取つただらうか。眞に深く感覺との交通、そんなものは空想に過ぎない。感覺に於てはどんな女でも偽りを見せる。戀してゐる女もゐない女もそれには區別がない。それは、戀する女、情熱ある女程、却て感覺の上の偽りを見せるといふ意味である。その女自身が、すつかり服従した様子を見せなければ、戀人に苦痛を與へる心配があるからだ。つまり彼女の熱情も、俺を喜ばせる爲の小刀細工でないだらうか。」

彼は何だかじりじりした氣持になつて、此の理解の出来ない女の方へのしかゝつた。けれど次第に女の美を思ふ心は彼の氣を鎮めた。かうして今日始めに『新しき生』が彼の前に展開され始めた。

じつと耳と心を澄まして聞くと、靜かな海の單調な音ばかりが、周圍に満ちた平和を破つてゐた。彼は又もう一度戀人を眺めた。しなやかな、少し長過ぎるかと思はれる位の身體恰好は、蛇の様な妖艶さを思はせた。若い男のやうに腰が細い。孕んだ事のない腹には處女の純潔が残されて居る。胸は小さく狭まつてデリケートな石膏を彫つたやう、張切つた乳首は赤紫の色をしてゐた。頸筋から背中へ掛けての身體附は、これもやはり若い男の姿その儘であつた。これは自然

が稀に見せる理想的な人間の型である。けれどもジョルジオが最も驚いたのは肉體の色であつた。何とも形容の出来ない皮膚の色であつた。

眠つてゐるイッポリタは一寸動いた。それには何とも知れぬ苦しうな様子が見えたが聽て消えた。彼女は枕の上に首を落して反り返つた。張り切つた胸の上には血管が微かに透いて見えた。下顎は心もち頑固で、頤は横から見ると縊れてゐる長い。鼻孔は大きい方であつた。けれどもかうした女の顔のあらも、ジョルジオには不快な感じを與へなかつた。何故ならば、そのあらをなほしてしまへば、それと同時に容貌の上から生々した表情を失ふ心配があると思つたからである。

イッポリタが恍惚の頂上に達した時、彼に話した言葉がふと思ひ出された。「貴郎は處女を掴まへていらつしやるのよ。今迄妾戀にはどんな氣紛れがあるかも知れなかつたんですもの。」

イッポリタが結婚したのは、二人の戀が結ばれた前の春であつた。婚禮すると間もなくたちの悪い病氣を患つて、床についたきり長い間生死の間をさまよつた。そして長い病後の夢の様な一種のバツションは、彼女を見知らぬ一人の青年に惚れ込ましてしまつた。その男の並ならぬ物優しい聲は、今迄聞いた事のない囁きを彼女に囁いた。だから、彼女があゝ言つたのもまんざら嘘ではあるまい。

色々な戀の始まりにあつた物語が、それからそれへとつきりジョルジオの記憶に返つて來た。で、心の中でその頃の異常な情緒と感覺とを作り上げてみた。

かういふ記憶を呼び起すに當つて、その昔の陶酔の名残が、今の身の周圍に漂ふやうな感じがした。それから後の此の女の變り方はどんなだらう。新しい何とも知られぬ現實の或る物が、彼女の聲にも素振にも眼色にも入つて來た。戀しい女の姿は男のそれに似て來たのであつた。男の思想、分別、趣味、嫌惡、傾向、憂鬱、彼の心を過ぎる印象といふ印象は皆女へと傳はつて行つた。話をする時のイッポリダの態度はジョルジオにそっくりであつた。言葉の癖や、字の書體までが男に似てゐた。

けれどもジョルジオが色々俗な生活を蔑む心を吹込んでやつた此の女が、どんな下等な交際を今迄續けて來ただらうかと思ふと、又ずつと前の様な煩悶が出て來た。

随分情なく思つた事が何時かあつた。女は時刻が遅れて、息を切つて駈込んで來た。眞赤な顔をして頭髮は煙草の匂がしてゐた。喫煙者の大勢ある部屋に長く居れば、誰でも此の匂がうつるそしてかういつた。「遅くなつてすみませんでしたわねえ。だつてお客に御飯を出せつていふんですもの。そいでこんなにかゝつて了つたのよ。」すると殺風景なテーブルや、それを取巻く厚顔無恥な男達があり／＼と眼に見えて來た。それと同様な色々な小さい出來事や、堪え切れぬ數々の

苦惱が思ひ出された。「まあ兎も角もかうして女も俺と一緒になれたのだ。毎日絶え間もなく、此の女を見たり楽しんだりする事が出来る。色々な新しい方法を考へて、喜ばせたり、困らせたり、泣かせたり、得意がらせたりしようと思ふ。俺といふものをしみ込ませてゐれば、その内には遂に此の俺が、彼女自身の生命になくはならぬ物だといふ氣になつて了ふだらう。」

そつと女の方へ顔を寄せて、腕の根もとと思ふ邊へ口をつけた。かうしてこのデリケエイな複雑な女の眠りを飽く事もなく眺めてゐた。女の眠りには神祕がある。驚くべき女の氣孔からは、恐しい力で一種の妖氣を彼に吹きかけてゐるやうに思はれた。

急にイッポリタは寢返りを打つた。目は醒さなかつたが、微かな呻きを洩した。半ば開いた口から出る呼吸が早くそして調子外れになつた。と思ふ中に眉の間に皺が寄つた。夢を見てゐるのである。ジョルジオは不安な氣持になつた。

眠つてゐたイッポリタは突然飛び上つた。悪夢に襲はれたやうに身體中もがいて苦しんだ。くるとジョルジオの方へ向き返ると、呻くと一緒に金切聲を張上げた。

「いゝえ。さうぢやないの。」

といつて、二三度むせぶ様に息をした。そして飛び上つた。ジョルジオは耳を側立て、多分男の名前位いふだらうと、續いて言ひ出す言葉を待つてゐた。

女はひよいと目を開いた。きよとくした眼で男を見たが、ほうつとしてまだ半ば眠つてゐる。半ば無意識に男の身體へ自分を摺つけるやうにした。

『おい何の夢だ。』かうきいた聲は、胸の動悸を反響させたかと思はれる位變つてゐた。

『知らないのよ。』ぐつたりと、まだ眠つた儘男の胸に頬をあてゝ、『何でしたか……。』といふと又寢入つて了つた。

當てられた頬の柔かい壓迫を感じながら、身動きもせず居ると、心の底に漠然とした腹立しさが起つて來た。自分と女は離れ離れのもので理解しようとしても駄目だといふ感じがした。唯だ一瞬の間に、過去二年間のつらい事實を経験した。

不意に女は又飛び上つた。呻いて悶えて又叫んだ。たまげた様にばつちりと眼を開いた。

『あゝ苦しい。』とむせぶ様にいふ。

『如何したんだ。えゝ。夢か。』

『夢ですけれど……。』顔にはたまならぬ痙攣が見える『もつと妾の方へ寄つて頂戴。貴郎に突つつかれたり、酷い事をされてるやうに思つたの。あゝ苦しい。又病氣が……。』

病氣以來、尙一寸した發作に襲はれる事が時々あつたのである。彼女はジョルジオの方へ向きなほつて、じつと男の眼の中を見入ると、其處には暴風の跡があるのを知つた。そして甘える様な

風に、不平らしくわざといつた。

『貴郎があんまりひどい目に遭はせるからよ。』

一〇

空氣は夏かと思はれる位蒸し暑かつたので、ジョルジオは相談する様にいつた。

『如何だ。飯は外で食はうぢやないか。』

イッポリタは頷いた。梯子段の所から互ひに手を繋いで降りて行つた。一足づつゆつくりゆつくりと運ばしては、立止つて潰れた花を眺めながら、そして互に黙つて笑み交しながら降りて行く。彼等は土塀の方へ歩いた。そして四邊を見廻して海の音に耳を傾けた。イッポリタはしんとした静けさに引き入れられる様であつた。廣漠たる水面を眺めてゐると、何とは知れぬ恐れを感じずには居られなかつた。

『何とまあ遠い事でせうね。』

今二人の立つて居る場所は、非常に世間から隔離した、遠い遠い人も知らない、近寄る事も出來ない國であるかの様な氣がした。何分かの間、二人は口を噤んだきり、並んで立つた儘、深い瞑想を憂鬱なアドリアの海の上に注いでゐた。そこには白い冠を頂いた巨濤が押し寄せ押し寄せ

してゐる。時々涼しい軟風がアカシアの樹の茂みに吹込んで、そこから香りを運んで来た。

『何を考へてるんだ。』とジョルジオは、惱ましい悲しさを抑へつけるといふ風な元氣できいた。

彼はかうして戀しい女と唯二人放逸な生活を送つてゐる。それでゐながら胸の中では満足出来ない。一種の慰められない絶望が潜んでゐるからであらう。女が黙つてゐるので、又女の手を握つて、眼をすつと眺め入つた。

『何を考へてるんだ。』

『リミニのことよ。』とイツボリダが答へてにっこりしてみせた。何時も何時も過去であつた。

今のやうな時ですら、やつぱり昔の事を思ひ出してゐた。

かちやぐいと皿の音がした。

『お腹がすいたらう。』とかう子供らしく元氣にきかれて、女は思はずにっこりした。

『えゝ。少し。』

振返つてみると、櫛の樹陰に食卓が用意されてゐる。間もなく晝飯の支度が出来さうであつた。

『有合せの物で我慢するんだぜ。』とジョルジオはいつた。『田舎だからね……。』

『嬉しくつてよ。妾菜葉でも何でも……。』

嬉しさうにテーブルの方へ寄つて物珍らしさうな眼附をした。子供らしい顔をして、白い艶か

な陶器の中の大きな生花を眺めた。

『みんな好きな物ばかりだわ。』

寄り掛つた處には大きな圓い麵麩があつた。

こんがりした美味さうな、中高な皮の内側はまだ暖い。

『いゝ香りね。』

といひながら性急な子供の様に、端の方を引裂いた。

『あら佳い麵麩よ。』

透明なしつかりした彼女の齒は、噛み碎いた麵麩の中できらめいた。かうした様子には、何となく思ひがけぬ純な率直な愛嬌ばかりが満ちてゐた。

『まあ召上つて御覽なさい、すてきなおいしいから。』

さういひながら濕つた齒型のついたきれ端を男にやつた。そして同時にその麵麩を男の口の中へ押し込んで、きやつくと笑つた。

『ほれ御覽なさい。』

彼も美味いと思つた。そして此の刹那的な魅力に身を委ね、此の新らしい誘惑に知らず知らず恍惚として了つた。荒々しい熱情が急に昂進して来て、此の誘惑者をひつ掴んで、兩腕で抱きし

めて駈け出したい様な氣になつた。身に纏ひつく古い皮をひき裂いて、新しい身になつて出て行きたい。身の毒になる様な習慣や、思ひもよらぬ虐げや、あらゆる罪科から脱却して了つて、初めて物を見るといつた眼附で凡ての物を見得る様な氣がした。『さうだとすると櫛の樹陰の石の食卓で、新しい麵麩をちぎつて自分に分けて喰はせた此の若い女が、その奇蹟を見せてくれるといふ事は望まれないだらうか。今日から本當に「新しき生」が初まると言へないだらうか。』

## 新しき生



日の出る頃である。蒸し暑い東の風がしめりを含んで重たくなつた。空一杯の綿雲はミルクの様に白い、海は静かで青白かつた。アドリア海では珍しい唯一の白帆が、チオメデオの島の方に、じつと漂つてゐた。

イッポリタは涼廊の壁に寄つて、だるさうに帆影を眺めた。その眼は帆の白さに引入られた様であつた。何處となく放心の體で、うつとりと、といふよりほかんとしてゐる。かうして生氣のなくなつたといふ事は、彼女の容貌のあらを一層際立たせて見せた。『何もかもこの一瞬間でおじやんだ。焰も消えた。戀しくも何ともない。』かう考へたジオルジオは、今迄自分の生活の根據と迄してゐた此の女が、無意識に曝け出した實相を注意深く思ひ返してゐた。

『戀しくも何ともない。如何してかうも早くこんな事になつて了つたのだらう。』彼の感じたのは唯單に亂行の後の冷清——執拗い歡の後の肉の嫌惡のみでなく、もつと根深くて動かす事の出来ない一種の障壁であつた。『如何して同じ調子で愛して居られるもんぢやない、もうあんな恰好を見せつけられたんだから。』何時もの妄想が又襲ひかゝつて來た。そして今迄彼がして來た事は、あの放縱な父がして來た所と同様ではないかとさへ思はれた。

『何てかう陽氣が重つ苦しいのでせう。』イッポリタはかう小聲でいつて、涯しなき海にまだその

儘でゐる白帆から眼を移した。『貴郎さう思はなくつて。』

彼女は立上つた、二三歩だるさうに歩き出してクツシヨンの載つた大きな柳の腰掛にどつかり坐つた。死にさうな程疲れてゐるといふ風で、ふうつと長く溜息をつきながら頭を仰向けにぶらりとさせると、細目に閉ぢた彎曲した眼瞼がびくり／＼と動いた。すると急に彼女はまるで燃える火の様に、再び非常に美しく變つて來た。

『何時マエストラアレの風が吹くのでせう。あの帆を御覽なさいな。何時も同じ所にしかるないわ。妾白帆を見たの來てから初めてよ。何だか夢の様な氣がするわ。』

ちつともジオルジオが返事をしないので、又いつた。

『貴郎外に見たことあつて。』

『ないよ。俺も初めてだ。』

『何處から來たのかしら、あれ。』

『ガルガアノからだらうな。』

『そいから何處へ行くの。』

『オルトナへだらうさ。』

『何積んで。』

『さうだね、オレンジかな。』  
彼女はにっこりと笑つてみせた。その微笑迄が彼を清らかな生き生きした氣分にさせて、再び容貌を變らせた。

『あら。あら。』片肘ついて立ち上ると、遙か彼方の地平線を指さしながら叫んだ。『五つも外の帆があそこに並んで……ね、ほら。』

『あゝ。見える見える。』

『五つも、ね。』

『あゝ、五つ。』

『まだよ、まだよ、あそこにもほら。また外の列が……まあ澤山ねえ。』

小さい船の様に赤い澤山な帆が、海の涯に見えて來たが、動きもしなかつた。

『風が變つてよ。如何もさうらしいわ。だつて波があんなにさわわして來たんですもの。』

俄かに吹き出した軟風はアカシアの木立を騒がした。すると、幾片かの花瓣がこと切れた蝶の様に落ちて來た。間もなく周圍は又もとの通りひつそりとして、岸邊に寄せる波のさわめきが聞えて來た。

『あれ聞えて。』と彼女は立上つてじつと耳を傾けたが、『おや又波が來ちやつたわ。』とじれつたさ

うにいつた。

暫くして一種の奇妙な銀の様な響が、左右の突端に挟まれた入江の中から聞えてきた。

『聞えて。』ときいた聲は低かつたが、さも嬉しさうであつた。シオルジオは、女の動作も身振も舉動も言葉迄も一つ残さず注意して眺めてゐたので、それ以外の事には關つてゐなかつた。唯、女が見せる色々な表情は、いひ知れぬ力強さを以て、男の心を捕へるものだと思つた。何といつたつて此の女と自分との間には肉體的な紐がある。器官に於て結び附けられて居る。けれど、もかうした確かな結合が、如何して先刻浮んだ憎惡の念と調和する事が出来るだらうかと思つた。

『あれ何でせう。』原因の分らぬ突然起つた物音を聞いて女は驚いた。『聞えなくつて。』

何か打つ様な鈍い音であつた。それがばたばたと續いて鳴つた。近くから來るのか、遠くから不思議な音であつた。

『貴郎聞えなくつて。』

『遠くで雷が鳴るんだらう。』

『さうぢやないでせう……。』

『でも。そいぢや何處さ。』

二人は變な氣持で其處此處を見廻した。海の霧の晴れるに従つて、次第に色を變へて行つた。

『あら帆だわ、ばた／＼いつてたのは。あそこの白帆よ。』さう叫んだイッポリタは、自分が先に原因を捜し出したので嬉しがった。『ね、風を孕んでるわ。ほら音がするでせう。』

二

女は暫らくへとへとに參つてゐるかと思ふと、急に氣がいら／＼し出して何處かへさすらつて行きたいとか、太陽の眞下へと出掛けてみたいとか、磯ばたから其處等の野原をさまよつて知らぬ小路を辿つてみたいとか、いふ様な氣持になつて、男を誘つた。

ある日岡に登るといつて赤い花の咲いてゐる、生垣に沿つて小路を歩いて行つた。其邊には又五つの花弁を持つた香りの高い眞白な大輪の花が、如何にも優しく開いてゐた。生垣の一方には麥の穂が波の様に動いてゐた。

どんな物も注意深いイッポリタの眼から洩れなかつた。見附け次第に身體を屈めては、細長い莖の先端に附いた綿毛の毬を吹き飛ばしたり、すぐ又立止つては、下の花から上の枝へ眼に見えぬ糸をたどつて上つて行く蜘蛛の子を眺め入つたりした。岡の上の日常りの好い廣場の中にはもうひからびた亞麻の畑が少しばかりあつた。黄色い莖の先端に小さい金色の球がくつゝいてゐて、そのふわふわした感じが、一面の金の細工物でも見る様に思はれた。金雀兒はもう花が散り

かけてゐた。少し離れた處に白い泡の様な物が總になつて垂れてゐて、そこに黒やオレンジ色の大きな青蟲が匍ひ廻つてゐた。イッポリタはその中の毬に赤い筋の入つた奴を一匹掴んでそつと掌へのせた。

『花よりこの方がよつほど綺麗だわ。』

ジョルジオと違つて、彼女には昆蟲を嫌がる天性が缺けてゐるらしかつた。

『棄てちやいなよ。お願だから。』

すると晴やかに女は笑つて、手を伸ばしてその昆蟲を男の頸筋へ持つて行きさうにした。男はきやつと叫んで飛び退つたので、一層女は笑ひぬいた。

『貴郎は男らしい方ですねえ。』

尙もいぢめてやらうと、ごつごつした山路を分け入つて、櫛の樹の中へと男を追ひ込んだ。きやつきやつといふ騒ぎに驚いたのか、灰色した石の間から、雀の群が飛び立つた。

『あら、あら、貴郎羊がびつくりしてゐるわ。』

驚かされた羊の群が亂れた。その後からは青ざめた襦袢を着た女がとほ／＼と坂を上つてついて來た。

『もう大丈夫、何も持つちやゐないでせう。ほらね。』叫びつて逃げる男に両手をさげてみせた。

『あの啞者<sup>おどろ</sup>の手傳ひをしてやりませうね。』といつて、柳を擦つてこしらへた長い手綱を、襤褸を着た女と一緒に握つた。そして兩足を踏ん張つて抵抗してみたが、息が切れさうになつて顔色が變つた。さうした激しい動作をしてゐる女は非常に美しかった。

『來て頂戴な、貴郎もね。』かうジョルジオに呼びかけて、その無邪氣な子供らしい喜びを共に分かたうとした。羊は金雀兒<sup>たにしだ</sup>の茂みで止つた。皆で六頭、三頭が黒、三頭が白、何れも柔い頸の周圍に柳の綱をつけて居た。イッボリタが小使を呉れてやると、羊飼の女は錢に接吻した。

『あゝくたびれたわ。ちつと休んで行きませうね。』そこで二人は腰を下した。すると男がいつた。『おい、あすこのあの畑を御覽よ。もう大方花が散つて了つたけれど。あれさ。お前が來るといふ日に、路へ撒く金雀兒<sup>たにしだ</sup>の花を籠に一杯摘みに行つたのはあすこなんだよ。あの日の事を覚えてるか。』

女は、つこり笑つて男の片手をしつかり、兩手に押し付け、片頬を戀人の肩にもたせ掛けた。

『貴郎今幸福に思はなくつて。』とイッボリタが囁いた。

ジョルジオは考へ込んでゐた。『もう二週間も經つのに俺には何等の變化も起つて來ない。何時も相變らず煩悶と不安と不満ばかりだ。如何すれば此の刹那々々を楽しんで行けるだらう。女は全く以前の様な女ではなくなつた。如何してあんなに早く健康を恢復するのか信じられない位だ。』

だ。かうした無爲で自由で無頓著な、肉體的な快樂だけの生活が、最も彼女に適してると見える今迄にまだ一度も、眞面目な靈の祕密を語るやうな言葉が彼女の口から洩れた事はない。かうして歡樂以上に生きようとはちつとも思つてゐないかの様に、ひたすら自分と俺との官能を鋭くし念入りにする事許り考へてゐる。』

『貴郎何考へてるのよ。』

『何つて。俺はたゞ嬉しいんだ。』

『出掛けませうか、貴郎。』

二人は立上つた。女は顔を寄せて音のする程男の口を吸つた。それからちよこちよこ走つて行つて、傾斜を駆け下りたり、バイオレットの花を摘んで吸つたりした。

『蜜なのよ、嘗めて御覽なさいな。』さういつて今度は男の唇に押し附けた。

『花が咲いてゐるし、蜜蜂があんなに飛んでるんですから、きつと此の邊に蜂の巢でもあるんだわ。』女は續いていつた。『近い中に一遍朝早く、貴郎がまだ起きていらつしやらない内に、捜しに出かけて來たいわ。蜜を持つて行つてあげませうね。』彼女は此の冒險を空想しながら、その物語を長々とした。

森林地の縁<sup>へり</sup>を半ば來た時に、海が與へる憂鬱に引き入られて、二人は立ち止つた。近く又遠く

鳥の啼りが聞えて来る。一頭の牡牛が唸つた。續いて羊が鳴いたと思つたら、赤ん坊の泣き聲も聞える。これらすべての物音が一時鎮まつて、迹には唯赤ん坊の泣き聲だけが残つた。その泣き聲はどつちかといへば透き通つた、おとなしい何時迄も止まない聲であつた。

『聞えて。』とイッポリタが低くいつた。『妾ね、あの子供知つてよよ。』  
『知つてるのか。』

『ええ。あれはね、人喰鬼に吸ひ附かれた赤ん坊ですつて。』さういつた女は笑はなかつた。『向うのあばら屋に居るのですつて。カンヂアがさういつてよ。』

暫らくイッポリタは死なねばならぬ子供を心に思ひ浮べて、尙いつた。『訪ねて見てやらうぢやありませんか。遠くもないんですから。』

ジョルジオは嫌であつた。

『ね、さうしませう。』とイッポリタは好奇心にかられていつた。『直くそこなのよ。あの松の木の下のあばら屋なの。妾道を知つてるわ。』

『そいぢや行かう。』

女は先に立つて眞直に傾斜を下りてずんずん急いだ。二人は黙つてゐた。

香りの高いオレンジの木立を潛つて、地に散り敷いた花を踏みながら歩いて行つた。訪ねて行

く小屋の近所のある家の入口に、よく太つた女が一人坐つてゐた。

『奥様何處へ行らつしやるんですかね。』と腰も上げずにかうきいた。

『鬼に憑かれたつて兒を訪ねて見ようと思つてるのよ。』

『何になるもんですか。それよか此處へ休んでよもいらした方が、どの位いゝか分かりませんよ。餓鬼なら私んとこにもうんとゐます。これ御覽なすつて下さい。』

三四人裸體で、而も水膨れの様に膨れた腹をした子供が、何かぶつぶついひながら、地面を匍ひ廻つて、どんなものでも手當り次第口へ持つて行つた。両手で抱へてゐる五番目の乳呑兒を見ると、全身茶色の疹瘡が出来てゐてその中から、青く透き通つた大きな眼が、不思議な花の様にばつちりと開いてゐた。

『此の通り澤山居りますんで。それに此の餓鬼が患ひまして。少し位休んでいらつしつて下さいませ。』さういつて笑ひ掛けた眼附には、客の恵みを乞ふ様な色があつた。

『あんな所へ行つたつて何になるもんですか。』と繰返して、病み悩む赤ん坊を見せていつた。  
『此奴がこんな悪いんです。』

それは、『それ程同情が施したければ、同情してやつていゝ者が眼の前にはゐるではないか。』とでもいふ様な風であつた。

『病氣は何といふんだ。』とジョルジオが尋ねた。  
 『え、旦那様、誰がそんな事を知つてゐるもんですかね。』と太つた女はすましていつた。『神様がお望みになることですもん。』

イッポリタはその女にいくらかの金をやつた。そして二人は目的の家を指して出掛けたが、周囲には、そのほの暗い戸口から洩れてくる一種の悪臭が、むかむかする程漂つてゐた。二人の近寄ると共に、囁く聲が病兒を圍んだ女達の間を傳つた。

『いゝお方が來たぞ。カンヂアのお客だらう。』

『いらつしやいませ、いらつしやいませ。』

さういひながら女達は路を開けて客を待たつた。その中で一人の皺くちやな老婆が、凹んだ白い眼を見せながら、イッポリタの腕に手をかけていつた。

『御覽下さい奥様。鬼めが此の兒の生血を吸つて居るんで御座います。可哀さうなもので御座います。鬼めが寄つてたかつてこんな事にしてしまひました。どうぞ旦那様のお子様達御無事でゐて下さいますやうに。』それから附け加へていつた。

『どうぞ奥様。十字を畫いてやつて下さいまし。』

イッポリタは十字架のしるしを書いて連の方を見た。扉の外で女達が見世物でもみる様に圓く

立ち圍つて、絶えずまぢなひの様な眞似をしてゐた。赤ん坊の寝かしてある搖籃は、荒削りの椀板で出来てゐて見様によつては恰も蓋のない棺とも見られない事もなかつた。哀れな者は裸の儘病み窶れて青くなつて、泣き續けては、弱り果てた骨と皮ばかりの手足を顔はせて、偏へに救ひを求めてゐる。母親は搖籃の傍に坐つて、殆ど膝に觸れむばかりに頭を垂れて、何物も聞えないといふ様子をしてゐたが、時々機械的に搖籃へ手をかけて揺つた。その時には、聖母像だの護符だの御遺物など、隙間もなく搖籃に載せてある物が、皆がさがたと音を立てた。

『リベラアタや。リベラアタ。』と一人の女が母親を揺つて大聲でいつた。『これ、リベラアタ。奥様だよ。奥様がお前ん處へおいでになられたのだ。これ。』

母親は靜かに首を上げ、きよろりとした顔で四邊を見廻して、それから痛ましげに客の方を見た。

『物をいはないのかい。これ。』と又一人の女が母親を揺つていつた。『何とかいへばいゝぢやないか。奥様にお願ひして、奇蹟を授かりにマドンナへ連れてつてお貰ひよ。』

すると他の女達も皆イッポリタを取捲いて哀願した。赤ん坊は又一きは激しく泣き立てた。

『いゝよ。』と物言はぬ母親に見つめられるのが嫌になつてイッポリタが呟いた。『いゝよ、いゝよそれぢや連れてつてあけるわ。明日それぢや……。』

『明日はいけませんよ、土曜がいまぢや御座いませんか。』  
『土曜なら宵宮だ。』

『大蠟燭を買つてやつて下さいまし。』

『聞いているのかい、リベラアタ、これ奥様がマドンナへ連れてつて下さるんだとよ。』

『もう啞になつたんですね。三日といふ間何とも口をきかないんですよ。』

かうがやがやと女達の騒ぐ中を、子供はだんく聲高に泣き出した。

『それ又あんなに喚いてる。』

『何時も夕方が一番酷いんですよ。』

『もう追つゝけ来るでせうよ。』

『奥様、十字を書いて下さいまし。』

『ひどく暗くなつて来たな。』

『今鳴るのは鐘ぢやないかね。』

『さうぢやないよ。此處へは聞えない筈だよ。』

『だつて妾や聞いたよ。』

『妾も聞いた。』

『マリアを讚美し奉る。』

一齊に口を噤んで、十字架のしるしを書き、そして禮拜した。音響の波は遠くの方から微かに聞えて来た様であつた。イッポリタも首を垂れて、熱心に祈禱した。

『あれあの扉口の處を見なさい。何だか知れない物が見えるぢやないか。』と一人の女が傍の女に囁いた。ジョルジオは氣が變になつて、薄氣味わるさうにその方を振り返つた。戸口は一面に黒い影がかゝつてゐた。

『ほんとにね。何だか知れないけれど……』といはれた女はぎよつとした様にいつた。

『何だらう、ありや。』と又一人口を入れた。

『何だらう。』と又別の女がきいた。

急に好奇心と恐怖が群集を襲つて、誰も彼も戸口の方を眺めた。

『何だい。何が見えるつて。』かうジョルジオは高い聲でいつて、戸口へと出て行つた。

『あれは鎌だ。』と彼がいつた。

本當にそれは壁につるした大きな鎌であつた。

『まあ、鎌なの……』

すると又てんでにいひ出した。

「リベラアタ。お前氣が違つたのかい。」  
 「すつかり暗くなつたな。皆行かうかね。」  
 「もう泣き止んだ。寝入つたのかい。」  
 「搖籃ゆりかごをしまふ方がいよ。お前は妾達の聲が聞えるのかい。リベラアタ。」  
 「氣が違つてるんだね。うんともすんともいはないねえ。」  
 「そんなら妾達はもう行くよ。左様なら。」  
 「本當にまあ可哀さうなもんだ。寝入つたのかね。」  
 「ぐつすりだね。……あれでは苦しい事も知るまいよ。」  
 「我等の主耶蘇イエス彼を救ひ給へ、主よ赦し給へ。」  
 「左様なら。」  
 「左様ならよ。」

## 三

犬は橄欖の下で連りに吠えてゐた。その間にジョルジオとイッポリタとは、カンチアの家の方へ小路を辿つて歸つて來た。犬は家のお客と見るや否や、聲を鎮めて喜んで飛び附き來た。

「まあ、ジョアルヂイノよ。」とイッポリタは叫んだ。そして此頃中すつかり友達になつて了つた動物をいとしんで、體を屈めて撫で廻はした。『どんなに私達を呼んでゐるでせう、遅くなつちやつたんですもの……。』

月は静かな大空にそろ／＼と上つて行つた。すべての野の聲は、その穩かな光の下に鎮つた。

ジョルジオはイッポリタを引留めてかういつた。

「一寸お待ちよ。」そしてじつと耳を澄ました。

「何聞いてゐらつしやるの。」

「何だかかう……。」

そこで二人は橄欖に遮られた小屋の方を振返つた。けれども聞えるものと言つては、ざあつざあつと打返す海の音ばかりであつた。

「あの子は死んだと思ふが、如何だい。」と彼は思つてるまゝにきいた。『もう泣かなくなつたね。』

「本當ねえ。で青郎は死んだと思つて。」

ジョルジオは何とも答へない。その儘二人は銀色の橄欖の樹蔭を歩み續けた。

「お前あの母親といふのをよく見たか。」

「えゝもう、澤山ですわ。」



『お前は如何だつたか知らないが、あの時俺が室の中へ入つて行くと、扉の裏手の地面に、何か動物の死骸の様なものがあつて、……腐れ掛つてでもゐる様に……何ともいへない臭ひ匂がして……』

『何だと思ひなの。』

『多分猫か犬だな。はつきりとは分らなかつたけれどね。』

『ほんとを。それ。』

『本當さ。死骸が一つ確かにあつたよ。』

『ぢや何なんでせう。』

『それが分らないんだ。』

犬は一聲吠えて注意を與へた。二人は歸つた。カンヂアは待ち兼ねて、もう櫛の樹の下にちやんと食卓を支度してゐた。

『まあ、奥様、何てごゆつくりなんで御座いませう。』男女が食卓に着くと、愛想のいゝ主婦が、にこにこしながらいつた。『何處へ行つてらしたたので御座います。リベラアタ・マンネルラの子供を訪ねていらしたたのでせう。』耶蘇我等を護り給へ。『御覽になりました。どんな事を致してもあの子は快くならないのです。あれで親爺も母親も、出来るだけ手を盡したので御座いますけれ

ど。』

カンヂアの話では、治療といふ治療、まじなひといふまじなひはすべてし盡したものでらしい。遂に絶望した親父は、最後に或る巫女の勧めで、犬を一匹殺して、それを扉の裏手に置いた。かうして置けば、鬼は此の動物の毛の数を一本一本算へ切つて了つてでなければ、中へは入る事が出来ないといふのである。

『聞いたか。』とジョルジオはイッポリタにいつた。二人は物も喰へなかつた。

『耶蘇我等を護り給へ。』とカンヂアは、自分の手で孕んだ腹を撫で廻して附加へた。『ちつとも召上らないでは御座いせんか。可哀さうと思召して、御氣分がお悪いので御座いませう。おや旦那様迄が同じ様に。奥様御覽遊ばせ。』

『あんな風に死ぬ人が澤山ゐるの。』とイッポリタがきいた。

『左様で御座います。此の邊は大體よく御座いませぬのです。不吉なものが其處等にうようよ致して居りまして、逆も安心はして居られませぬ。』耶蘇我等を護り給へ。『それから食卓の上の皿を指して、『此のお魚を御覽遊ばせ。皆是はトラボッコオから參るので御座いますが、それを捕るのがツルキイノと申しまして……。』といひかけて一段聲を落していふ。』お話申しませうか。彼は一箇年になりませうが、此のツルキイノの一家の者は皆鬼にとりつかれました、唯今でもおちな

いで御座いますよ。』

『ツルキイノてえのは、トラボッコオの漁夫なのかい。』とジョルジオがいつた。

『左様で御座います。向うを御覽遊ばせ。いゝお眼ですと此處からでも見えますです。今晚は月がいゝから漁に出て居りませう。』

カンヂアはさういひながら黒い岩の上の大きな漁具を指さした。折から干潮で岩が現れてくるに従つて、藻の香りが盛んに海の方から匂つて來た。イッポリタは酔はされたやうにその香りを吸つて低くいつた。

『あゝ、何ともいへない匂だわ。貴郎感じなくつて。えゝ。』

男はなほカンヂアの言葉を聞き洩らすまいとした。海に展開された沈黙の劇詩を想像してゐたのである。

『如何も此の土地がよく御座いませぬのです。』とカンヂアは首を振つて繰返した。『でもカッベルの救主が來て、土地の淨めをして下さる筈で御座いますが……。』

『なに救主がかい。』

『お父つあん。』カンヂアは家の方へ聲高くいつた。『救主は何時頃見えるんでしたつけ。』

『直きだ。』と老父は鬨の處に現れて答へた。

『直きだ。もう間もないんだらう。』

老父は物語がしたさうに食卓へ近寄つて、微笑を作つて客を見た。『且那は御存じないんですね。』

『シムブリチオの事ぢやないか。』とジョルジオは思ひ出していつた。

『いやさうで御座いませぬ。セムブリならもう此の世の人ぢやありませんよ。今度のはカッベルのオレステ様と申す新しい救主で御座んすよ。』といつて片眼の老人は調子づいて、田舎人の間に信じられた新しい傳説を語つた。オレステはカッブチノオ僧であつた。スルモオナのシムブリチオについて、昇る太陽の面おもてに未來の相を讀む術を學んだ。それから四方を流れ渡つた。羅馬に行つて法皇と言葉を交へた。或る國ではその王とも話して來た。故郷のカッブルレに歸つてからは七年間墓地で骸骨と同居して、晝も夜も自ら己を鞭つた。法區の教會で説教した時は、罪の子等の涙と叫びを絞らせた。それから再び故郷を出て、諸方の殿堂を巡禮し初めた。何十日間も、吹雪の中を冠り物も冠らず、一番高い山の絶頂を極めた事もあつた。彼は又コルシカの島で、自ら使徒となつて伊太利亞全國を遍歴し、自分の血であらゆる都市の門に、處女の聖名みかを書き附ける決心を立てた。最後には、故郷へ歸つて來て、新救世主といふ名を取つた。丁度此の頃は田舎を巡禮して廻つてゐる所であつた。緋の衣に青い袈裟をかけて、長い髪を兩方の肩に垂れ

て、ナザレ人の様な髻をはやしてゐた。數多の使徒が彼に續いた。奇蹟は教へ切れな程あつた。單に拇指食指中指一本を空中に擧げるだけで憑かれた者を癒し、病人を全快させ、死人を甦へらせた。彼の處へ見て貰ひに行く者があると、その者に口をきかせない間に、直ぐに縁者の者の名を言ひ當て、家の祕密迄あばいてみせた。亡靈の消息をも彼は語つた。

『耶穌の再來で御座んすよ。』深い信仰を聲に迄見せて、コラがいつた。『何でも此の邊をお通りになるでせう。』

『それで今何處にゐるんだ。』ジオルジオは老人の信仰に尊敬を拂つて重々しくきいた。

『ピオムバに居りますだ。』といつてオルトナと反對の方の遠い海邊を指さした。『ピオムバでは旦那様たつた一言おつしやつたら、軌道を駛つてた汽車がびたりと止つたんですと。俾が其處を見たんです。ヴァイトがさういつたつけなあ、カンヂア。』

カンヂアはその話を保證して、救世主が緋の衣をまとつて、汽車にぶつゝかる積りで二本の軌道の間を平氣で近づいて行つた事を附け加へた。

『あら。』急にイツボリタがジオルジオの腕を引張つた。『何か聞えなくつて。』

彼女は立つてアカシアの下の胸壁の處迄行つた。ジオルジオはその後に續いた。二人で耳を澄ました。

『あれはカサルボルチイノのマドンナへ參詣する行列でございますよ。』とカンヂアがいつた。靜かな月光の下に緩やかな、單調な禮讚の唱歌のリズムが廣がつた。男聲と女聲とが同じ間を置いては交る交る聞えた。行列はリズムの緩やかなのと反對に、非常に早く近寄つて來た。その中にもう先頭の者は路の曲り角に姿を見せて、トラボッコオの橋の手前迄着いた。

『あら。』とイツボリタは物珍しさうにいつた。

『まああんなに澤山の人が。』

巡禮は一團になつて進む。それは丁度何か偉大な力が、無意識の間に彼等を目的物の方へ押し行つてゐる様であつた。彼等は重い聲音と家畜の様な酸っぱい臭とをさせて進んだ。互ひ互ひに重なり合つて、その隙間からは十字架に擬へた長い竿の外に何物もはみ出す事が出来なかつた。男が先に女が後に、白い鉢巻の下から金具をびかびかさせて行く。歌が繰返しになる度毎に激しい叫び聲が起つた。と思ふうちに段々と元氣をなくして疲勞を見せた。歌ひ出しは、男女兩組の中から一番張りのある一人の聲で始まるのが例の様であつた。それは特に優れた信仰と、特に偉い精神とを示すものであつた。ジオルジオは此の聲に耳を立てた。すると、それが彼の心に不思議な感情を起させた——彼の生れて來た部族の大群集の底を貫いて神祕な力が通つてゐる。

行列は濱邊のカアブの向うへ消えて行つた。廳で再び月光を浴びて突端の頂に現れた。そして

又消えた。と讚美歌は遠い夜を通して、何かで包まれた様に弱くなり、遂には静かな海の、緩やかな單調な音にすら打消される位微かになつて了つた。

「アカシアの幹に肩をもたせて胸壁に座を占めたイッポリタは、男が神秘的な物思ひに耽つてゐるのを妨げようとせず、じつとした儘黙つてゐた。彼女の氣高い美の三要件である額、眼、口は此の時位力強く見えた事はなかつた。それは不滅な女性の幻惑を現してゐた。氣のせるか此の朗かな夜は、氣高い女の姿を一層神々しく見せ、戀人をして肉眼でない心の眼で、女のすべてを見通させるといふ様に思はれた。やはりかうじつとした姿勢で、涼廊の上から死んだ様な海の白帆を眺めて我を忘れて居たのは、これと同じ女ではなかつたか。そして今や夜の力が彼女から現實的な野獸性を剥ぎとつたにも關らず、彼女に對する感情の中には何時もの様な憎惡の念が、依然として潛んでゐた。此の如何しやうもない兩性間の憎惡の念が戀の底流を成して、始終或は隠れ或は現れて、すべての事件の動機を造るのだ。」だから彼女は俺の仇敵なのだ。如何して自分の本質を取返せやう。俺といふものが殆ど此の女の手握られて居るのだから。新世界だの新生だのといつたつて結局駄目な話だ。復活の爲勝利の爲といふなら、如何しても俺は戀から解放され、仇敵から自由にならなければならぬ。」そして又しても彼は、死んだ彼女を想像して見た。「死んでこそ此の女は純粹に靈的な理想の對像となる事が出来るだらう。不完全な生活と放逸な肉體と

から解脱してこそ、完全な固定した生活に入られるのだ。獲得せんが爲の破壊。戀の中に絶對を求めんと欲する者にとつては、實にこれより外の道はない。」

イッポリタは突然がばつと飛び上つた。そして世間並の迷信からとでもいふ風に、

「あら死が通つて行くわ。」

といつて微笑んだ。が戀人は然ういふ不思議な偶然の符合にぎよつとして、我知らずふるふる顫へずに居られなかつた。「彼女は俺の考へてる事を感じくものとみえる。」

その時犬が激しく吠え立てたので二人は一時に立止つた。イッポリタが不安さうにいふ。

「誰でせう。」

犬は路の外れの橄欖の林の方へ、聲を限りに吠え立てる。カンヂアと親爺は家から出て來た。

「誰でせう。」と又イッポリタがいふ。

「はて誰だらうな。」老爺は影を見てかういつた。

誰だか人の聲、しかも悲しげに願ふ様な啜り泣きが、橄欖の中から聞えてきた。續いて黒い人影が一つ現れたと思ふと、眼ざとくカンヂアが見附けて叫んだ。

「リベラアタ。」

母親は栗色の布で包んだ搖籃を頭の上に擔いで、眞直に傍目も振らず歩いて來た。それは無我

夢中で何か知らぬ目的へ向つて突き進んで行く不気味な夢遊病者の様であつた。その後から、是も氣を失つて、泣いたり頼んだり、女の名を呼んだりして、一人の男がついて來た。

『リベラアタ、リベラアタ。これ〜。家へ歸れよ。あゝ何て情ないことだ。お前は何處へ行くつもりだ、リベラアタ、これ〜。』

彼は懸命に、女を捕へよう、引留めようとしたが、如何しても女に追附く事は出来なかつた。カンヂヤはその女を見ても止めにも出て行かず、唯その男に向つていつた。

『何だね、ジウゼツペ。如何したのさ。』

男は一種の身振で、女が發狂してゐるといふ意味を知らせた。

『駄目だつたのかい。』とカンヂヤはくるんだ搖籃を指さして又きいた。男は一層激しく啜り泣いた。

『リベラアタ。』カンヂヤは無神経な者を呼び醒すといふ様に、咽喉から出る丈の聲で叫んだ。『リベラアタ。何處へ行くんだよ。』

後はひつそりとなつて皆は見まもつた。母親は傍目もふらず先へ先へと進んで行く。頭の上には棺と變つた搖籃がゆらゆらしてゐる。男は泣きながらついて行つた。

かうして不幸な夫婦は、庭をはずかひに通つて行つた。憐憫と恐怖に胸が一杯になつた戀人同

志はその後姿を見送つた。

#### 四

今度はイツボリタよりジョルジオの方が、長い野遊びや、長い探險を言ひ出す様になつて來た。永久の生に對する期待を懷いた彼は、實際の自然の中にそれを見出す事が出来ると思つた。今迄長い事外界の刺戟に眼もくれなかつた、心深く根を下した甚だしい冷淡を拂ひ落さうとも試みた。全力を集中して、彼自身と周圍の自然との間に、生きた類似を見出す事に取掛り、それで従順な自然の子となつて、永久の信を献けようとも思つた。

ところが、戀人のまだ來ない前、此の隠れ家に泊つた初めの時分に、幾度となく高調し、感激した様な、そんな力強い情緒は起つて來なかつた。初めて散歩した時の憂鬱な魅力も、あの五月の曉に、ファエツタの歌つた唄と、露の光つた金雀兒えんじだの匂とに覺えた清い喜び、皆呼び返す事は出来なかつた。陸にも海にも色々の人が悲惨な——影を投げてゐた。貧苦、疾病、狂氣、恐怖、死、——然うしたものが、彼の行く先行く先に待伏せするか、居並ぶかした。晝といはず夜といはず、近くからも遠くからも、禮讚らいさんの唱歌が同じ様な節で果てしもなく響き合つた。救世主は待ち受けられてゐる。彼の周圍のあらゆる生物は、信仰の爲に聖化された。基督教の口碑は、樹の

幹に匂ひまつはり、茂つた枝の間に花を開いた。パリサイ人に追はれて避難した聖母の膝の上で、幼な子の耶穌は満ち溢れる小麦に變つた。粉箱の中に匿れた耶穌は、捏粉を膨ませて涯なく焼き立てた。かさ／＼と刺立つたは、うちは豆が、處女の柔かな足を突き刺したといふので呪はれてゐた。併し亞麻が祝福を受ける譯は、その殻がパリサイ人の眼を眩ましたといふのであつた。かうして有らゆる生物を包んで、別の世の表章とその面を變へさせた此の神祕から、彼は幻惑を受けずに居られなかつた。此の暗示は、彼に特有な神祕的な、傾向を一切合切呼び覺ましたそして獨り言をいつた。『嗚呼若し俺に眞の信仰があればなあ。あの聖テレエザをして聖餅の中にまざり、と神を認めしめた様な信仰があるならば。』そして此の事は曖昧な一時の希望でなく、深く強い心願であると共に、彼の身を切々に打ち悩ます大きな煩悶でもあつた。それは自分の不幸と弱點との原因が此處にある事を知つてゐたからである。デメトリオ・アウリスバの様に、ジョルジオも亦神を持たぬ隠者であつた。そこで又叔父の姿が現れて來た。デメトリオこそ彼の本當の父であつた。二人とも全く聰明な、敏感な人間であつて、アウリスバ家の神祕な遺傳を受けてゐた。二人とも宗教心を持ち、神祕を好んで、象徴の林、象徴の天に住むだけの資格があつた。二人とも羅旬教會の儀典、聖樂、薰香その他すべて激しいデリケートな禮拜の逸樂を慕つた。併し彼等は信仰を失つた。彼等の跪いた祭壇には神が去つて居たのである。彼等の不幸は精神上的の

要求から來た。執拗な懷疑心に邪魔されて、此の要求は花を咲き實を結んで神聖なる懷に安らふ事が出来なかつた。彼等は凡俗との戦ひに堪へるだけの覺悟をしなかつた爲に、隱遁の必要を知る様になつた。孤獨は、謙虛な心、又は高大な心を證明するには此の上もないものである。何故ならば、神の爲に凡てを棄てゝ了ふか、然もなければ一つの世界の堅い根柢ともなり得る様な非常に強固な心を持つか、どちらかなくては孤獨に堪へられないからである。突然彼等の一人デメトリオは、苦痛の強さが身體の抵抗以上に及んで來たといふ事を感じたものか、死によつて一層高い生活體に移らうといふ望みを起し、神祕の海に船出した。取残されたジョルジオは、心の醒めた時に考へてみると、自分が如何しても豐滿な生活——若々しい陽氣な女が新らしくちぎつて呉れた麵麩を喰つた時に、大きな櫛の樹の下で閃光の如くに認めたデオニソスの理想——を實現する事の出来ない者だといふ事をつく／＼知つた。彼の智能や徳操は釣合を失つて居て、再び平衡と秩序とを恢復する事が出来ない事を悟つた。最後に彼自らの爲に自己を征服しようとする代りに、自ら自己を抛棄しなければならぬといふ事も感じた。そして此の境地に達する道は唯一つしかない。一つはデメトリオの例に習ふこと、一つは自己を天に獻けること。此の後者の方法に彼は釣込まれた。

そして彼は思つた。彼の血管の中にも、生粹な基督の血が流れて居なかつたらうか。隱遁の觀

念は、尊い献身者デメトリオから始め、下はジョコンダといふしみつたれた動物迄、彼の一族の枝々に通つてゐなかつたらうか。

それならば、此の觀念が再び彼に起り、上なき高さに高まつて行つて、神に對する憧憬の絶頂に達する事は出来ないだらうか。此の事を成就する準備として、すべてが彼に備はつてゐた觀照の態度、象徴と譬喩に對する興味、抽象の能力、視覺聽覺の暗示に對する敏感、力強い影像や幻覺に對する身體的傾向など、彼は隱者の資格を盡く持つてゐた。

けれども彼に缺けたものが唯一つある。然も重要な物ではあるが、多分それは死滅したのではなくて、一時假眠してゐるのであらう。

それは即ち信仰であつた。如何にして此の信仰を呼び覺すべきか。如何にしてこれを再生せしむべきか。小細工なんかぢや逆も出来ない。偶然の閃き、ゆくりなき震撃、それを待つてゐるより仕方はない。あのオレステの弟子の様に、野の眞中や道の曲り角で、電光に撃たれて詫言を聞くより外はあるまい。

『欲望』ジョルジオは戀人と、戀に伴ふ肉の悲哀とを思ひ出した。『誰が欲情を殺せるだらうか。』そして傳道三書の禁戒が彼の記憶に甦つた。『婦女をして汝の靈の上に力を伸べしむる事勿れ。婦女の第一の行爲は罪なりき。かくて是によりて凡ての人は死せり。汝の身より婦女を斷つべし。』

併し罪惡として見た情欲は、彼には殊に誇るべきもの、殊に刺戟あるものと思はれた。早き世の教會の殉教者達が罪待つ牢獄の裏で、我を忘れて狂氣した抱拗の陶醉に較ぶべき歡樂は、外には決して求められない。恐怖と戀とに挟まれた物狂ほしい女達が、涙に濡れた面を、接吻のまゝに打ち委せた面影が眼に浮んで來た。信仰だ、贖罪だといつて騒いだ處で、さういふ譯だから、結局は、新しい刺戟や、戦慄や、珍らしい歡樂を求めろに過ぎないのではないか。

義務に背いては謝罪を乞ひ、過失をしでかしては悔い改めの涙を流し、一寸した運命を仰山に懺悔し、有りふれた不都合を大袈裟に自白し、傷ついた靈と肉とを始終慰み深い醫者の手に委せる。かういふ事はすべて純粹な感覺の魅惑ではあるまいか。

ずつと先刻から彼の情緒は、バイオレットと敬虔な香の匂に薫つてゐた。そしてあのベルシアナ街の世間離れのした會堂での戀の主顯節が思ひ出された。それに續いてオルヴィエトの夢も思ひ出された。荒れ果てたそのグェルフオの市街の面影が再び浮んで來た。そして恍惚とし、一途に陰鬱と沈黙と孤獨とを慕はしく思つた。此の隠れ家ではそれは果ない花が咲くばかりであつた。特にちつほけな思想、時に淫らな歡樂の榮える場所である。かうした場所に落ちてくる、まぶしい白光は明る過ぎ過ぎて、彼にとつては憎らしくてならなかつた。丁度咽喉の渴いた人がちよろちよろ流れる小川を思ひ出して吸ひ附けられる様に慕ふと同様に、彼も亦或る羅馬風

の寺院の本堂に見られる、ひやひやとした、沈みきつた物影を心に描いて悶えさせられた。人を呼ぶ鐘の音は、此の隠れ家へは聞えて来なかつた。たとひ聞える事があつても、たまに軽い微風か何かに送られて来るだけだつた。盛り場の教會堂といつても、大分遠く離れてゐる許りでなく、大概は俗っぽい、由緒も美觀も無さうなものであつた。ジオルジオは手近な處に相當な隠れ家がもう一つほしくなつたのである。ルカ・シニオレルリのダンテの幻想を閉ぢ籠めてゐる、あの大理石の深い甕の中での様に、彼の神祕主義が美しい花を開くに足る様な、然ういふ隠れ家がほしくなつた。ふと彼は、ずつと若い時分デメトリオと連れだつて參詣した事のある、カザウリアの聖クレメンテの修道院を思ひ出した。その修道院は本流の河の中の島の上に築かれて、俗世間と宗教上の權威を握つてゐて、幾世紀間の大なる生命の中心として、アブルッチ一帶に光りを擅まにした處である。その邊の眺望には尙その始めの頃の清淨さが漂つてゐる事を感じずにはゐられなかつた。デメトリオの言葉を借りていへば、レオナルドの描いた様に、荒れさびれた岩石を背景として一人の妖艶な女の片頬笑む畫の上に漂ふ神祕な感じに似た何物かある様に思はれた。ジオルジオはもう一度其處の廟堂へ行つて住んでみたいとも思つた。

ある日彼はイツボリタに向つていつた。

『宿を變へて見ようぢやないか。オルヴィエトオの夢はまだ醒めないだらうね。』

『忘れませんとも。』女は叫んだ。『あの妾を連れてつて下さる筈だつた、お寺ばかりの市街でせう。』

『お前をその荒れ果てた修道院へ連れてつてみたいもんだな。此處よりはもつともつと、ずうつと淋しいけれど、本山程立派なところだよ。遠い昔からの遺物がうんとあるし、白い大理石の大燭臺や、名の知れない藝術家の手で出来た花細工なんと來た日にやそれや大したものさ。大燭臺の上につつて、お前の顔の光輝でもつて、じいつとかう俺の心の底の物思ひを照らし出すといつた工合は如何だね。』

心に呼び起された美しい物の姿を思ひやりながら、自分の言葉の詩味を帯びた事を笑つた。すると相手はあどけない利己心と、女性の心底に横はる粘り強い野獸性とから、かういふ利己心に消え失せる詩程嬉しく酔はされるものは又となかつた。戀人の眼に理想化されて映るといふ事丈でも、彼女の幸福であつたのである。そしてさも清淨らしい聲をしていつた。

『何時出掛けるの。』

『明日ぢや如何だ。』

『明日。いゝわ。』

『でも氣をつけなくつちやいけないぜ。あの上へ昇らと、逆も降りられやしないから。』



「いゝわ妾。じつと青郎の顔を見つめてゝやるから。」  
 「じりじりつて燃えちやうよ。蠟燭と一緒に粉微塵になつちまふぜ。」  
 「その燈で青郎を照らして上げてよ。」  
 「ついでに俺の葬式もだらう。」

かう彼のいつた調子は軽かつたが、胸の奥では、何時もの想像に耽り易い癖で、奇態な作り話を考へてゐた。イッポリタはじつと耳を澄ましてゐたが、  
 「ね、聞えて。また行列よ。明日は宵宮ね。」

朝も晝も夕方も晩も讚美歌は響き渡つた。行列又行列と、太陽の下にも、月の下にも續き續きした。何れも何れも同じ目的の方へ雪崩れて行つて、同じ名を讚美した。皆同じ情熱に激しく引摺られて一步も休まずに、苦痛の靈藥や希望の約束のある處へと向つて、如何なる障壁をも突き破る勢で、病人や死人を道ばたへ棄てゝ行くのを見ると、物凄くもあり淺ましくもあつた。彼等は息もつかずに前へ前へと進んで行つた。何でもない幻影一つが此の大きな人肉の塊を動かしたり、牽きついたりするには、どれ程の力が出なければならぬだらうか。殆ど四世紀も前の話だが、七十歳にも餘る一人の老爺が、雹に荒らされた野の木立の梢に、處女マリアの姿を認めたのであつた。

それから毎年その現れた日になると、山の人も海岸の人も、一齊に災難を拂つて貰ひに、聖地の方へ巡禮に出掛ける様になつたのである。イッポリタは此の話をカンヂアの口から聞いて知つてゐた。そして二三日前からそれとなく、自分も一度其處へ参拜したい氣になつてゐた。

『それ迄にカサルボルヂイノへも行つて見ちや如何なの。明日丁度宵宮だから行つて見ませうよ。ね、あつといふ様な事がきつとあるわ。爺やお伴に連れて、ね。』

ジオルジオは同意した。イッポリタの希望は彼のそれと合致した。

『明日立つことにしよう。』近寄る唄聲を耳にして、一種の不安を感じながらかう彼が附け加へた。イッポリタはカンヂアから聞いてゐる物語で、巡禮達が様々な恐しい苦行に身を委せるといふ事を話した。そしてぞつと身を震はせた。折から讚美歌がはつきりと聞えて來ると共に、二人の魂の上を、悲壯な風が吹き貫いた様な氣持がした。

夜二人は丘の上にある。月は中天に昇りつめてゐる。すがすがしい露が、午後の嵐に尙さわ立つてゐる鬱蒼とした林中に漲つた。木の葉の一つ一つが、じくじくとむせび泣く。その幾千萬とも數知れぬ涙の雫々に、月の光が差し込んでダイヤモンドの様な輝きを見せるので、森の姿はすっかり變つて見えた。ひよいつとジオルジオが一本の樹に突當ると、枝が揺れたと思ふ間もなく、きらきらと光つた露の玉が、イッポリタの顔の上に降り懸つて星を撒いた。彼女はつゝまじやか

に叫びを上げて、聽て笑つた。

『まあ、憎らしい人。』だしぬけに水を撒いてびつくりさせるたくらみだつたと女はとつて、怨みがましくかういつた。そして直ぐに返しを考へた。

樹木が揺られて液體の玉をはらはらと振り落してゐる中に、イッポリタのきやつきやつと笑ひさゞめく聲が、時々丘の上から聞えて來た。ジオルジオも笑つてそれに應じた。

先刻の悪夢も何處へやら、かうして子供染みた戯れに身を委せ、地上の芳香を蒸溜し盡したせいせいする夜の空氣をいやといふ程吸ひ込んだ。彼は元氣を出してまつ先に一番多く露を持つた樹の處へ駆けつけようとした。女も負けない積りで、つる／＼する傾斜を懸地にその樹の方へと駆け寄つた。二人は殆ど一緒に目的の樹に着いて、一緒にそれを揺つて、降りかゝる雨の下に互にじつと立つてゐた。薄暗くさわさわする葉影の下に、イッポリタの白い眼と白い齒が怪しくきらきらりと光つた。そしてダイヤモンドの粉の様な小さい水泡が、彼女の鬢の捲毛にも、頬にも、唇にも、睫にさへも輝いて、それが笑ふ度にびかびかときらめいた。

『ほんとに魔女みたいだよ、お前は。』ジオルジオは樹の幹をはなして、女を掴まへながらかう叫んだ。此處でも亦女は、夜の美神が放つ不可思議な光明として彼の前に現れたのである。

彼は女の顔中に接吻を浴びせた。その顔が彼の唇に觸れた時の心持は、樹から採り立ての果物

の様に、ひいやりと露に濕つてゐた。

『まあ、まあ、まあ。』

一つ／＼の接吻に力を入れて、口にも頬にも、頭にも頸にも飽く事を知らず浴びせかけて、初めて肉體を嘗めるといつた様子であつた。すると女はその接吻を浴びながら、うつとりした様子を見せた。これは何時でも、自分の戀人が心から陶醉したと知つた時に、きまつて見せる姿であつた。かうした場合には、自分の身體の奥底から、一番甘い、一番力強い戀の芳香を迸らせて、酔ひ痴れたジオルジオの息も切なくなる迄にしてはうと考へてゐるらしかつた。

『まあ。』

男は一寸止めた。苦痛が高まつて來た。感覺の極度迄行きつくして、それ以上は行けなかつた。二人は黙つてゐた。互ひに手を取交して隠れ家の方へと道を辿つた。夢中になつて競走をした爲、もと來た道が分らなくなつたので、田圃の中へ踏み込みながら歩いて行つた。今の彼等にはいひ知れぬ疲勞と哀愁があるだけであつた。ジオルジオは殆ど我を忘れてゐた。

彼に齎された此の新しい香味こそは、取留めもない幻を描いて、不安な一日を庵室に過した擧句の、新しい、本當の、深みある一種の感覺であつた。併しそれが果して人生であらうか。寧ろ夢ではなからうか。一方は常に他方の影である。生のある處には夢があり、夢のある處には生が

ある。』

『あら。』とイッポリタが驚いた様に聲を上げた。

月光を浴びた葡萄が其處にあつた。その眞直な幹は竿に捲きついて、華奢な酒神杖の様にも見えた。流れてゐる様な葉の群を背負つて、細かい神経の末々迄も透いて見えた。生無き物の如くにそよとも動かさず、警しへもない程果なく消え易い水晶や硬玉の恰好をしてゐる處は、此の世に實在する物とも見えす、周圍の物とは何の關係もない様に思はれた。強ひていへば、妖術で描き出されて、將に消えんとしてゐる譬喩の世界の一部分が、此處に最後の名残を留めてゐるとでも見られたのである。ゆくりなくもジョルジオの記憶からいゝ次の句が浮んで來た。

『わが自らのものなる葡萄園われの手にあり。』

## 五

夜の明け方からカサルボルヂイノの停車場では、着車毎に人間の大浪を吐き出した。群集は小さい町や村から、遠方の片田舎の講社に交つて徒歩の巡禮が出來なかつたり、それが嫌な時には皆かうしてやつて來た。彼等は鯨波を作つて列車から飛出し、柵の出口に押寄せて、互ひに大聲に轟き合つて、我勝ちに倚子馬車や四輪馬車に躍り込まうとする。その間に鞭の音と鈴の響が鳴

り渡る。然うかと思ふと、十字架を押立てゝ長い列を作り、埃だらけの街道へ練り出した時分には、もう讚美歌の聲が聞えるのもある。

揉み合ふ群集にたまけて了つたジョルジオとイッポリタは、皆の行つて了ふ迄と、自然足は近くの海邊へと向いて行つた。麻畑は海の青い背景を負つて靜かに波打つてゐる。澄み切つた地平線の上には、焰の様な船の帆が閃めいた。

『あんまり氣を使つて疲れやしないか。』

『心配しなくつてもいゝの。大丈夫よ恵でも授からうといふんですから、ちつとは我慢しなければね……。』

彼は微笑しながらいつた。

『何だ恵を授かる。』

『えゝ、たつた一つ。』

『だつてお互ひに罪が深いぢやないか。』

『それや然うだけ。』

『それ御覽な。それに如何してだ。』

『でもお祈りして見るわ。』

二人は爺やのコラを連れて来て居た。地理と習慣とを心得てゐるので、丁度案内によかつた。聽て彼等が馬車に乗ると、激しい鈴の音と共に駈け出した。馭者は帽子に孔雀の羽をくつゝけて、鹽シツ腹ハれた聲をしながら打鳴らす鞭の手を休めなかつた。イツボリタは爺やにきいた。

『あすこ迄どの位かゝるの。』

『半時間もかゝりますかな。』

『教會つて古いの。』

『そんなでも御座いませぬ。私等まだその以前の事迄知つとりません。なんでも五十年前までは、ほんの小ほけなお堂が一つしきや無かつたんですよ。』

彼は衣兜かぶとから四つ許りに疊かさねんだ刷すり物を一枚取出して、それを擴けてジオルジオに見せた。

『これを讀んで御覽下さい。縁起が詳くわしく載つて居りますんで。』

繪圖があつて、下の方に由來が書いてある。聖母マリアが天使に取巻かれて、橄欖の樹の梢にゐると、その根もとに一人の老爺おやぢが跪ひざまづいて禮讚してゐる。傳説には、一五二七年の六月十日、五旬節の日曜の夕方、カサルボルヂイノ一帶に凄まじい嵐が起つて、葡萄、小麥、橄欖を損ふ事が甚しかつたが、翌朝アレツサンドロ・ムチオといふ老地主が被害の程度を見届けに出た處、はからずも翡翠の衣をまとへる聖母が現れたといふ事を細かに書いてあつた。此の傳説といつても、不

思議を基に作り上げた外の由來記同様、單純なありふれたものに過ぎない。かうした第一の靈驗があつて以來、この聖母の功德で暴風の中から船が助かつたり、雹が降つても田畑が無事であつたり、旅人が盜賊の難を免れたり、病人が死から救はれたりした。不幸な人民の間に懸けられた此の畫像は、盡きぬ幸運の泉の様なものであつた。

『聖母マドンナも方々にありますが、是程靈驗あらたかなのは御座いますまいな。』尊い繪圖を元の様にしまふ時にコラ・ヂ・シアマムバニアはそれに接吻しながら、かういつた。『この頃又外に、同じ様なのが出來たつて事ですが、これにや敵ふもんですか。』

その調子や身振を見ても、如何に宗教上の熱狂が、偶像信者等の血を沸かせたり、アブルツチの住民を驅つて、自分達の偶像の尊さを思はせる爲に物凄ものごい闘争を開かせたりするかといふ事が分る。他の信者と同じく、此の老爺とても偶像を離れては神聖なる物を考へる事は出來なかつた。『おいこれ、アリジ。』老爺は埃の中をとほとほと苦しげに歩いて行く男にかう呼びかけた。『おい。』

それから老爺は主人達の方へ向き直つて、傷々しけにいつた。

『あれはつい近所の信神深い男で御座いますが、供饌たんかんをあけに行くと思えます。病み上りである通り息を切つて居ります。奥様。馭者臺にでも乗せてやつて下さいませんかね。』

『いゝともいゝとも。のせておやり。』とイッポリタが可哀さうに思つていつた。馬車は止つた。

『さあ、アリジヤ。お客様の思召しだぞ。然う思つて乗れ。』

信神深い男が近づいて來た。杖の上に折り重り、埃に塗れ汗だくくになつてゐた。そして喘ぎ喘ぎ黴暖聲を出した。

『有難う御座います。神の報いが御座いませう。聖母の護りをお受けになりませう。然し私は乗せて頂く譯にまゐりません。』

その男は左の手に、白いはんげちに包んだものをさけてゐた。

『供饌だらう。どれ、見せて御覽。』と老爺がきいた。

男はんげちの四隅を解いて、死人の脚の様に青く透き通つた蠟製の片脚を出して見せた。その表面には腐れ爛れた腫物が描かれてあつた。暑さで軟かくなつて、ざらざらと汗ばんでゐた。

『溶けかゝつて居るぢやないか。』といつて老爺は手を出して、蠟の脚に觸つてみた。

『おや軟かいね。お前歩いて行つた日にやあ、どろどろに溶けて了ふぜ。』  
それでもアリジはいつた。

『私はやつぱり乗せて頂く譯には参りません。歩く事に願掛けがしてありますから。』

といひながら、幾らか不安らしく、やぶ睨みの眼の高さ迄杖を差上げて、蠟の脚をしつべた。

かうした焼けつく様な、埃だらけの路傍で、燃える様な日光を浴び、かうした病みやつれた男と、切斷した脚の様に不氣味な青く透いた造り物とを見る位、心細くなるものはない。世の人々が、肉體に受けた色々な病を記念する爲に、ひとがた 佃を懸け列ねた壁の上へ、此の男の腫物の記念に此の脚を納めようとしてゐるのであつた。

『さあ、おい。』

といふ聲で馬は又駈け出した。幾つか小さい岡を後にして、路は熱しかかつた麥の茂つた田圃の中へ出た。老爺はアリジの病氣に就ての物語と、聖母の指のお庇で脱疽の癒つた事を語り聞かせた。

『お堂が見えてよ。』とイッポリタが叫んだ。

彼女の指さした赤煉瓦の建物は、廣い人混みの平野の真中に聳えてゐた。間もなく馬車は群集に追ひ着いた。

## 六

人と物とが是位盛んに集つたといふ事は、未だ嘗て見た事も聞いた事もない程、驚くべき光景であつた。そしてそこには種々雑多な恐るべき大混亂が醸されて聖母の宮を取圍んでゐた。

聖母の宮は、あら塗もしない赤煉瓦で築き上げた、飾り氣もなく、ぐんぐりした俗悪な建物であった。外側の壁や、立關の柱と向合つて、縁日商人等が天幕を張つて店を並べてゐる。よく流行る。すぐ傍に、圓錐の形をした田舎廻りの見世物小屋があつて、繪看板には血みどろの戦争や、食人種の大酒宴が出てゐる。下卑た怪し氣な、胡亂臭い男等が、聲を振り上げて木戸から客を呼立てる。面の皮の厚い、脚の太い、腹の膨れた女共が、汚點だらけの肉襦袢や、金モールの布子を前もはだけ勝ちに着て、後に垂れた緋色の緞帳に隠されてゐる不思議な見世物を、異體も知れない言葉使ひで業々しく吹聴した。然うした阿婆摺の一人は、粘々した口に唾へた餌を、淫らな猿の口に口移しした。その真近では、麥粉と朱で顔を塗り立てた一人の道化が、狂氣の様になつて、耳を痺らせる程に鈴を鳴らした。

行列は長い隊を組み、十字架持を先に立て、讚美歌を歌ひながら練つて來た。多くの者は瘰癧を病んでゐた。彼等の頸飾は暗褐色をした腫物の下から金色に輝いた。

ヴィイヴァ・マリア

群集の頭上に幾人かの巫女が互ひに向合つて、小さい臺に乗つてゐる。眼かくしをしてゐるの  
で口丈しか見えない。唄を歌ふやうに單調な抑揚をつけて、くどくどと述べ立て、は、聲を下げる度に首を下けた。折々は噴き出す唾液を呑み込む爲にちゅうちゅうと音を立てた。その中の一

人が、脂染みた骨牌を一枚見物に見せながら、『これは望みのかなふ錨で御座います。』

と叫ぶ。もう一人の女は見物の方へのし掛つて、脈のたつた太い手を膝に載せた儘、一かたまりの銅貨を前掛の凹みに入れてゐる。環を作つた見物は、一言も閉き落すまいと瞬きもせず身動きもしない。唯時折乾きつく唇を、舌の先で舐めずり廻すだけである。

ヴィイヴァ・マリア

又もや巡禮の列が、着いたと思ふと行過ぎて消え失せて了ふ。そちこちの小屋の蔭や、青色の大傘の下や、さもなければ日向でも構はず、性も無い迄に疲れた老婆等が、兩手に顔を押當て、枯草の上に眠りこんで居る。又環になつて脚を投げ出して、麵麩や豆をもぐもぐと嚙つてゐるものもある。大抵の者は傷痕や痘蓋で掩はれて、齒もなく、髪もない。その女等は眠りもしなければ物も喰はず、じつと唯諦めて死を持つ許りの様に見える。その周圍には青蠅が雲の様に群つて飛んでゐる。かと思ふと屋臺店の中では、天幕の下で飾りをした棒杭を取巻いて、盛んに物を喰つてゐる奴等もある。紫色の軟かな肉の一杯入つた大鍋は、地面の竈に切抜いた圓い穴の中でほかほか湯氣を立て、美味さうな匂を四邊一面に漂はした。瘦せた一人の若い娘は馬や鳥や花の形にした乾酪を長く並べて客に出してゐる。金の耳環を下けた染物屋らしい男が、手先から腕の邊り迄をアニリンに染めた儘で、毒々しい氷菓子を買つてゐた。

ヴァイヴァ・マリア

巡禮の列が來たり行つたりした。會堂がもう人で一杯になつて了つて押込む事も出来ないので群集は立關前で大浪を打つてゐる。それを見掛けて様々な手品師や、賭博打ちや、詐欺師や、香具師などが客一唾へ込んでなぶり物にしてゐる。莫大な儲けが出來さうに見せかけて、有らゆる手管で田舎者を釣り寄せてゐる。そしてうまく騙して、氣拔けのした様な、みじめなその者の姿を鼻の先でせせら笑ひながら、彼等は巧みに身を隠す。かうしてまる一年の間貯へる爲に出來る丈の不自由を忍んで來た農民の困苦は、一朝にして煙となつて了ふのである。

ヴァイヴァ・マリア

マリア・エツヴァイヴァ

巡禮の列が來ては通り過ぎた。ジョルジオとイッポリタの二人は、暫らくの間氣拔けがしてふらふらしながらも、此の恐しい人ごみを見つめてゐた。到頭見るのも苦しくなつて、駈け出してしたたくもなつたが、それでも此の光景の力強さに、彼等は尙人いきれの中に止まつてゐた。『會堂の方へ行きたいわ。』とイッポリタは、殆ど正氣を失つた様になつていつた。『疲れやしないか。』女の手を取つてジョルジオがきいた。『そいぢや此處を去らう。何處かへ行つて休まうぢやないか。でないと氣分が如何かなるかも知れない。行かう、行かう、ね。』

『いやよ。大丈夫。何ともないわ。もつと行つて中へ入つてみませうよ。ほら皆あつちへ行ぐわ。如何でせう、あの聲つたら。』

確かに女は苦しいのであつた。口元を初め顔の筋肉がひきつれてゐた。そして爪の先でジョルジオの腕を引つ搔いた。それでもやはり會堂の扉から眼ははなさなかつた。

『如何でせう、あの聲は。』

然ういつて彼女はよろよろした。叫喚は虐殺の聲の様に聞えた。大勢の男女が互ひに咽喉を刺し違へて、血の沼の中に喘いでゑもゐるかの様だに聞えた。

『みんなあゝしてお助けを願つて居るんです。』と一時も客の側を離れなかつたコラがいつた。『行つてみませうか。』

『あゝ。行つてみようね。』とイッポリタがきつぱりといつた。

爺やの前に立つて兩肘を張りながら、立關の方へ近寄つた。イッポリタは男の腕で運ばれて、足は殆ど地に着かなかつた。ジョルジオは自分と女を支へる爲に力の限りを出した。一人の女乞食が悲しい聲を出して、彼等に追ひ縋つて施與を求めた。

やつと彼等は立關に辿り着いた。そして珠數を賣る店の傍にある柱に身をもたせた。行列は、中へ繰り込む順番の來る迄、會堂の周圍を廻り出した。兎唇、瘰癧、丹毒、腺病、膿疱、その他

人間の肉のあらゆる醜いものが、日光の下に、聖母の宮の前を續いて行つた。どの講中にも十字架と先達とがあつた。先達は逞しい荒つぽい男で、絶えず狂氣の様に喚いたり騒いだりして、信徒の氣を引立てゝ行く。眼をぎよろつかせた一人の男が、三人の女に馬の手綱をつけて引き摺つて行つた。又別に一人の女が裸體の上に袋をかぶつて、頭と手だけを出して前に立つて歩いた。もう一人ひよろ長い瘦せこけた女が、歌も歌はず首も振らず、幽霊の様に前に立つて行つた。又野獸の様に亂暴な一人の女は、眞紅のマントを骨張つた臀の周圍に捲き附けて、仲間の者を勵ます爲に黒色の十字架を振り廻した。

ヴァイヴァ・マリア

彼等は休みなしにぐるぐる廻つた。足を早め聲を高めた。魔物の様な叫び聲と動作をして益々興奮する許りであつた。頭髮の大方抜け落ちた幾人かの若い娘等が、後悔に満ちた眼を地上に落として、列を組んで行く。四人の男が、深い棺の様な物の中へ一人の中風病みを載せて擔いで行く。此の男から少し離れて、荒くれ男等が一人の狂人を腕力で引き摺つて行く。お禮詣りのアリジも、今はあの蠟の脚より青い顔をして通つて行つた。そしてすべての講中が、涯しなく廻つては、繰返し繰返し通つて行つた。突いたり、突き返したりしながら夢中になつて一様に押して行く様は、もう一個人の集りとは見えないで、一種の廻轉力を有してゐる一塊の物質とも思はれるやうだつた。

うだつた。

ヴァイヴァ・マリア

マリア・エツヴァイヴァ

群集の中の若者が一人、急に癩癩を起して卒倒した。彼を取巻いた近所の者達が人混みの中から連れ出した。境内に居た大勢の者が、群を離れてそれを見に駆け出した。

『如何したんでせう。』かうイッボリタがきいた時にはもう眞青になつて、顔にも聲にも際立つ程の動搖が見受けられた。

『何でもない、何でもない。日射病だよ。』

然ういひながらジョルジオは、女を抱くやうにしてわきへ連れて出ようとした。

然しイッボリタは事實を知つた。彼女の眼の前で、二人の男が癩癩持の口を力任せに引き開けて、鑰を喰はへさせてゐる。それは舌を喰ひ切らない爲らしかつた。すると、その聯想で、自身自身の歯と歯とがぎり／＼と軋み合つてゐる様な感じがして、例の身頭が全身を揺つた。その身體の内には癩癩が潛伏してゐて、何時でも發作する傾向を持つてゐたのである。

『聖ドナートの病氣でせう。心配する事は御座いませんよ。』とコラがいつた。

『さあ、あつちへ行かう。』と不安になつたジョルジオは、切りに彼女を連れださうとした。



『若しも此の女が今突然に卒倒したら。此の人混みの中で病氣が起つたら。』とジョルジオは考へてぞつとした。

『あつちへ行かうぢやないか。會堂へ入らうつていふのか。』  
けれども返事がないので、

『入る氣なのかい。』と又いつて女を揺ぶつた。遂に我知らず、もどもどした口からかうきいた。  
『氣分がいけないのか。』

『いゝえ何とも。』驚きの餘り、眼に見える程顛へてゐる女は、かういつてジョルジオに寄り縋つた。

イツボリタが先づ會堂の方へ足を向けて、玄關へと進んで行つた。その前には、小さい蠟燭火の明滅する邊に立ちこめた香の高い煙が、亂入する群集の頭上に漂つてゐた。

『入つてみませう。』男に縋つた儘、押出した様な聲をして女がいふ。

コラは、逆も正門からなぞ入られるものでない事を言ひ聞かせていつた。

『だが小門の方を知つとりますから、私に随つていらつしやいませ。』

彼等はやつとの事で群集を押し分けて行つた。つまり、附け元氣に乗せられて、盲目な意地に驅られたのであつて、かの逆上した信徒等が、何處迄も何處迄もと押しして行くのと餘り相違はな

かつたのである。二人はそれに感染して了つた。最早ジョルジオは自分の本心を失つて了つた事を感じた。神経ばかり荒々しくなつて、感覺の亂調と過敏だけを感じた。

『随つていらつしやいませ。』といひながら、コラは人中を肘で押し分けて、主人達を無事に護らうと必死になつてゐた。

横門を潜つて、聖器所の様な處へ入つた。見ると青い煙を透して、壁一面に蠟製の奉納物が懸つてゐるのは、聖母の奇蹟の證據である。それは恰も病院の貯肉室を想像させた。生氣のなくなつた人間の身體は、石疊の上を山と掩うてゐる。大抵は老人で、痙攣して、祭壇の前で倒れたのを手舁で連れて來られたものである。一人の老爺が、啜り泣く二人の男に擔がれて入つて來た。血の滴が鼻と唇と顎との傷口から滴れて、襯衣の上へばらばらと落ちた。それから絶望の叫びが續いて聞えた。

『マドンナ(聖母)。マドンナ。マドンナ。』

幾千とも知れない腕が、野蠻人の様な熱狂を以て祭壇の方へ差し出された。女達は膝頭で乗り出して、しくしく泣き出し、數石に額をつけて、何かに憑かれてもした様に身を悶えてゐる。中には四つ這ひになつて、じりじりと祭壇の方へにじり寄つて行く者もある。時としては、唇が埃を舐めたり、遂には舌でもつてその埃の中へ十字架を書いたりして行く。處々には男が一人づゝ

棒の先で、石盤をこつこつ叩いては、祭壇の方へ道を教へてやつてゐる。親類縁者の女達は、その両側を膝で歩きながら、苦行の見張りをしてゐる。折々、傍へ寄つては介抱したり、布ぎれで顔を煽いでやつたりする。女ばかりではなく、老人も青年も少年も、またやはり祭壇に近づく爲に、聖像に眼を向けて貰ひたい爲に、喜んで此の苦行に従ふ。時々青い香の波が、緩やかにこれらの列の上に漂つて、哀れなる者、希望に満ちた者、悲しめる者達を情深く包んだ。

『マドンナ。マドンナ。マドンナ。』

母親達は胸をはだけて、萎びた乳房を聖母に見せて、乳の恵みを祈つてゐると、後では身内の者等が、死ぬ程に衰へ切つて、きい／＼いふ幼な兒を抱いてゐる。妻君達は痩せた腹に子供の宿る様にといつて、婚禮の衣裳や髪飾などを献げる。

『聖マリア、願はくは爾の御腕に抱かれ給へる御子の御名によりて、我等に聖寵を垂れ給はんことを。』

初めは小聲で涙と共に苦痛を訴へてゐるが、次第に熱して遂には聲を限りに叫び出す。

『我等の祈を聞き入れ給へ。我等の祈を聞き入れ給へ。』

又しても別の信徒の群が浪の様に押し込んで来て、鐵格子の長さ一杯に廣がつて場所を取る。此の祭壇を隔てゝゐる格子の中では、大勢の僧侶達が、青膨れの手を出して錢や飾り物を受け取つ

てゐる。右の手、左の手と、交互に突き出して身體をふらふらさせてゐる恰好は、動物園の野獸と相違はなかつた。その背後には世話係が控へてゐて、大きな金の盆の中へちやらちやらと供物を取り入れてゐる。聖器所の扉の近くでは大勢の僧侶達がテーブルに集つてゐる。それが金高を勘定したり、寶玉を鑑定したりしてゐると、骨太い赤毛の一人が、一々羽筆がびんで大きな帳面へつけてゐる。

『天主の聖母、我等の爲に祈り給へ。』

『基督の約束に我等をかなはしめ給へ。』

時折思ひがけない沈黙が起つて、群集の間に期待の緊張が行き渡ると、その度毎に此の羅句語が明かに聞く事が出来た。

『主よ、此の民を顧りみ給へ。』

正門か一組の夫婦者が入つて来た。大勢の縁者達に取巻かれて、金を閃めかし、さやさやと絹の音を立てゝゐる。妻は元氣があつて若々しく、肉附がよくて血の氣のある口をしてゐた。大きな金の珠数が頸の周圍を三重に巻いてゐて、兩耳には大きな金環が垂れてゐた。おづおづと歩いて行く中にも、瞬きもしない程物思ひに沈んで、指環を嵌めた片手は夫の肩に乗せてゐる。夫も同じく若い。中背で髭らしいものもなく、血色のよくない上に深い悲しみを抱いてゐるのは、隠

れた病氣のせるかと思はれる。囁く聲が彼等の通り道に傳はつた。『どんな祈願を籠めに來たんだらうかなあ。』『如何いふ御利益を授からうといふのだらう。』『若い亭主の方が何かの祟りたで子供をこしらへる事が出来なくなつたので、それが得たさに願掛けするのであつた。妻は今でも處女である。新床はまだ初めの儘で残されてゐた。』

夫婦は格子に寄り添つて、黙つて尊像を打ち見上げ、暫く黙禱に沈んでじつとしてゐた。此の夫婦の後には、兩方の母親が腕を差し出して、枯木の様な手先を打ち振つては叫び出す。

『マドンナ。マドンナ。マドンナ。』

落着いた身振で妻は指環を抜き取つて献げる。續いて重い金環も取つた。代々の寶物である鎖もはづした。すべてそれ等の貴重品は、残らず祭壇に供へられた。

『聖寵深き處女、最も神聖なる奇蹟のマリア、受け入れ給へ。』と二人の母はかすれた聲でいつた。『受け入れ給へ。受け入れ給へ。』

黄金は落ちた。落ちて無感覺な僧侶の手に入つた。かうして家傳の寶物は、忽ちにして永久に消え失せるのであつた。やがて夫婦者は初めの位置に歸つて、眼をきつと尊像に注いだ儘、靜かに後ずさりした。

ジオルジオはほんやりとその人達の消えて了ふ迄見送つた。

折々彼はイッポリタと顔を見合した。互ひに青ざめて、弱り切つてゐる事に氣が附いた。けれども二人とも氣力は盡き果てゝるながら、まだやはりどちらからも此の凄まじい場所を去らうかとは言ひ出さなかつた。

『マドンナ。マドンナ。マドンナ。』

誰かと見ると、あの爬蟲動物の様な恰好をしてゐた女達が、何時の間にか目的地に着いて立ち上つたのであつた。その中の一人が死骸の様に固くなつてゐるのを、身内の人々が助け起した。顔一面に埃を浴びて、額や鼻の皮が剥け、口からはどろどろと血が流れてゐた。介抱の者等は正氣附かせようとして、息を吹つ掛けたり、身體を揺つたり、その耳許で名前を呼んだりした。するとその直ぐ後には、他の女達が立ち騒いで、よろめきながら元氣を取直して哀願してゐる。

『グラチア(聖寵)。グラチア。』

その中に皆聲をからして青ざめてくる。ばつたりと倒れる。それが擔ぎ出されると、又入れ替つて外の女達が、又地面から匂ひ上つては、

『グラチア、グラチア。』と叫んだ。

叫喚は人々の胸底から迸り出る。絶えざる祈願には何といつても屈せぬといふ一念が籠つてゐる。體と體との接觸、呼吸と呼吸との混交、血と涙との散亂。是が爲に群集の全體が唯一つの靈

魂に動かされてゐる様な感じを與へた。哀れな凄まじい唯一つの物體と化し、唯一様の動作と聲と痙攣と狂亂とがあるばかりであつた。色々な種類の病氣は唯一種の病氣に溶け合つて、聖母の治療を待つばかりになつてゐた。

『グラチア。グラチア。』

そして見るも眩しい聖像の下では、多くの蠟燭の焰は此の熱情の風に吹かれてゆらめいてゐた。

## 七

ふと氣がつくとジョルジオとイツポリタの二人は、人混みを離れた明るい樹の蔭で、生命から難破船から逃げて來たといつた風に、ほんやりと氣を失つて坐つてゐた。此の邊はまるで淋しく、眼に見えるものは唯二三本の橄欖の樹と、駄馬の一群が静かにゐる計りである。群集の喧騒が遠く聞えて來る。巡禮が長い行列を作つて、會堂をぐるぐる廻つて出たり入つたりするのも見える。

『眠いかい。』イツポリタが眼瞼を閉ぢたので、ジョルジオがきいた。

『いゝえ。だけど妾もう見てゐる氣になれませんの……。』

然ういへばジョルジオとても嫌な氣がしないではなかつた。彼は立ち上つた。

『さあ、お立ちよ。もつと遠くの方へ行つて休まう。』

二人は田の作つてある谷合に降りて樹蔭を搜した。日光は容赦なく照りつける。二人ともサン・ヴィイトのわが家の、海を受けて風通しのいゝ、美しい部屋が戀しくてたまらなくなつた。

『ひどく苦しいんぢやないのか。』とジョルジオは苦しきやうな女の顔を見ていつた。

『いゝえ。そんなでもないのよ。』

『眠いんだらう。いゝぢやないか少し寝たつて。俺に寄つ掛るといゝ。すぐ氣分が治るから。ね。』

『いゝの。いゝのよ。』

『寄つ掛れつてのに。その間にコラが歸つて來るから、それからカサルボルディノへ行かう。それ迄お寝よ。』

女は帽子を抜いで男の方へすり寄つて頭をもたせ掛けた。男はその姿に見とれていつた。

『美しいな。』

女はにつと笑つたが、直ぐ又苦しきやうな顔をした。

『前に接吻してから大分長い事になるぢやないか。』

二人は互ひに寄り添つた。

『さあお寝み。』と優しくいつて彼はなだめた。異常な、奇怪な出來事に遭遇して來たジョルジオ